

楠

野

大分県竹田市所在遺跡発掘調査報告書
大分県文化財調査報告

第 63 輯

1983

大分県教育委員会

楠

野

序 文

阿蘇・九重・祖母・傾山系に無数の水源を發し、合流して東に流れる大野川は、県下最大の水量を誇っています。母なる川、大野川は、太古の時代から人々に多くの恵みを与えてきました。

この大野川上・中流域は、県下有数の畑作地帯として知られていますが、反面この地域は、毎年人口減少の一途をたどっている過疎地域でもあります。なかでも農村地帯は深刻な問題となっており、後継者育成をはじめとして農業の近代化が急務となっております。このため、県農政部が中心となって耕地の拡大・再編成、農道の整備といった土地改良事業を計画・実施しているところであります。

しかし、文化財保護上の土地改良事業の進展に対応して埋蔵文化財の保護ということが重要な課題となってきました。

竹田市に所在する楠野遺跡は、そうした土地改良事業に伴い緊急的に調査された遺跡であります。調査は、昭和53年11月から昭和54年3月の厳寒期に行なわれ、多くの成果をあげました。その後、資料の整理・検討をへて集約されたものが本報告であります。

この報告書が学術研究の資料として、また郷土の文化遺産を知る参考資料として多くの人々に活用されるならば望外の幸せであります。

終りに長期にわたって、楠野遺跡の調査・整理作業にご協力いただいた関係者の皆様に対し、衷心より謝意を表する次第であります。

昭和58年3月31日

大分県教育委員会教育長

手 島 誠 一

例 言

1. 本書は大分県教育委員会が昭和53年度に実施した大分県竹田市所在の楠野遺跡群の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は大野川上流域竹田地区畑地帯総合土地改良事業及び圃場整備事業に伴う緊急調査として実施した。
3. 本書の執筆は後藤宗俊、清水宗昭、玉永光洋、後藤一重、吉留秀敏（現岡山大学埋文調査室）、小柳和宏（現竹田市文化財調査員）が担当した。なお、執筆者は、章の末尾に記した。
4. 遺構の実例は調査員、調査補助員があたった。遺物は、縄文土器―後藤一、石器―吉留、弥生土器、土師器―玉永・後藤一・小柳、その他―玉永があたった。整図は永松みゆき・榎本陽子嬢（県文化課嘱託）の協力をえた。
5. 遺構・遺物の写真撮影は、牧尾・玉永が担当し、小林昭彦氏（文化課嘱託）の協力をえた。
6. 石材の同定については、野田雅之氏（日本古生物学会特別会員）のご教授による。
7. 表紙の題字は文化課長原尻實の揮毫による。
8. 本書の編集は玉永があたった。

目 次

I	菅生台地と周辺の地理的・歴史的環境	1
1	地 理 的 環 境	1
2	大野川上流部の気候	1
3	歴 史 的 環 境	2
4	基 本 層 序	3
II	遺跡の立地と環境	5
III	調査区の設定と調査の経過	5
IV	調 査 団 の 構 成	7
V	調 査 の 成 果	8
1	発見された遺構・遺物	8
2	A地区（聚穴群）の調査	8
3	B地区（方形周溝墓）の調査	49
VI	ま と め	60
1	土 器 の 編 年	60
2	その他の土器の時期	72
3	集落と方形周溝墓について	73
4	大野川上流域の畑作農耕について	81
VII	縄 文 式 土 器	89
1	縄 文 早 期	89
2	縄 文 晩 期	91
3	その他の縄文式土器	104
4	ま と め	106
VIII	先土器時代・縄文時代の石器	111
1	K J I 地区出土の石器	111
2	K J II-a・b地区出土の石器	112
3	ま と め	128

挿 図 目 次

第1図	大野川上流域主要遺跡分布図	2～3の間
第2図	柿野遺跡発掘区概略図	6～7の間
第3図	A地区の遺構配置図	8～9の間
第4図	第1号竪穴実測図	9
第5図	第1号竪穴出土土器実測図	10
第6図	第1号竪穴出土石器実測図	10
第7図	第2号竪穴実測図	11
第8図	第2号竪穴出土土器実測図	12
第9図	手 鎌 実 測 図	15
第10図	第3号竪穴実測図	15
第11図	第3号竪穴出土土器実測図	16
第12図	第4号竪穴実測図	18
第13図	第4号竪穴出土土器実測図	18
第14図	第5号竪穴実測図	19
第15図	第5号竪穴出土鉄鎌実測図	20
第16図	第5号竪穴出土土器実測図	20
第17図	第6号竪穴実測図	21
第18図	第6号竪穴出土土器実測図	22
第19図	第7号竪穴実測図	22
第20図	第7号竪穴出土土器実測図	23
第21図	第8号竪穴実測図	24
第22図	第8号竪穴出土土器実測図	24
第23図	第8号竪穴出土土器実測図	24
第24図	第9号竪穴実測図	25
第25図	第9号竪穴出土土器実測図	26
第26図	第9号竪穴出土石器実測図	27
第27図	第10号竪穴実測図	27
第28図	第10号竪穴出土土器実測図(1)	28
第29図	第10号竪穴出土土器実測図(2)	29
第30図	第10号竪穴出土土器実測図	30
第31図	第11号竪穴実測図	31
第32図	第11号竪穴出土土器実測図	31

第33図	第11号竪穴土器実測図	32
第34図	第12号竪穴実測図	33
第35図	第12号竪穴出土管玉・砥石実測図	34
第36図	第12号竪穴出土土器実測図	34
第37図	第13号竪穴実測図	36
第38図	第13号竪穴出土土器実測図	36
第39図	第13号竪穴出土砥石実測図	36
第40図	第14号竪穴実測図	37
第41図	第14号竪穴出土土器実測図	38
第42図	管玉実測図	39
第43図	第14号竪穴出土刀子実測図	40
第44図	第14号竪穴出土土器実測図	40
第45図	第15号竪穴出土砥石実測図	40
第46図	第15号竪穴実測図	41
第47図	第15号竪穴出土土器実測図	41
第48図	第16号竪穴実測図	42
第49図	第17号竪穴実測図	43
第50図	第17号竪穴出土土器実測図	44
第51図	第17号竪穴カマド実測図	46
第52図	第17号竪穴出土紡錘車実測図	48
第53図	第2号方形周溝墓周溝内土坑実測図	49
第54図	方形周溝墓追構実測図	50~51の間
第55図	方形周溝墓周溝土層図(1)	51
第56図	方形周溝墓周溝土層図(2)	52
第57図	方形周溝墓出土土器位置図	54
第58図	方形周溝墓出土土器実測図(1)	55
第59図	方形周溝墓出土土器実測図(2)	56
第60図	方形周溝墓出土鉄鍬位置図	59
第61図	方形周溝墓出土鉄鍬実測図	59
第62図	守岡遺跡19号住居跡出土土器実測図	64
第63図	浜遺跡出土土器実測図	65
第64図	日当遺跡出土土器実測図	66
第65図	小岡遺跡 第107号住居跡出土土器実測図	67

第66図	小園遺跡 第110号住居跡出土土器実測図	68
第67図	牧ノ原遺跡第8号方形周溝墓出土土器実測図	69
第68図	石井入口遺跡第26B号住居跡出土土器実測図	69
第69図	おごもり遺跡1区方形周溝墓出土土器実測図	70
第70図	楠野台地集落分布図	73
第71図	A地区古墳時代中期整穴分布図	75
第72図	C地区遺構配置図	77
第73図	楠野遺跡K J I地区出土土器実測図	90
第74図	楠野遺跡K J II-a地区出土土器実測図(1)	94
第75図	楠野遺跡K J II-a地区出土土器実測図(2)	95
第76図	楠野遺跡K J II-a地区出土土器実測図(3)	96
第77図	楠野遺跡K J II-a地区出土土器実測図(4)	97
第78図	楠野遺跡K J II-b地区出土土器実測図(1)	100
第79図	楠野遺跡K J II-b地区出土土器実測図(2)	101
第80図	楠野遺跡K J II-b地区出土土器実測図(3)	102
第81図	楠野遺跡K J II-b地区出土土器実測図(4)	103
第82図	楠野遺跡表探その他の縄文式土器実測図	105
第83図	楠野遺跡K J I地区の石器	111
第84図	石器図面記号の意味	112
第85図	楠野遺跡出土石器実測図(1)	115
第86図	楠野遺跡出土石器実測図(2)	116
第87図	楠野遺跡出土石器実測図(3)	117
第88図	楠野遺跡出土石器実測図(4)	120
第89図	楠野遺跡出土石器実測図(5)	121
第90図	楠野遺跡出土石器実測図(6)	122
第91図	楠野遺跡出土石器実測図(7)	123
第92図	楠野遺跡出土石器実測図(8)	124
第93図	楠野遺跡出土石器実測図(9)	125
第94図	楠野遺跡出土石器実測図(10)	126
第95図	後期後半～晩期前半の打製石斧の石材	129
第96図	後期後半～晩期前半の打製石斧の相関図	131
第97図	後期後半の打製石斧の相関図	132
第98図	晩期前半の打製石斧の相関図	132
第99図	後・晩期石斧比較図	133

表 目 次

第1表	土器分類表(1)	62
第2表	土器分類表(2)	63
第3表	大分県内古式土師器編年表	71
第4表	楠野遺跡堅穴一覧表	76
第5表	方形周溝墓一覧表	78
第6表	桔原・菅生地区近世村落の石高と畑地帯	82
第7表	応永20年「段銭結解上代」による直入郷の畠田面積	83
第8表	楠野遺跡K J I 地区出土土器観察表	89
第9表	楠野遺跡K J II-a 地区出土土器観察表	93
第10表	楠野遺跡K J II-b 地区出土土器観察表	99
第11表	楠野遺跡表採・その他の縄文土器観察表	104
第12表	楠野遺跡縄文晩期土器編年表	107
第13表	楠野遺跡K J II-b 区土器組成表	110
第14表	楠野遺跡石斧(磨・打製)・磨石観察表	114
第15表	楠野遺跡剝片・剝片石器類石材別表	118
第16表	楠野遺跡剝片石器・石核観察表	119

付 図

楠野原台地の地形図及び検出された遺構配置図

図 版 目 次

- 図版1 楠野台地航空写真
図版2 楠野A地区東側近景
図版3 楠野A地区西側近景
図版4 第1号竪穴・第5号竪穴
図版5 第2号竪穴
図版6 第3号竪穴
図版7 第6号竪穴・第7号竪穴
図版8 第8号竪穴・第9号竪穴
図版9 第10号竪穴
図版10 第11号竪穴・第12号竪穴
図版11 第13号竪穴・第14号竪穴
図版12 第15号竪穴・第16号竪穴
図版13 第17号竪穴
図版14 方形周溝墓群全景
図版15 第7号方形周溝墓・第2号方形周溝墓
図版16 第6号方形周溝墓・第3・4・5・7号方形周溝墓・第1号方形周溝墓
図版17 第7号方形周溝墓北溝・第2号方形周溝墓北東コーナー部・
第6号方形周溝墓南東コーナー部
図版18 第2号方形周溝墓南溝土壇墓
図版19 竪穴出土土器(1)
図版20 竪穴出土土器(2)
図版21 竪穴出土土器(3)
図版22 方形周溝墓出土土器(1)
図版23 方形周溝墓出土土器(2)
図版24 鉄器・管玉・紡錘車
図版25 縄文式土器KJⅡ-a地区・KJⅡ-b地区
図版26 打製石斧(1)
図版27 打製石斧(2)・磨製石斧
図版28 剥片石器(1)
図版29 剥片石器(2)

I 菅生台地と周辺の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

九州島のはほぼ中央部に位置する阿蘇火山は、その噴出物を広大な範囲に堆積させている。なかでも大野川上中流部にあたる阿蘇外輪山の東麓一帯は、北は九重火山群、南は祖母・傾山系に挟まれる地溝部にあたり、その間に流出した熔結凝灰岩を基盤とする平坦な台地となっている。とくに菅生台地を中心とする大野川上流部は、外輪山の東縁に連なるように標高450～700mの高原状の一大台地を形成しており、さらにこの台地は大野川の支流によって東西方向に長い無数の台地群を構成している。これらは、菅生原台地を中心に南には柏原、葎原、北には久保等の台地群に大別できるものであり、その東縁はほぼ400mの高度で竹田盆地を囲む断崖となり、断絶性の大きな地形を形成している。

このような火山性の台地は、大野川中流部の大野原台地にもみられ、いずれも弥生・古墳時代集落が集中するという点で好対称をなしている。しかし、高度の面で上流部は平均500～600m、中流部は200～250mと大きな差があり、地形的な隔絶性において上流部の台地群は、はるかに際立った地域性を有しているといえる。

一方地理的な位置からいえば、大野川上流部は肥後地方と豊後地方の中間に位置し、さらに外輪山の屋根伝いには北部の日田地方、南部の日向高千穂地方とも通じるという。交通の要衝にあたることも見落せない。さらに各々の小台地が接する支谷には、自然湧水が見られ、その多くは生活用水として利用されてきた点も遺跡の立地を考えるうえで大きい要素となっている。

このような大野川上流域の地理的特徴は、とくにその中心にある菅生台地において顕著であり、そのことが縄文時代から古墳時代にいたるまで遺跡が集中する立地条件となっていたと考えられる。

2. 大野川上流部の気候

大野川流域の気候区分は、大きくは西瀬戸内地区に含まれるものの、九州山地に接する地形的要因も加わって、気候要素の分布が東西方向に変化していくという特徴をもつ。これによれば、下流部と上流部の気候差は大きく標高400mの等高線を境にして上流部は典型的な山地型の気候となっている。

このため、菅生台地を含む大野川上流部の降水量は、年間平均2,200mmにも達し1回の降水量も下流部に比べて大きい。このためか干天がつづく確率も上流部ほど小さくなり、連続25日以上の干天は、上流部では20年に1回の割合となっている。これは山地型独特の夏季の熱対流性降雨（にわか雨）によるものと見られ、水利の悪い高原性台地での農耕の有利な自然条件の一つとなっている。

ともあれ、菅生地区の年間平均気温は13℃前後と、大野川下流の平野部に比べてかなり低く、年間および1日の気温隔差も大きい。この条件は、菅生台地を中心とする上流部の気候が先史時代にあってきびしいものであったこと示し、またわずかの気候変化が不安定なこの地域の農耕に大きく影響を与えたであろうことは想像に難くない。

3. 歴史的環境

菅生台地を中心とする地域は、先史時代の各時代にわたって人類の活動の痕跡を濃密に認めることができる。

この台地上に最初に足跡を残した人々には後期旧石器時代人である。気候的にはヴルム氷期の厳寒期であったと推測されるが、小園・内河野・上岩戸（荻町）遺跡等でナイフ形石器、剥片尖頭器、石核、礫器、台形礫石器等が出土している。その分布は大野川中流部と比べると希薄であるが、これはこの地域での文化圏が深い部分にあることに起因するものとみられる。このあとの後氷期に入って、政所馬渡遺跡（荻町）で縄文草創期の土器と細石核が出土しており、この地域にもいち早く初期の土器文化が発達していたことを示してくれる。

ひきつづいて縄文時代早期になると遺跡数は急速に増大し、この地域でも各地に分布をみることが出来る。菅生地区のヤトコロ・上菅生B・下菅生B・西園南・桑木遺跡、荻地区の寺ノ前、政所馬渡遺跡に代表される押型文土器の文化である。これにつづく縄文前期は、早期の遺跡がそのまま重複するものが多く、また、この時期には、右京遺跡（荻町）のように台地上に立地するものと、竜宮洞穴・野鹿洞穴のような河谷に面する洞穴を利用した遺跡も発達している。

次の縄文中期の遺跡は大野川上流部でも少なく、その実態はほとんどわかっていない。

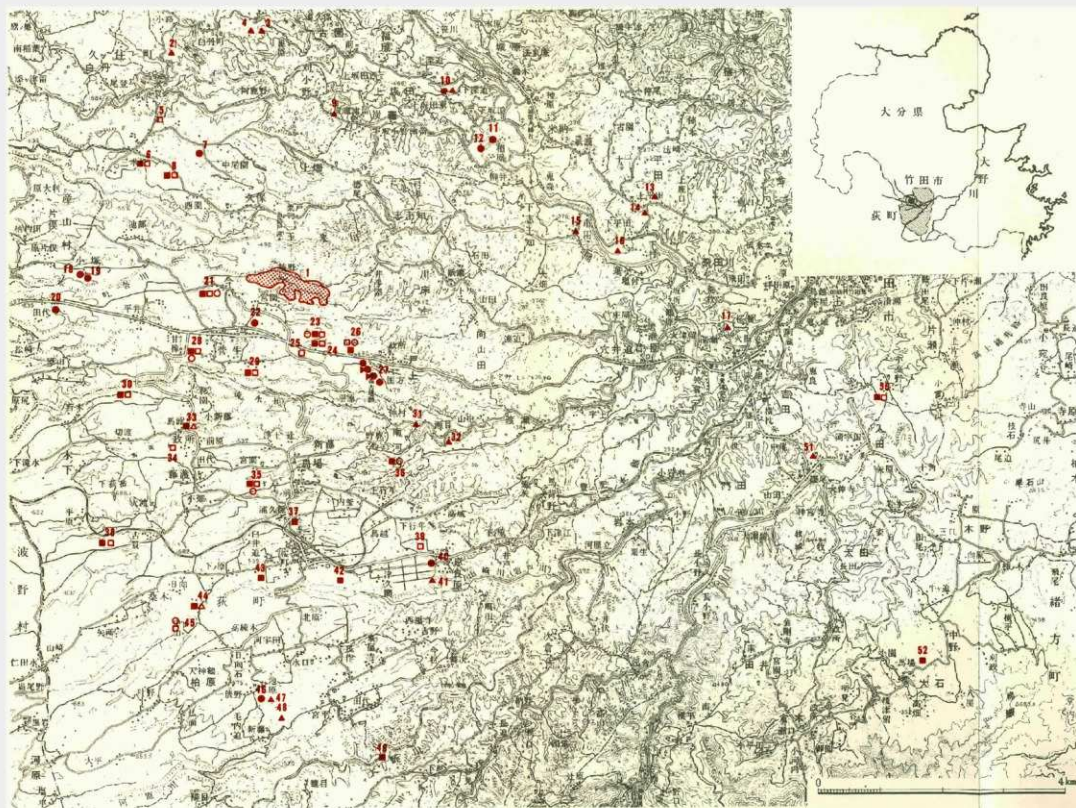
縄文後期になると、コウゴロ松遺跡（久住町）が最も早い段階のものと知られ、つづいて寺ノ前・内河野遺跡等で鐘ヶ崎式系の土器を主体とする文化がみられるようになる。また縄文時代を通じて一つの大きな画期とみられる後期後半の段階（三万田・御簀式期）は中流部に比べてその分布は希薄である。

縄文晩期に入ると、それまで比較的分布の少なかった上流域の台地上に急激に遺跡数が増大してくる。この時期の遺跡の立地は、遺跡密度の高い弥生時代の集落跡と重複するものが多い。その代表的遺跡は大石遺跡（緒方町）にみられるもので、その石器・土器組成を分析した賀川光夫氏によって原始農耕が提起されている。その他の主な遺跡としては、小高野・上菅生B・梶野・浦久保（荻町）遺跡等がある。

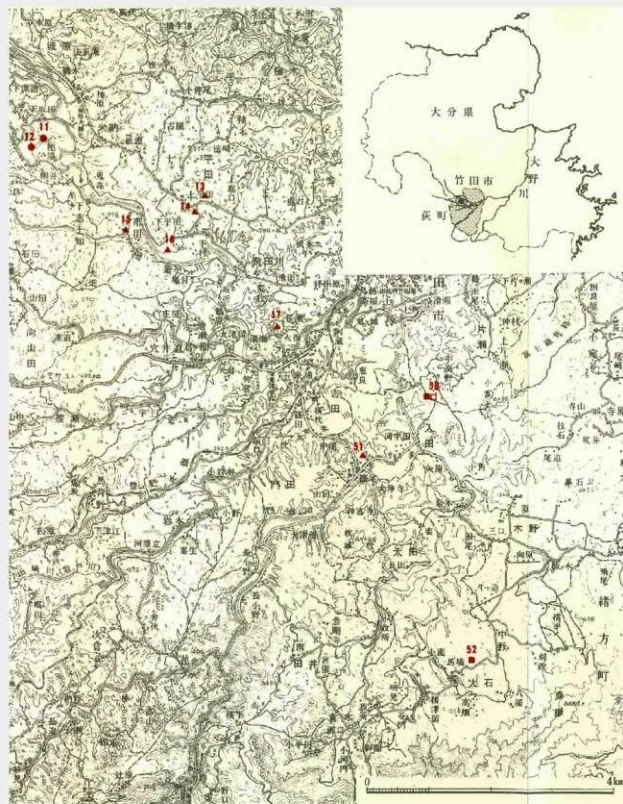
晩期後半から終末になると、遺跡数は前半代に比べると半数以下となり、衰退の一途をたどる。上流部ではネギノ、小園、横迫（荻町）遺跡等が知られている。

弥生時代では、前期においても、遺跡数は極端に少なく、晩期末とはあまり変らない状況が考えられる。しかし、弥生時代を特徴づける板付系の土器がわずかに小高野・内畑（久住町）遺跡で確認されており、わずかではあるが新たな波の招来を感じる。前期の状況は中期中葉頃までつづいており、下城式・須玖式・黒髪式系の土器が石井入口・田頭・小園遺跡等のいくつかの遺跡で出土しており、ふたたび遺跡数は増加しはじめる。

後期になると、遺跡数は急激に増大し、上流部の各台地上に展開して行く。遺跡は各台地の湧水を中心にして分布しており、菅生台地周辺においても、小園・石井入口・平井・開拓14号・ネギノ・原山天神裏・内河野・坂井尾・田代等の遺跡がある。これらの遺跡群の大半は後期後半～終末期



第 1 図 菅生台地と周辺の遺跡分布図



- | | |
|------------|------------|
| 1 網野遺跡 | 27 ヒツ森古墳群 |
| 2 西小路横穴 | 28 上菅生B遺跡 |
| 3 太田横穴1号 | 29 下菅生B遺跡 |
| 4 太田横穴2号 | 30 原山遺跡 |
| 5 板井尾遺跡 | 31 仲村横穴 |
| 6 内河野遺跡 | 32 古川横穴 |
| 7 六本松古墳 | 33 政所馬渡遺跡 |
| 8 西園南遺跡 | 34 政所西遺跡 |
| 9 座王法池坊横穴群 | 35 寺の前遺跡 |
| 10 宇土古墳群 | 36 野鹿洞穴 |
| 11 舟ノ辻古墳 | 37 浦久保遺跡 |
| 12 御祖神社古墳 | 38 占賀遺跡 |
| 13 十一横穴 | 39 恵良原遺跡 |
| 14 成迫横穴 | 40 小下原古墳 |
| 15 市用平園横穴群 | 41 風呂の前横穴 |
| 16 南光寺横穴 | 42 横迫遺跡 |
| 17 扇森山横穴 | 43 右京遺跡 |
| 18 小塚古墳 | 44 上岩戸遺跡 |
| 19 石舟古墳 | 45 中山遺跡 |
| 20 田代遺跡 | 46 叶野古墳 |
| 21 ネギノ遺跡 | 47 辻横穴 |
| 22 蜘蛛塚古墳 | 48 白水横穴群 |
| 23 石井入口遺跡 | 49 竜宮洞穴 |
| 24 桑木遺跡 | 50 小高野遺跡 |
| 25 田頭遺跡 | 51 立神小城横穴群 |
| 26 小園遺跡 | 52 大石遺跡 |

- ▲ 先土器時代
 ■ 縄文時代
 ○ 弥生時代
 □ 古墳時代
 ● 前方後円墳
 ● 円墳
 ▲ 横穴

第1図 菅生台地と周辺の遺跡分布図

に集中し、なかでも小園・石井入口遺跡は数百軒におよぶ規模の住居跡が検出され、鉄器や鏡片の集中化が見られる。このように、この両遺跡が上流部の遺跡の中で際立ったあり方を示しており、この両遺跡の立地する菅生台地は周辺地域に比べ中心的地域として確立していく。このことは次の古墳時代になるとより明確な姿となって現れる。

古墳時代では、上記の両遺跡の立地する菅生台地の東端において、まず七ツ森古墳群が形成される。古墳群は令制下の直入郡下最大の規模をもち、2基の前方後円墳と2基の円墳とからなっている。なかでも、前方後円墳の一つであるb号墳からは、大和朝廷との関係を物語る石剣等が出土し、その被葬者の性格が目される。このように七ツ森古墳は墳形や副葬品等から弥生期古墳の特徴を有しており、この地の弥生時代集落を母体として成立したと思われるが、そこには、大和朝廷が地方支配を進める中で大きく関与していたものと思われる。

また、七ツ森古墳群の周辺には、古墳群に併行して数多くの墳墓が集中している。菅生台地の西端には、塚園遺跡方形周溝墓・円形周溝墓（円墳？）、小塚台地に立地する石舟・小塚古墳、台地中央部に蜘蛛塚古墳、隣接する小園遺跡方形周溝墓（？）、さらに、楠野遺跡方形周溝墓群である。

以上のように、令制下における直入郡中最も墳墓が集中する地域であり、4c～5c代にかけてこの地が中心的役割を担っていたものと思われる。

次に5c後半から6cになると、台地上の遺跡数は極端に減少して行く。その反面、竹田盆地や稲葉川等の河川の流域沿いに、扇森山・市用・宇土・十一・成迫・座主横穴群等の横穴群が数多く造られるようになる。

奈良期では、小園遺跡に掘立柱の建物跡が検出されており、依然としてこの地が重要な位置にあることを感じさせてくれるが、その他には原山遺跡でカマド施設を東壁に有す堅穴住居跡が2基検出されているのみであり、地域としての衰退現象は変わらず、今後においてもあまり大きな変化をみせない。

以上みてきたように、大野川上流部の台地上に展開した遺跡は、縄文晩期前半代と弥生後期～古墳時代前半代の大きな興隆期を経過し、6c以降しだいに衰退して行き、以後も大きな変化を示さない。そして、6c以降その文化の中心は竹田盆地や河川の流域沿いに移り、大きく歴史の舞台を変えて行くものと思われる。

基本層序

大野川流域の台地は、約4万年前に堆積した阿蘇熔結凝灰岩を基盤としており、その上部は阿蘇火山を中心とする火山の噴出物が厚く堆積している。大野川上流部の菅生台地の周辺では、とくに火山灰の堆積が厚く、地域によって若干の相違がみられるものの、基本的には次の層位となっている。

I層 表土層（耕作土）

II層 黒色土、クロボクと呼称されるもので、腐植土化した火山灰層である。弥生、古墳時代の

遺跡では、この層が包含層として残っている場合がある。

Ⅲ層 黄褐色土層 いわゆる 典型的な 黄色ローム層であるが、地域によってはその 上部は縄文後、晩期の包含層となっている。

Ⅳ層 明黄色砂質土層 ブロック状にⅢ層の下部に堆積する通称「アカホヤ」と呼ばれる鬼界カルデラ起源の降下灰である。噴出年代はC¹⁴測定により 約6,300年前とされている。

Ⅴ層 黒褐色土層 粘質の腐植土化した火山灰層である。厚いところでは 100cm以上あり、縄文早期の包含層となっている。

Ⅵ層 赤褐色粘質土層、硬い粘質の火山灰層である。後期旧石器時代の文化層に相当する。

Ⅵ層以下は、黄褐色を基調とする ローム層がつづき、その間にA・T（恰良・丹沢パミス）、黒色バンド（B・B）等の鍵層が存在するものとみられる。（清水）

参 考 文 献

1. 橘昌信編『ネギノ遺跡』大分県文化財調査報告第35集 1976 大分県教育委員会
2. 竹田市教育委員会『菅生合地と周辺の遺跡』Ⅰ～Ⅳ 1976～1982
3. 清水宗昭編『大野原の遺跡』大野町教育委員会 1980
4. 大分大学教育学部編『大野川』1977
5. 坂本嘉弘『東九州における縄文後・晩期遺跡の動態』『賀川光夫先生還暦記念論集』1982
6. 萩町教育委員会『萩合地の遺跡』Ⅰ～Ⅵ 1976～1982
7. 賀川光夫編『大分の歴史』第1巻 大分合同新聞社 1976

Ⅱ 遺跡の立地と環境

楠野遺跡の所在する楠野原台地は、竹田市大字今字楠野 1320 ～ 1627 番地に位置する。竹田市の西部、阿蘇外輪山東部には、標高 450 ～ 600 m の広大な高原地帯があり、東流する大野川の小支流によって大きく削られ、比高 50 ～ 200 m に及ぶ東西に細長い大小の台地を形成している。楠野原台地もこのようにして形成され広大な菅生台地より分かれた台地の一つである。楠野原台地は、菅生台地の東部、祇野神社の所在する大字今の小台地の北側に谷をはさんで位置し、台地の南・北側は玉来川の支流によって樹枝状に削られ、鑷歯状に開折された小支谷が形成され、いづれの谷底にも湧水がある。周囲は、急傾斜で崖となり独立性台地を呈している。台地上は、東へ緩傾斜し東西に細長く、東西約 1.3 km、南北 500 ～ 540 m、比高 50 ～ 200 m をはかる。

現状は、現在の集落は、台地のほぼ中央、南側に張り出した舌状台地上に密集しており西側の小支谷の湧水を生活水として利用している。台地一帯は、耕地（水田 70% ・ 畑地 30%）として利用し、周辺は山林・雑木林となっている。台地上における水田稲作の開始は江戸時代の天保年間に灌漑用水（天保井路）が完成したことによるらしい。

発見された遺跡は、小支谷に出る湧水を取り巻く台地上を中心に分布している。（玉永）

Ⅲ 調査区の設定と調査の経過

楠野原台地の遺跡の有無は、周辺台地の歴史地理的環境等から、従来より遺跡の存在が想定されていた。しかし、諸々の事情から昭和 53 年の発見まで空白のままであった。

遺跡発見のきっかけは、楠野原台地一帯における昭和 53 年度圃場整備及び畑地帯改良事業が実施されたことによる。調査は台地の大半が水田となっていたため、事前の予備調査がおくれ、工事の直前（11 月末）になり、台地の東部地域にまず試掘グリッド・トレンチを設定したが、工事対象地域全体の試掘調査は不可能であった。そのため、工事開始後は工事と併行して耕作土を除去したレベルでの遺構検出を実施した。しかし、東西 約 1.3 km にもおよぶ広大な面積のため発見された遺構の全てを調査するのは事実上無理があるため、当初から工法変更等の保存措置を構しながらの調査であった。関連機関との調整・土地所有者との対応、厳寒の中での調査と台地の上を東に西へめまぐるしく動き回る日々が続いた。

その結果、台地全域に先土器時代から古墳時代にわたる多数の遺跡が確認された。なかでも、この時期大野川流域では初例であった方形周溝墓の発見やカマド施設をもつ古墳時代後期の住居跡の発見は注目された。

発掘調査は、協議を重ねた結果、工法変更が不可能となった 3 地区について実施した。その内、水利・土量の関係から年度内工事が急務であった A ・ B 地区を緊急調査（県教育委員会調査）し、C 地区は次年度（竹田市教育委員会調査）に実施した。

先土器・縄文時代の包含層は4ヶ所(K J I~K J IV地区)においてその分布範囲が確認された。その内K J IV地区(縄文晩期包含層)は、台地の東側に形成された小支谷部に立地しており注目された。確認された包含層の大半はすでに工事により破壊されており、遺物の採集とその分布範囲を確認するにとどまった。K J II-a地において良好な包含層が確認された。K J I地区は縄文早期の包含層が確認された地区であるが、すでに全壊していた。その他の地区包含層は半壊の状況である。A~C地区の発掘区以外で確認された遺構(付図参照)は、水田の新区画内において、旧表土を片方に寄せた段階で確認できたものであり、検出率は約%の確率である。遺構の大半は、検出された遺構については上半部が破壊されたが、残りの部分については一応破壊は免れたものと理論上考えられる。

A地区は、調査後東側部(約%)が破壊された。B地区は、発見時すでに調査区の南側一帯が削平を受けていたため墓域の全体をつかむことは不可能であったが、調査区は検出面よりレベルを下げない工法を行ない保存に努めた。

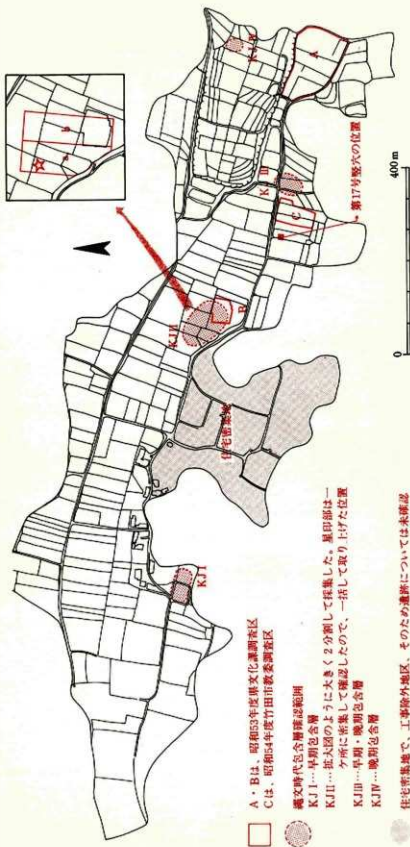
以下、調査の主な作業内容を抽出して、その流れを記す。

試験調査(昭和53年11月20日~昭和54年1月16日)

- 11月20日(月) 現場に資材を運び、試験開始
- 12月4日(月) 楠野遺跡の取り扱いを現地に協議
- 12月14日(木) 方形周溝墓の発見、南側地区の破壊がおしまれる。
- 12月19日(火) 夜、楠野公民館において、説明会を行い、協力をお願いする。
- 1月12日(金) カマド施設のある住居跡発見

B地区の調査(昭和54年1月16日~2月16日)

- 1月16日(火) 調査開始、遺構確認のための検出作業
- 1月19日(金) 検出状況の全景写真撮影、第7号方形周溝墓より発掘開始
- 1月26日(金) 日杵市教育委員会の菊田敬氏来訪、各周溝墓の切り合い等について検討行なう。
- 2月1日(木) 福岡市教育委員会の山口譲治・原俊一氏来訪、第2号方形周溝墓南溝底から土甕墓検出される。
- 2月7日(水) 方形周溝墓地区の保存について関連機関と協議、盛土処理後水田として利用しながら現状保存を行なうことが決定。
- 2月8日(木) 発掘終了、清掃して発掘状況の全景写真撮影
- 2月16日(金) 実側等全ての作業終了、発掘区の埋めもどし工事に着手。



□ A・Bは、昭和53年度東文化課調査区
 Cは、昭和54年度竹田市教委調査区

縄文時代包含層確認範囲

KJI…早期包含層

KJII…拡大図のように大きく2分割して採集した。星印部は一ヶ所に密集して確認したので、一括して取り上げた位置

KJIII…早期・晩期包含層

KJIV…晩期包含層

住宅密集地で、工事跡外地区、そのため遺跡については未確認
 その他の地域は全面的に工事がおこなわれ、工法変更等の保存措置
 を行っている。

第2図 調査区概略図



発掘作業風景

A地区及びカマド施設をもつ壁穴の調査（昭和54年2月9日～3月9日）

- 2月9日（金） 調査開始、調査区の東部の遺構検出作業より始める。
 2月15日（木） 大分大学考古学研究会の学生来訪、カマド施設をもつ住居跡の調査。
 2月16日（金） 調査区東部の検出状況の写真撮影、調査区西部の検出作業開始。
 2月23日（金） 大野川上流開発事務所、県農政庁発掘現場視察、現状説明行なう。
 2月28日（水） 賀川光夫先生調査指導のため来訪、午後竹田市公民館において講演する。
 3月9日（金） 全ての作業終了、遺物・器材を撤収する。（玉永）

Ⅳ 調査団の構成

事業主体者	大分県農政部
調査主体者	大分県教育委員会
調査指導員	賀川光夫（大分県文化財保護審議会委員・別府大学教授）
調査協力機関	竹田市教育委員会 大野川上流開発事務所
調査員	後藤宗俊（県文化課係長・現係長兼専門員） 清水宗昭（県文化課主任） 坂本嘉弘（県文化課主事・現主任） 牧尾義則（県文化課主事・現主任） 玉永光洋（県文化課主事） 高橋信武（県文化課嘱託・現主事）
調査補助員	山下俊雄（現津久見市教育委員会）

また、調査中は鳥養孝好氏（竹田高校教諭）藪亀洋一氏（竹田市教育委員会）ならびに作業に従事していただいた楠野地区の人々にはなみなみならぬご協力をいただいた。ここに厚くお礼申し上げます。（玉永）

V 調査の成果

1 発見された遺構・遺物

楠野原台地は、約30ha程の独立台地であり、周辺台地とは深い谷によって隔絶している。そのため、台地上に分布する遺跡の状況については一つのまとまりとしてとらえることができ、遺跡群のあり方については当初より注目されていた。工事は面積の約% (約20ha) の範囲が行なわれた。調査はその範囲内に所在する遺跡の把握に努めた。前節でのべたように、確認調査は不十分であり、全体をカバーするものでないが全体の約% (13ha) についてはある程度の調査は行なえた。

発見された遺構・遺物は次のとおりである。

遺構 縄文時代については、早期の包含層が2ヶ所、晩期の包含層が3ヶ所確認できた。弥生時代は、周辺の台地とは異なり、極めて少ない検出である。明らかに弥生時代に属するものは、A地区の竪穴住居跡1基である。

古墳時代には、台地の様相は一変する。竪穴（住居跡）約69基が大きくは5つの集中範囲をもち確認された。その内、後期に属するカマド施設をもつ住居跡がC地区を中心とし分布する。約6基が確認できた。

さらに、台地中央よりやや東側の南端部に7基の方形周溝墓が発見され注目される。

その他に、小形の円形・方形を呈する竪穴・土壇が約6基確認できた。なお、古墳時代の竪穴に切られた溝が3ヶ所において確認でき、その用途が注目される。

遺物 縄文時代早・前・晩期の土器・先土器時代・縄文時代早・前・晩期の石器、弥生時代の土器、古墳時代の土器・鉄器（鉄鍬・刀子・鎌・手斧）・石器（砥石・磨石）・紡錘車・管玉・ガラス製小玉等が出土した。

以下、緊急調査区において発見された各時代の遺構・遺物について報告する。

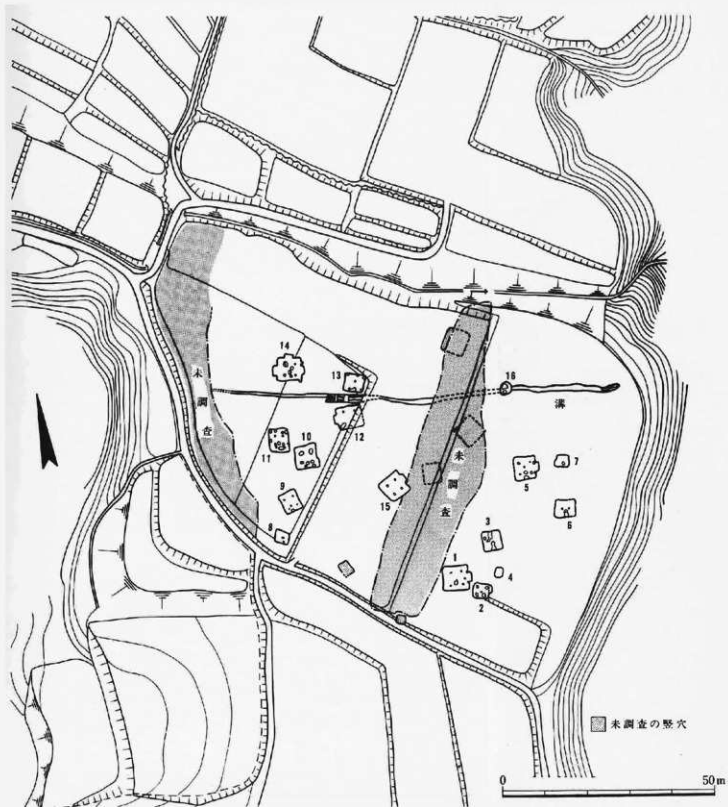
2 A地区の調査

A地区はすでにのべたように、楠野台地の東端に位置する。東側は急傾斜の崖となっており、ここが東限である。北・西側には小支谷があり、西谷に湧水がある。南側には発掘区より南へ台地はすこしのび崖となる。従って遺跡は南側へのびていたものと思われるが、後世の開墾によりすでに削平されていた。発掘区は約8000m²であるが、中央部及び西側部を土置き場（アミかけ部）として利用したため発掘できた面積は約6000m²である。なお、中央部土置き場下で検出された遺構（破線）は試掘調査によって検出されたものである。

検出された遺構は竪穴21基・東西に走る溝1条であり、調査できた遺構は竪穴16基・溝の一部である。

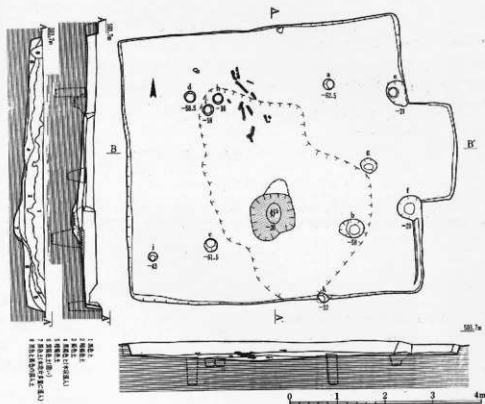
第1号 竪穴

発掘区の南東部に位置する。平面形態は、長方形を呈し、東側に90cm×200cmの方形の張り出し

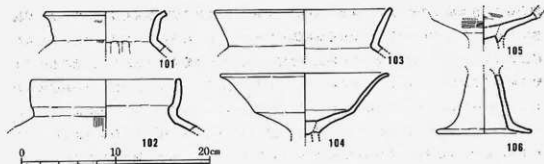


第3図 A地区の遺構配置図

部をもつ。床面積は37㎡を測る。床面の状態は、中央周辺（主柱穴間）が最も深くややくぼんだ状態である。一部張り床を行なっており全体に固くしまっている。柱穴はa～kまでの11本の柱穴が確認された。その内、確実にg・kは断面・発掘時の観察から本壁穴に伴わない。他のものは本壁穴に関する柱穴と思われる。主柱穴はa～dの4本で最も深い。また、張り出し部の両側には対をなす浅い柱穴があり、その性格が注目される。柱間寸法はa～b310cm、b～c300cm、c～d306cm、d～a295cm、e～f244cmである。長軸×短軸は610×570cm（張り出し部を含まない）であり東西に長い。炉は南側の主柱穴間よりやや中央に偏在している。不整の隅丸方形を呈し浅い皿状の地床である。床面は焼けた痕跡はなく、中に多量の本炭を含む黒色土がつまっていた。壁高は20～40cm程であり、西側が深く東に向いしだいに深くなる。その他の施設をみると壁溝・貯蔵穴はない。土層の状態は、最上層に黒色土が推積し自然流入して埋て行く課程がうかがわれた。遺物は、床面より出土したものは極めて少なく、全て覆土内の出土である。覆土内出土遺物も少なくいずれも細片である。器種は、高坏・甕・壺等の破片である。また、炉の北側床面上には、薪状の炭化物が遺存している。



第4図 第1号壁穴実測図



第5図 第1号竪穴出土土器実測図

() は復元法量

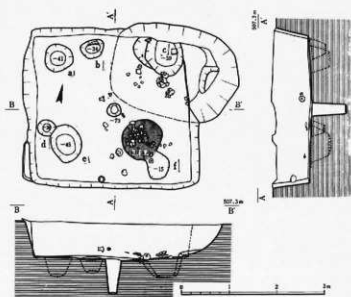
番号	器種	法 量	器 形 の 特 徴	成 形 の 特 徴	胎 土 ・ 色 調	備 考
101	壺	口径(12.5)	やや外反ぎみに立ち上がり、先端で小さく外反する。端部は稜を持つ	口縁ナデ、外面ハケ調整後ナデ	堅 外面暗褐色 内面暗黄褐色	
102	壺	口径(16.0)	ゆるやかに屈曲し、やや内彎して直立ぎみに立ち上がる	口縁内外面横ナデ、体部外面縦ハケ後ナデ、内面ナデ	堅 外面暗褐色 ～褐色 内面黄色 褐色～暗褐色	
103	甕	口径(19.0)	「く」の字状に屈曲し、直線的にのびる	口縁部内外面ヨコナデ	堅緻 外面暗褐 ～茶褐色 内面 茶褐色	
104	高坏	口径(17.9) 底径(9.2) 深さ(5.0)	屈曲部内外面にわずかに稜を有す。わずかに外反しながら開き、先端で大きく外反する	内面平滑なナデ、後、横方向に軽い研磨、外面口縁ヨコナデ 以下ナデ 粘土充填	堅 内外面とも 茶～赤褐色	
105	高坏	—		外面ハケ、脚との接合部ヨコナデ、内面ハケ調整の後平滑なナデ		
106	高坏	裾部径(10.0)	裾部で内面に稜を持ち、大きく開く裾部は下方に若干ふくらむ	外面ナデ 内面横方向のナデ 裾部ヨコナデ	堅 内外面黄褐色	

エンド・スクレーパー

第1号竪穴内より出土した先土器時代の石器である。粗い無斑品流紋岩を素材としたエンド・スクレーパーである。主要剥離面には自然面を残し、大剥離面には石核調整痕を大きく残す。刃部調整は剥片末端をかなり急角度に行なっている。



第6図 第1号竪穴出土石器実測図

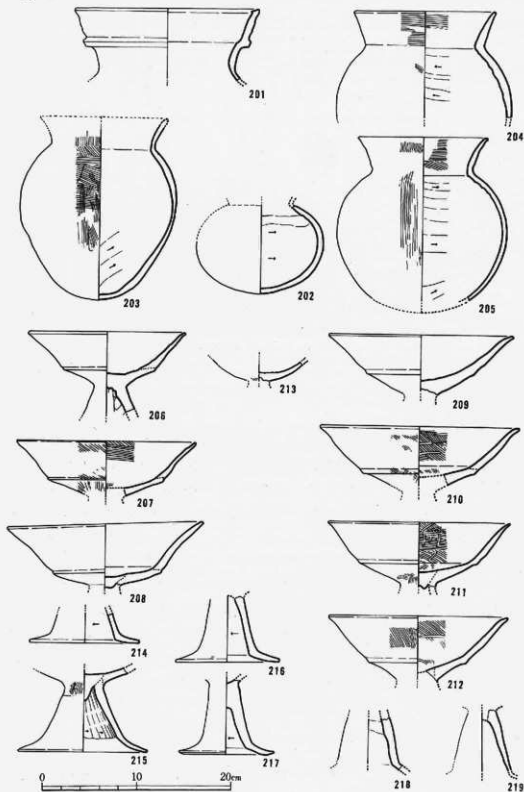


第7図 第2号竪穴実測図

第2号竪穴

第1号竪穴の南東側に接するように位置している。平面形態は、方形を呈し後世の土城に切られている。床面積は $12m^2$ を測り小型である。床面はほぼ水平である。柱穴は中央に1本検出され、これが主柱穴と思われる。長軸×短軸は $360 \times 330cm$ を測りやや東西に長い。炉と思われるものは、中央よりやや南東よりに極めて浅い皿状の落ち込みが検出された。円形を呈する地床炉の中に木炭混入土がつまっていた。壁高は他の竪穴に比べ最も高く約 $80cm$ である。その他の施設で、本竪穴を特徴づけるものとして、多くの貯蔵穴がある。貯蔵穴は各コーナー部附近にあり、a～fまでである。規模はa $60cm \times 60cm \times 41cm$ 、b $50cm \times 40cm \times 34cm$ 、c $110cm \times 74cm \times 39cm$ 、d $40cm \times 30cm \times 30cm$ 、e $80cm \times 70cm \times 45cm$ 、f $50cm \times 50cm \times 15cm$ である。不整の楕円・円形を呈す。壁溝はない。土層の状態eは、第1号竪穴等とは異なり、竪穴が深いのに黒色土の堆積がみられない。上層から下層にかけて色調の変化はあまりなく茶褐色系統の覆土である。その状態は自然堆積と考えるより人為的な堆積の可能性が高い。出土遺物は土器のみで、東側一带にまとまって出土した。土器はNo203のぞき、床面および床面直上から出土した。器種は、圧倒的に高坏が多く、甕、甕が出土したが、一点も完形となるものはない。

このことは、覆土の堆積状況等からみて、竪穴を埋める直前に一括して遺物を廃棄したかの推量を強くする。なお、第3号竪穴壁と本竪穴の土器が接合し、そこになんらかの有機的関係が窺える。



第8图 第2号墓穴出土土器实测图

() は復原法量

番号	器種	法 量	器 形 の 特 徴	成 形 の 特 徴	胎 土 ・ 色 調	備 考
201	波	口径(19.6)	一度外反して立ち上がり、段部を持ち、さらに外傾きみに立ち上がる。口唇は面をもち内傾する	内外面ともヨコナデ	堅緻 内外面とも黒褐色～茶褐色	
202	小形丸底壺	胴部径(13.4)	体部は扁平な球形で、いくぶん平底ぎみの丸底である	外面横方向にヘラ調整、器面は平滑でいくぶん光沢を有す。内面ヘラケズリ、下半は、ケズリ後ナデ	やや堅	
203	壺	頸部径10.1 胴部最大径16.4	胴部最大径を上位に有し、丸底である	外面ハケ調整 内面上半はケズリの後横方向のナデ 下半はヘラケズリ	堅 内外面とも暗黄褐色	造り雑で凹凸あり
204	壺	口径(15.0)	口縁部は「く」の字に屈曲し、やや先ばそりで直線的に開く	口縁部ハケ調整の後ナデ 胴部外面細かなハケ部ナデ 内面ヘラケズリ	堅 内外面とも淡黄褐色	
205	壺	口径13.8 胴部最大径18.0	口縁部は外反しながら開き先端で面をもち外に若干突出する。体部球形で丸底	外面縦方向のハケ調整の後ナデ 内面ヘラケズリ 口縁部ハケ調整の後ヨコナデ	堅緻 下半部外面赤褐色、上半部黒褐色、内面下半部黒色、上半部暗黄褐色、灰黄褐色	外面上半部及び口縁縁付着、内面下半部炭化物付着
206	高杯	口径15.6 底径 内 6.4 外 9.7	平らな底部から、外面に稜をもち直線的に開くが、先端でやや外反する	坏部内外面とも横ナデ 胴部内面ヘラケズリの後部的にナデ	堅緻 内面赤褐色～橙褐色、淡褐色、外面淡黄褐色、在地の胎土	
207	高杯	口径(19.0) 底径 外(12.1) 内(10.0)	屈曲部に稜をもち、稜以上で外反しながら開く	坏部上半内外面ともハケ調整の後ヨコナデ 底部付近は内外面ともハケ調整の後ヨコナデ	堅緻 緑褐色～淡黄褐色	
208	高杯	口径 20.7 底径 外 11.4 内 9.7～10.0	杯部底部は比較的平らで屈曲部に稜を有す。稜以上でわずかに外反しながら開く	外面上半部ヨコナデ、下半部ナデ、内面口縁近くヨコナデ、以下ナデ	堅緻 在地の胎土 やや暗い黄褐色	
209	高杯	口径(19.5) 底径 外 11.2	杯部外面に稜をもつが、内面にはもたずに直線的に開き先端で小さく外反する	外面稜以上はヨコナデ 以下はナデ仕上げ 内面は口縁近くヨコナデ、以下は平滑ナデ	堅緻 くすんだ黄褐色 胎土内赤褐色	ゆがみ大きい、制離はげしい
210	高杯	口径(21.0) 底径 外(11.6) 内(10.8)	屈曲部に稜を有し、口縁部は直線的に開き先端で小さく外反する	外面稜以上はハケ調整後ヨコナデ、以下はハケ後ナデ、内面ハケ後ヨコナデ	堅緻 赤褐、暗褐、暗黄褐色	
211	高杯	口径(19.2) 底径 外 12.3 内 11.0	屈曲部外面の稜は不明瞭、直線的に開き先端で小さく外反する	外面ヨコナデ、底部近くハケ目残る。内面はハケ調整の後ナデ	堅緻 黄褐色	

番号	器種	法 量	器 形 の 特 徴	成 形 の 特 徴	胎土・色調	備 考
212	高環	口径 18.9 底径 10.3 深さ (5.8)	屈曲部外面に稜をもち、直線的に開く。先端で小さく外反する	外面上半ハケ調整後ヨコナデ、下半横方向ナデ、内面ハケ後ヨコナデ	やや軟 淡黄褐色	
213	高環	—	ゆるやかに内彎しながら開く	外面底部近くハケメ残るが全面ナデ、内面丁寧なナデ調整であるが底部にヘラ調整痕あり、	堅 外面黄褐色～橙褐色 内面黄褐色	
214	高環	裾径(11.6)	脚柱部は若干中ぶくらみを呈すと思われる。裾部で稜をもち大きく開く	外面平滑なナデ、内面脚柱部ヘラケズリ後ナデ、裾部ヨコナデ	堅 外面黄褐色 内面黄褐色～橙褐色	
215	高環	裾径 13.7	裾部内面の稜は不明瞭で、ゆるやかに開く	外面平滑ナデ仕上げ、接合部ハケ目残る。内面ヘラケズリ、裾部ヨコナデ	堅緻 灰淡黄褐色～黄褐色	
216	高環	裾径(11.0)	裾部で内面に稜をもち、大きく開く	外面脚柱部ヘラ削り後平滑なナデ、裾部ヨコナデ 内面ヘラケズリ	堅 黄褐色～赤褐色	
217	高環	裾径 10.0	裾部で内面に稜をもち開く先端はわずかにねえ上る	外面平滑ナデ、裾部ヨコナデ、内面ヘラケズリ、部分的にヘラナデ	堅緻 橙褐色～淡黄褐色	
218	高環	—	若干中ぶくらみの脚柱で、裾部は内面に稜をもち開く	内面に巻き上げ痕残る。内外面ともナデ調整	堅 赤褐色	
219	高環	—		外面ヘラケズリの後横方向のナデ 内面横方向のナデ	堅 明黄褐色	

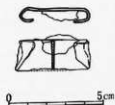
第 3 号 壺 穴

第 1 号壺穴の北東に位置する。平面形態は方形を呈する。床面積は20㎡を割り、床面は全体的には平坦であるが中央北側部がややくぼみ皿状になっている。柱穴はa～dの4本が検出された。主柱穴はa・bの2本であり東西に並ぶ。主柱穴はa・bとも下方で2段になっており、柱は片方に寄る。柱間寸法は160cmである。長軸×短軸は450cm×440cmである。炉は中央よりやや南側に位置し、深さ約10cm程の不定形の皿状を呈す地床である。炉の周辺部には木炭粒子が広範囲に広がっており床面は固くしまっている。壁高は30～40cmである。その他の施設は、西側の中央よりやや北側に70cm×60cm×22cmの楕円形を呈す小壺穴があり貯蔵穴と思われる。また炉の南側には、炉よりつながる落ち込みがあり南壁に接する。さらに、東壁南隅附近にも深さ10cm程の落ち込みがある。壁溝はない。土層の状態は、第2号壺穴においてもみられたように、黒色土の堆積はなく茶褐色系統のもので占められており、特に黄褐色ブロックを多量に混入していることが特徴である。このことは、自然堆積の状況とみるより、人為的にある単位ごと埋めた可能性が高い。特に東側の状況が顕著である。遺物は土器がまとまって出土した。器種は甕・高環・小形丸底壺等である。また、床面

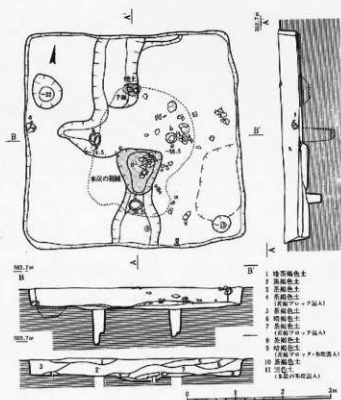
より小形の手鎌が一点出土した。土器は本壑穴に伴なうものは少なく、No.301・309などが床面から出土している。大半は東側の堆積土と共に出土しており、東壁側から中央に向い傾斜している。一括投棄の可能性が高い。このことは、第2号壑穴の遺物廃棄の状況と接合関係等からみて第2号と3号の関係は注目される。

手 鎌

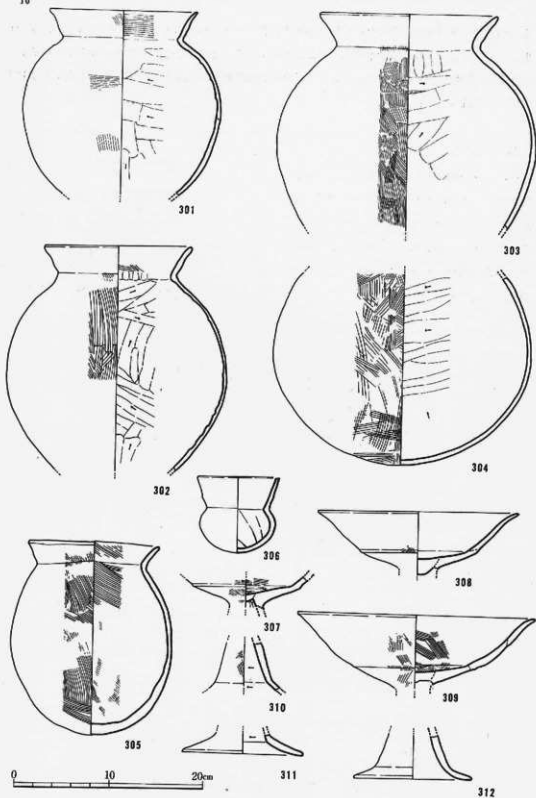
横に細長い鉄板を左右から折り返して、袋部を作り、下縁に刃をつけた鉄製工具である。長さ3.7～4.0cm、幅1.6cm、厚さ0.15cmの大きさを測り小形である。この工具については、手鎌の機能を想定することは難しく他の機能を考える必要があろう。



第9図 手鎌実測図



第10図 第3号壑穴実測図



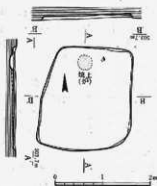
第11图 第3号墓穴出土土器实测图

() は復原法量

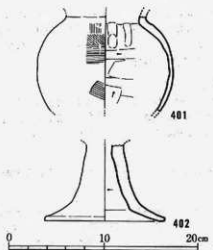
番号	器種	法 量	器 形 の 特 徴	成 形 の 特 徴	胎 土・色 調	備 考
301	壺	口径(15.6) 胴部最大径 (21.0)	破を持って屈曲し、中程で肥厚しながら開く。先端で小さく外反する。胴部は球形を呈す	口縁部ハケ調整後ナデ、胴部外面ハケ目残るが、ナデで平滑。内面ヘラケズリ	堅 黄褐色	
302	壺	口径 15.6 胴部最大径 23.6	「く」の字に外反し、端部で短く外反する。胴部はやや緩反の球形を呈し、最大径は中位	口縁内面ハケ調整後ナデ、胴部外面上半は荒い縦ハケ下半細いハケ後ナデ消す。内面ヘラケズリ	堅 淡黄褐色	
303	壺	口径 18.4 胴部最大径 27.4	内面に稜を持たずに外反し、中程で肥厚する。胴部は球形を呈す	口縁部内外胴ヨコナデ、胴部外面縦方向のハケ、内面頸部ユビ押え後平滑ナデ、胴部はハケ目一部残るがヘラケズリ、下半までられ平滑	堅 淡黄褐色	外面に煤状付着物
304	壺	胴部最大径 (27.2)	胴部若干扁平な球形、底部丸底	外面荒いハケ調整後一部ナデ、内面ヘラケズリ後若干のナデ	堅 黄褐色	
305	壺	口径 13.8 器高 20.2 胴部最大径 17.0	口縁部は、わずかに外反しながら開き、先端はあまり稜をもたずに丸くおさまる。胴部は楕円形で、底部は丸底で厚い	口縁部内外面ハケ調整後ヨコナデ、胴部内外面ハケ調整後一部ナデ、外面頸部下ナデ	堅 黄褐色～橙褐色	在地裏の系譜
306	小型丸底壺	口径 (8.7) 器高 8.0 胴部最大径 7.8	最大径は口縁。体部扁平で縁部はほぼ直線的に開き、先端は内傾する面を有す	口縁部は内外面ヨコナデ、体部外面平滑なナデ、内面指のナデ上げ	堅 外面黄褐色～赤褐色	
307	高坏	—	坏底部外面に稜をもつ	内外面ハケ調整後部分的にヨコナデ	堅 暗褐色～黄褐色	
308	高坏	口径 21.1 底径 12.2 深さ 4.9	屈曲部に稜をもち、直線的に開くが、先端で外反する	外面ハケ調整ヨコナデの後横方向ヘラ調整、稜以下はヘラ調整、内面横方向ヘラ調整、底部平滑ナデ	堅緻 黄褐色地の胎土	調整、造形丁寧均整とれる
309	高坏	口径 25.0 底径 12.7 深さ 5.8	屈曲部にわずかに稜をもち、若干凸凹を見せながら外反ぎみに開く	外面縦方向ハケ後ナデ消し、内面ハケ後部分的にナデ	堅 外面赤褐色～暗褐、内面暗赤褐色～暗黄褐色	
310	高坏	—	内面に不明瞭な稜をもち開く	外面ハケ調整後一部ナデ裾部ヨコナデ、内部ヘラケズリ	堅 黄褐色	
311	高坏	器径 12.8	裾部内面に明瞭な稜をもち大きく開く	内外面ともヨコナデ、内面稜以上はヘラケズリ	堅緻 赤褐色	
312	高坏	器径(12.5)	内面に稜をもたずにゆるやかに開く	内・外面ともナデ	堅緻 赤褐色	

第4号竪穴

第2号竪穴と3号竪穴の間に位置する。平面形態は南西隅がややとび出しびつな方形を呈す。床面積は4㎡を測り、本竪穴群中最も小型である。床面は水平である。柱穴はない。長軸×短軸は200×190cmで南北にやや長い。竈は北壁側に偏在し、浅い皿状の地床竈であり、木炭・焼土混入土がつまっていた。壁高は6～10cmと低くきわめて遺存が悪い。壁溝及びその他の施設はない。遺物は覆土内から少量の土器が出土した。器種は小形壺・高坏である。



第12図 第4号竪穴実測図



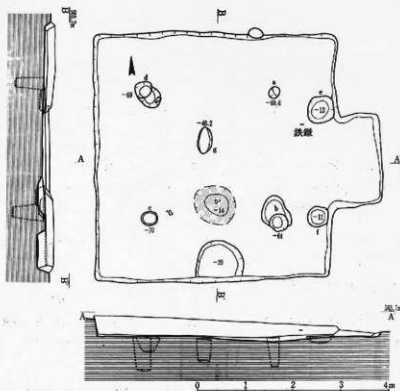
第13図 第4号竪穴土器実測図

() は復原法量

番号	器種	法 量	器 形 の 特 徴	成 形 の 特 徴	胎土・色 調	備 考
401	壺		球形を呈す	体部外面ハケ調整、頸部近くヨコナデ、内面頬部下ユビおさえ、以下ヘラナデ	堅、外面黒褐色、内面褐色～暗褐色	外面下半に煤付着
402	高坏	裾径(12.8)	内面に稜をもち開く	裾部ヨコナデ、外面平滑なナデ、内面ヘラケズリ	堅、黄褐色	

第5号竪穴

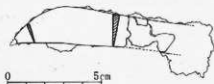
発掘区の東方中央部に位置する。平面形態は第1号竪穴と同様の形態であるが、方形を呈し東側に180cm×90cmの方形の張り出し部をもつ。床面積は27㎡を測る。床面は中央部(主柱穴間)がよく踏み固められており、その部分が皿状にややくぼんでいる。柱穴はa～gの7本が検出された。本竪穴に伴う柱穴はa～fと思われる。主柱穴はa～dの4本であり、第1号竪穴と同様に張り出し部の両側に浅い柱穴が対をなしてある。柱間寸法はa～b 275cm、b～e 270cm、c～d 265cm、d～e 275cm、e～f 220cmである。長軸×短軸は500cm×520cm(張り出し部を含まない)である。炉は南側の主柱穴間に位置し、楕円形の皿状を呈す。中に多量の木炭が混入しており、床面は固く焼けている。壁高は10～40cmあり西から東へ浅くなっている。その他に、炉の南側には壁に接して100cm×78cm×20cmの土壇がある。壁溝・貯蔵穴はない。土層の状況は中央に黒色土が堆積し自然堆積の状況を示している。遺物は土器の他に、No e 柱穴の南側で床面より約20cm程浮いて鎌が出土した。土器はその大半が覆土中より出土したが、高坏・脚部が床面より出土した。なお、高坏 No 507と第6号竪穴No 603が接合した。



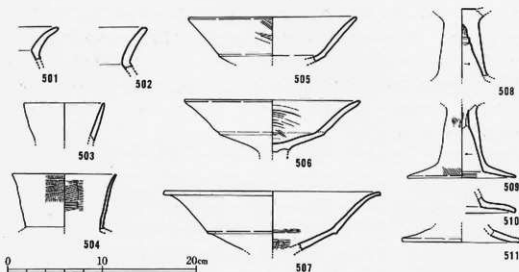
第14図 第5号竪穴実測図

鉄 鎌

先端部が湾口状に曲る。現在長10.5cm、身の中央部の幅1.7cm、背の厚さ3mmを計る。



第15図 第5号堅穴出土鉄鎌実測図



第16図 第5号堅穴出土土器実測

()は復原法量

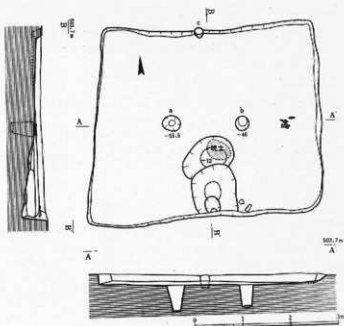
番号	器種	法 量	器 形 の 特 徴	成 形 の 特 徴	胎土・色 調	備 考
501	壺	—	内面に稜をもち屈曲し、外反しながら開く	内外面ともヨコナデ	堅 外面黒褐色 内面黄褐色	
502	壺	—	外反しながら開く	内外面ともヨコナデ	堅 外面スス付着で黒色、内面茶褐色	
503	直口壺	口径 8.6	直線的にのび開く	内外面ともヨコナデ	堅緻 灰黄褐色～褐色	
504	直口壺	口径 11.0	直線的にのび、先端でわずかに外反する	外面からいハケ調整後ヨコナデ、内面口端ヨコナデ、中程横ハケ後ナデ、頸部上はヨコナデ	堅緻 外面橙色 内面黄褐色	
505	高坏	口径(17.8) 底径(11.3)	稜をもって、わずかに外反しながら開く	外面稜以上ハケ調整後ヨコナデ、内面わずかにハケ残るが、ヨコナデ	堅 黄褐色(赤い小石含む)	

506	高坏	口径 18.6 底径 11.0 深さ 5.3	稜をもって、ゆるやかに外反しながら開く	外面ヨコナデ、内面粗い幅広いハケ後ヨコナデ	堅緻 淡黄褐色	
507	高坏	口径 21.7 底径 13.1 深さ 6.3	稜をもって直線的に開き、先端部で小さく急に外反する	外面ヨコナデ、内面稜以上ヨコナデ以下ハケ後ナデ	堅緻 淡黄褐色	第6号竖穴の高坏と接合
508	高坏	—		外面ナデ仕上げ 杯内面ハケ後ナデ、内面ヘラケズリ上部にしぼり底残す。	堅緻 淡黄褐色	
509	高坏	口径 11.6	内面裾部に稜をもち、直線的に開く	外面柱部上半及び裾部にハケ、後ナデ仕上げ、内面稜以上ヘラケズリ、以下ハケ後ヨコナデ	堅緻 赤褐色	
510	高坏	—	稜を持ち大きく開く裾部で一度内彎きみにふくらむ	内外面ヨコナデ	堅 淡黄褐色	
511	高坏	口径(12.8)	裾部で大きく開く	内外面ヨコナデ	堅緻 黄灰色	

第6号竖穴

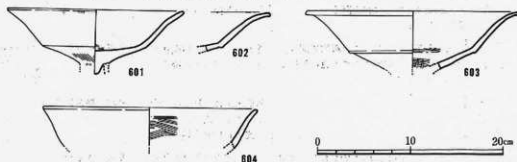
第5号竖穴の南東部に位置する。平面形態はいびつな長方形を呈す。床面積は27㎡を測り、床面は水平である。柱穴はa～cの3本の柱穴が検出された。支柱穴はa・bの2本が東西に並び、柱間寸法は150cmである。

長軸×短軸は480cm×400cmで東西に長い。竪は中央南側に位置し、長楕円形を呈し深さ12cm程の浅い皿状の地床がある。中に焼土塊が検出された。壁高は12～20cmである。また、竪の南側には壁に接して土壇がある。貯蔵穴・壁溝はない。土層の状況は中央に黒色土が堆自然堆積の状況を示して積している。遺物は非常に少なく、図化可能なものは数点である。なお高坏



第17図 第6号竖穴実測図

は第5号竪穴出土のものと接合した。またb柱穴東側床面より木炭が検出された。



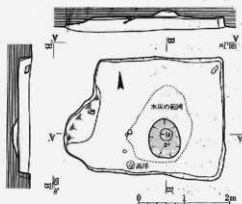
第18図 第6号竪穴出土土器実測図

() は復原法量

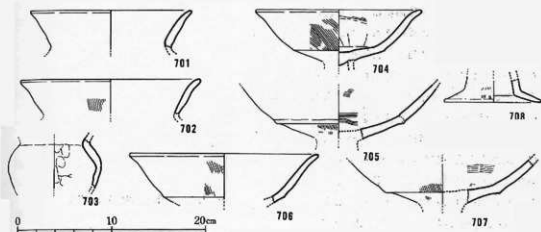
番号	器種	法量	器形の特徴	成形の特徴	胎土・色調	備考
601	高坏	口径(19.2) 底径 11.3 深さ 4.3	ほぼ平らな底部から腹をも って屈曲し、稜以上で外反 しなから、開く	外面稜以下ハケ調整後一部 ナデ、稜以上ヨコナデ、内 面底部ハケ、口縁部ヨコナ デ	やや堅 外面黄 褐色～橙褐色 内面茶褐色	
602	高坏	—	屈曲部に稜をもち、稜以上 で大きく外反する	内面底部 付近ハケ日 残る が、内外面ともナデ	やや堅 外面明 灰褐色 内面明 黄褐色	
603	高坏	口径(21.7) 底径(13.1) 深さ(6.3)	稜をもって、直線的に開 き、先端部で小さく急に外 反する	外面ヨコナデ、内面稜以上 ヨコナデ、以下ハケ後ナデ	堅緻 淡黄褐色	第5号竪 穴 A.507 と接合
604	高坏	口径(23.0)	内彎ぎみに開き、先端でわ ずかに外反する	内面ハケ調整、口縁部から 外面ヨコナデ	堅緻 淡赤褐色 ～黄褐色	

第7号竪穴

第5号竪穴の東側に位置する。平面形態は西側壁がいびつに張り出した長方形を呈す。床面積8㎡を測り小型である。柱穴はない。長軸×短軸は270cm×150cm(張り出し部含まない)を測り東西に長い。炉は中央南側に位置し長楕円形を呈し深さ14cm程の皿状の地床炉である。炉の周囲は木炭が広がっており、その部分が固く踏みしまっている。壁高は26cm程である。貯蔵穴・竈溝はない。土層の状態は中央に黒色土が堆積し自然堆積の状況を示している。遺物は、覆土中からは細片が少量出土し、床面から高坏・甕・小形壺の破片が出土した。その他に縄文土器片が数点出土している。



第19図 第7号竪穴実測図



第20図 第7号竖穴出土土器実測図

() は復原法量

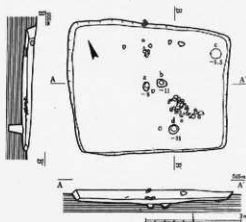
番号	器種	法 量	器 形 の 特 徴	成 形 の 特 徴	胎土・色 調	備 考
701	壺	口径(17.0)	外反しながら開く	内外面ともヨコナデ	堅 外面暗褐色 内面褐色	
702	壺	口径(19.2)	中程で肥厚し、先端で小さく外反する	外面に一部ハケ目残るがヨコナデ	堅 内外面とも暗褐色	
703	小形壺	—	胴部中位より上で変換する扁平な胴部	外面平滑なナデ、内面指オサエ、指ナデ	堅 外面暗黄褐色 内面赤褐色	
704	高坏	口径 17.6 底径 9.6 深さ 4.4	屈曲部で明瞭な稜をもち、わずかに内彎きみに開き、先端で小さく外反する	外面稜以上はハケ調整後部分的にナデ、口縁部ヨコナデ、稜以下はナデ、内面环上半はハケ調整、下半及び底部はヘラナデ	堅 橙褐色	接合はさし込み
705	高坏	—	明瞭な稜をもち開く	口縁部外面横ナデ、稜以下はタテハケのちヨコナデ、内面ハケ調整の後ナデ	堅 外面黄褐色 ～暗黄褐色、内面淡赤褐～暗黄褐色	
706	高坏	口径(20.1)	屈曲部で明瞭な稜をもち、わずかに内彎きみに開き、先端で小さく外反する	外面ハケ調整後ヨコナデで大部分消される。内面ヨコナデ	堅 外面暗褐色 ～暗黄褐色、内面暗褐色	
707	高坏	—	明瞭な稜をもち開く	内外面とも一部ハケ目残るが、ナデにより消される。	堅 内外面とも暗茶褐色	
708	高坏	口径(10.4)	内面裾部に明瞭な稜をもち開く	外面ハケ調整後ヨコナデ、内面ナデ、稜以下ヨコナデ	堅 内外面とも赤褐色～明茶褐色	

第8号竪穴

調査区の西方で南端部に位置する。平面形態は長方形を呈す。床面積は9㎡を測る。柱穴はa～dの4本が検出されたがいずれも浅く主柱穴とは認め難い。位置的にはaかbが可能性がある。その場合は1本主柱穴である。長軸×短軸は330×260cmで東西に長い。壁高は8～20cmと浅く遺存がわるい。か・貯蔵穴・壁溝はない。土層の状態は、黒色土を含み自然堆積の状態である。遺物は床面より甕がつぶれた状態で出土した。その他に打製石鏃が出土した。なお、小形丸底甕No.803は竪穴の西側で出土した。

打製石鏃

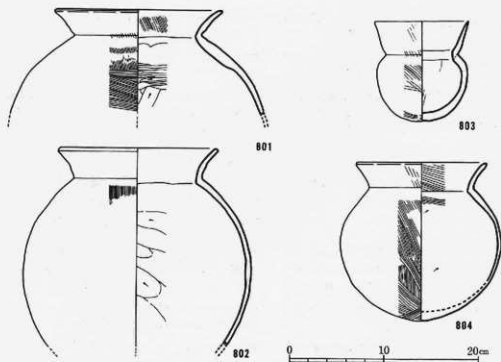
輝石安山岩を素材とし、最大長1.4cm、最大巾1.5cm、重さ0.5gを計る。完形品である。ほぼ正三角形で抉りは残いものである。



第21図 第8号竪穴実測図



第22図 第8号竪穴出土石器実測図 (1/1)



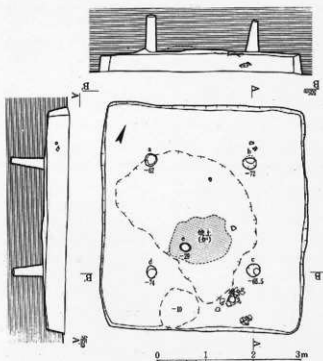
第23図 第8号竪穴出土土器実測図

() は復原法量

番号	器種	法 量	器 形 の 特 徴	成 形 の 特 徴	胎 土・色 調	備 考
801	壺	口径(17.8)	くの字に折れ、中程で肥厚し、外反しながら開く口縁である	外面ハケ調整後部分的にナデ、口縁部ハケ調整後ヨコナデ、内面頸部下ナデ 以下ヘラケズリ	堅 黄褐色	
802	壺	口径 19.0 胴部最大径 24.0	ゆるく外反しながら開く、胴部は球形を呈す	外面ハケ調整後丁寧なナデにより消される、口縁部内外面ともヨコナデ、胴部内面ヘラケズリ	堅 明黄褐色	
803	小形丸底壺	口径 10.0 胴部最大径 9.6 器高 10.3	口縁部は直線的に開き、端部は薄い、体部は肩部が若干はり、底部は小さな平底を呈す	外面ハケ調整後口縁部ヨコナデ、体部ナデられ平滑、内面口縁部ヨコナデ、体部はヘラによる丁寧なナデ	堅 黄褐色	
804	広口壺	口径 13.8 胴部最大径 17.0 器高 18.6	若干外反しながら開く口縁部で、胴部は球形を呈す	外面ハケ調整、頸部ヨコナデ、口縁部は内外面ともヨコナデ、内面ヘラケズリの後上半部はナデ平滑	堅 外面明黄褐色 内面黄褐色	

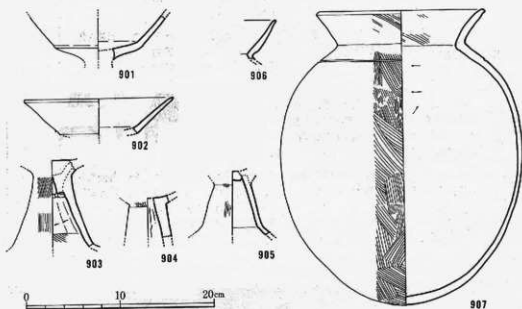
第 9 号 堅 穴

第 8 号堅穴の北側に位置する。平面形態は方形を呈す。床面積は20㎡を測る。床面は中央部が皿状にくぼみ、その部分が固く踏みしまっている。柱穴はa～eの5本が検出された。主柱穴はa～dの4本である。柱間寸法はa～b206cm、b～c232cm、c～d220cm、d～a234cmを測る。長軸×短軸は470～420cmで南北にやや長い。坪は中央やや南側に位置し、不整の楕円形を呈す。床面に木炭・灰が付着している。壁高は30～40cmである。その他に南壁の中央より西側部に皿状の土坑がある。壁溝はない。土層の状態は黒色土が堆積する自然堆積の状況である。遺物は甕・高坏などの土器の他に打製石鏃が出土した。甕 Na907 は南東隅附近において、口縁



第24図 第 9 号 堅 穴 実 測 図

部を床面に接して、倒位の状態で出土した。しかし、同一個体である下半部は床面よりかなり浮いた状態で出土し断面は両側から一連の傾斜をもっている。打製石鉄は覆土中の出土である。



第25図 第9号墓穴出土土器実測図

() は復原法量

番号	器種	法 量	器 形 の 特 徴	成 形 の 特 徴	胎 土 ・ 色 調	備 考
901	高 杯	—	屈曲部でゆるやかな稜をもち、直線的にのびる	内外面ともヨコナデ	堅 内外面とも 橙褐色	
902	高 杯	口径 15.8	直線的にのびる口縁	内外面ともヨコナデ	堅 茶褐色～赤 褐色	
903	高 杯	—	ゆるやかに開き、内面裾部で稜を持たない	外面ハケ調整の後、一部ナデ、内面裾部はハケ調整後ナデ、脚部はヘラケズリ	堅 黄褐色 微砂混入	
904	高 杯	—		外面杯底部ハケ目残る。脚部ヘラミガキ、内面はナデ、しほり痕残す。	堅 外面茶褐色 内面黄褐色	
905	高 杯	—	若干中ぶくらの脚部で下端で大きく開く	外面ハケ調整後ナデ、内面ヘラケズリ、裾部はナデ	堅 黄褐色	
906	甕	—	わずかに内彎しながら閉き先端で小さく外反する	内外面ともヨコナデ	堅 明黄褐色	

907 壺	口径 17.0 頸部径 13.4 胴部最大径 25.8 器高 30.9	口縁部は若干外反しながら開き、端部で綾をもつ、胴部は縦長の球形で、最大径を中位に持ち、丸底を呈す。肩部に一条の辻線がまわる	外面ハケ調整、口縁部はヨコナデ、内面はヘラケズリ、後下半はナデ、口縁部にはハケ目残る	外面煤付岩
-------	--	---	--	-------

打製石鏃

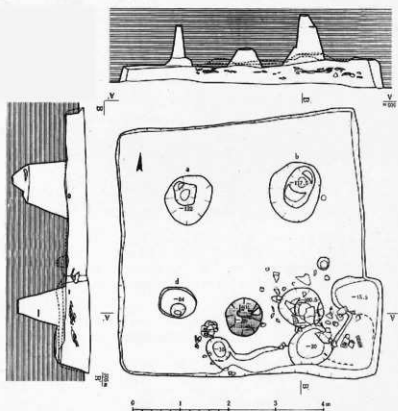
第9号壺穴周辺より出土した。先端部は欠損する。最大長は推定で1.6cm、最大巾1.1cm、重さ0.5gである。抉りは浅く、側縁はやや外側する。表裏とも入念に調整されている。



第26図 第9号壺穴出土石器実測図 (1/1)

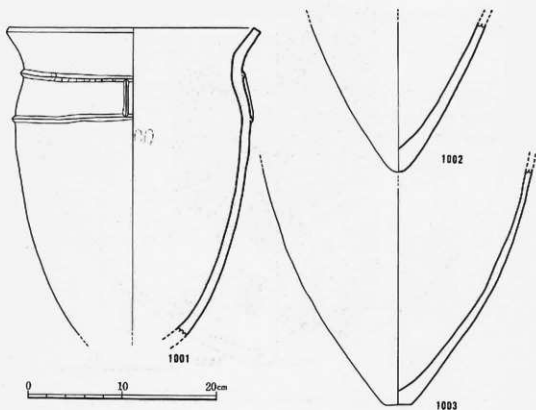
第10号壺穴

唯一弥生時代に属する壺穴である。第9号壺穴の北側に位置する。平面形態はすこしいびつな方形を呈し、南東隅に200cm×30cmの方形の張り出しをもつ。張り出し部は床面よりしだいに下がり低くなっている。床面積は28㎡を測る。柱穴a～dの4本が検出され、これが主柱穴となる。柱穴

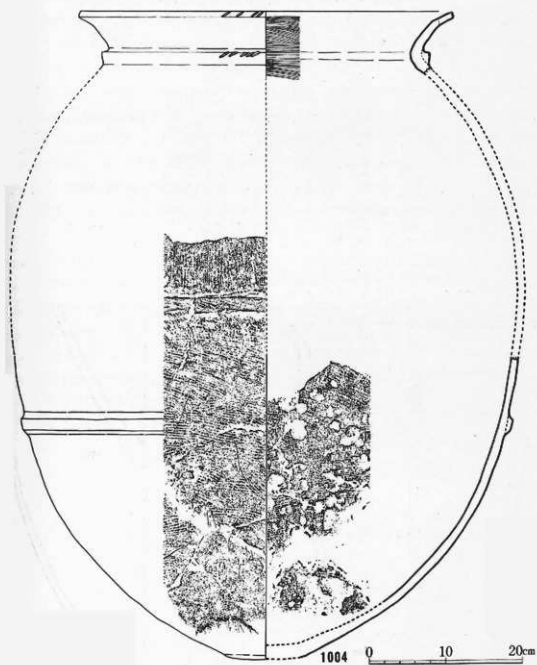


第27図 第10号壺穴実測図

は掘り方が大きく柱痕の数倍あり、下位の方で2段になっている。柱穴の底の規模は柱痕とほぼ等しい。また、柱は穴の中央に据えてなく壁側に偏在させている。このことは柱をより強固に据える作業の結果と思われる。また、柱穴dは完掘してなく柱痕のみを掘っている。柱間寸法はa～b 248cm、b～c 264cm、c～d 265、d～a 246cmを測る。長軸×短軸は550×540cmである。炉は南側の主柱穴間に位置し深さ40cm程の円錐状を呈する。壁高は30～40cmである。また、南側の壁に沿って2つの土壇があり、これを浅い溝でつなぐ状態になっている。貯蔵穴・壁溝はない。土層の状態は、黒色土の堆積はなく暗茶褐色系統の土が自然に流入していた。遺物は土器・磨石が出土した。土器は張り出し部周辺から炉の周辺にかけて集中している。器種は大形壺・甕が出土している。出土状態は壁側から床面に向って傾斜しており、この方向からの流入または投棄の状況がうかがえる。いづれにしてもこの位置での一括出土は、張り出し部の入口的機能を強く感じさせる。また、炉跡の西側より甕№1001が床面に密着して出土し、土器は多量の木炭が付着している。本竪穴に伴うものである。



第28図 第10号竪穴出土土器実測図(1)



第29图 第10号窖穴出土土器实测图(2)

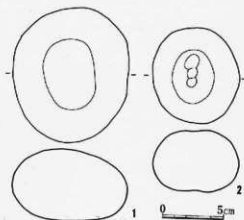
()は復原法量

番号	器種	法 量	器 形 の 特 徴	成 形 の 特 徴	胎 土・色 調	備 考
1001	甕	口径(27.0)	口縁部は、ゆるやかに外反し端部は平たく面をなす。最大径は口縁部に有し、頸部から胴上半部に2条の断面三角突帯をめぐらし、その上下を1条の突帯で4ヶ所つなぐ	内外面ともナデ、内面には指のナデ上げ痕が残る	堅 多量の小石砂混入 橙褐色～茶褐色	
1002	甕	—	突がり気味の丸底を呈しているが、鞍の部分が磨減しており、ごく小さな平坦面を有するものである	内外面とも平滑なナデ	堅 茶褐色	内面の剥離はげしい。外面煤の付着
1003	甕	底径 2.80	2に比べ、明らかに平底を呈す	内外面とも平滑なナデ	やや堅 明黄褐色	内面炭化物付着
1004	壺	口径(49.0)	頸部はしまり、口縁部は小さく外反する。胴上半部を欠ぐが、胴部は卵圓形を呈し、最大径を胴部中央付近にもつものと思われる。底部は小さな凸レンズ状を呈す。頸部に断面三角形、胴下半部に帯状突帯をめぐらす。口唇部・頸部突帯にはヘラ状用具の刻みを配す	口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコ方向のハケ、胴部下半部外面は粗いタタキの後ハケ・ナデ	堅 黒褐色～茶褐色	

磨石・凹石

1. 磨石である。完形で最大長11.0cm、最大幅9.5cm、厚さ5.9cmを測る。安山岩製のもので磨痕が残る。

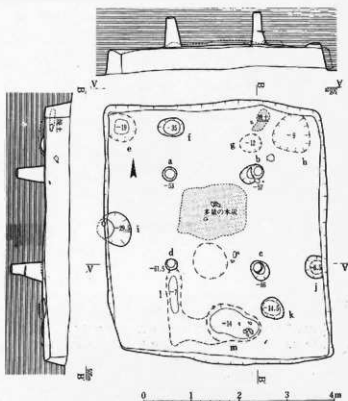
2. 凹石である。完形で最大長7.7cm、最大幅7.2cm、厚さ5cmを測り、表裏が若干凹む。安山岩製のものである。



第30図 第10号壺穴出土石器実測図

第11号竪穴

第10号竪穴の北西側に位置する。平面形態は長方形を呈する。床面積は24㎡を測る。床面はほぼ水平で、中央部（主柱穴間）が固く踏みまわっている。その部分には木炭が広がっており黒くなっている。柱穴はa～dの4本が検出され、それが主柱穴である。柱間寸法はa～b186cm、b～c200cm、c～d180cm、d～a188cmである。長軸×短軸は550cm×460cmで南北に長い。炉は南側の主柱穴間に位置し、深さ13cm

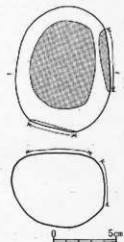


第31図 第11号竪穴実測図

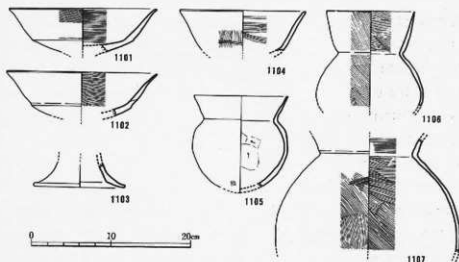
の皿状の地床炉である。壁高は50cm程である。その他にe～mの小さな落ち込みが多数検出され注目された。規模はe 56cm×58cm×19cm、f 56cm×39cm×35cm、g 46cm×38cm×12cm（皿状を呈する）、h 80cm×78cm×9cm、i 70cm×50cm×29.5cm（西壁にオーバーハングしており、床面近くで磨石・が1点出土した。）j 50cm×38cm×8.5cm、k 47cm×44cm×14.5cm、l 深さ7cm程度で長楕円を呈す溝状の落ち込みである。ガラス製小玉が1点出土した。mは炉の南側に位置し、114cm×74cmの不規則長楕円形を呈す。壁溝はない。土層の状態は、黒色土の堆積を含む自然堆積である。遺物は、土器・ガラス製小玉・磨石等が出土した。土器は高杯・甕等が出土した。その内、寛永1107は床面より約20cm程浮いて出土して、第12号竪穴No.1209と接合した。なお、楕円押型文が1点出土している。

磨石

最大長9.9cm、最大幅7.5cm、厚さ5.9cmを計る。表面・側面に磨痕がみられる。安山岩製のものと思われる。



第32図 第11号竪穴出土石器実測図



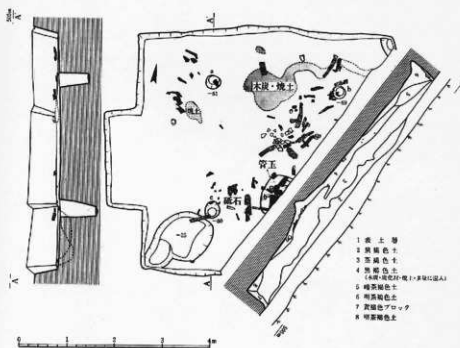
第33図 第11号竪穴出土土器実測図

番号	器種	法 量	器 形 の 特 徴	成 形 の 特 徴	胎土・色調	備 考
1101	高坏	口径(18.6) 底径(12.8) 深さ(4.4)	ほぼ水平な底部に稜をもち、わずかに内彎ぎみに開き先端で小さく外反する口縁部をもつ	外面口縁部ハケ調整後ヨコナデ、底部ヨコナデ、内面ハケ調整	堅 外面暗茶黒褐色 内面淡茶褐色	外面と内面の一部に煤付着
1102	高坏	口径(18.8) 底径(12.6) 深さ(5.0)	屈曲部で稜をもち、内彎ぎみに開き、先端で小さく外反する	外面口縁部ハケ調整後ヨコナデ、稜以下ヨコナデ、内面ハケ調整	堅緻 外面黒褐色 内面赤褐色 微砂混入	外面煤付着
1103	高坏	口径(11.6)	内面に稜を有し、裾は小さく開く	内外面ともナデ調整	堅緻 淡茶褐色	
1104	壺	口径(15.8)	頸部でくびれ、一度斜めの面をつくり、直線的にひろく口縁部で、端部がやや外反する	外面口縁上半ハケ調整後、下半ハケ調整、頸部ヨコのナデ内面ヨコ方向のハケ調整後ヨコ方向のナデ	堅 淡黄褐色 微砂混入	壺として復原した
1105	小形壺	口径(11.8) 頸部径(9.2) 胴部最大径(11.9)	球形を呈する胴部に口縁部は小さく外反してひろく	内外面口縁部ヨコナデ、外面胴部一部ハケ調整後全体をナデ仕上げ、内面はヘラ状用具による調整(ナデ)一部おさえ	堅 淡黄褐色	
1106	直口壺	口径(11.0) 頸部径(8.0) 胴部最大径(13.5)	扁平な胴部から、口縁部は大きくやや内彎して立ち上がる	外面ハケ調整、内面口縁部ヨコハケ調整、胴部ナデ仕上げ	堅 外面黒褐色 内面淡褐色 精良粘土	外面全面に煤付着
1107	壺	頸部径(12.3) 胴部最大径(23.0)	最大径を中位にもつ縦長の球形	胴部内外面ともハケ調整、口縁部外面ヨコナデ	堅 外面黄褐色 内面黄褐色～黒褐色	第12号壺穴No1209と接合

() は復原法量

第12号 竪穴

第10号竪穴の北東部に位置する。唯一火災を受けた竪穴である。平面形態は東側の一部（約1/4）が未発掘であるが長方形を呈するものと思われる。西側中央に210 cm×80 cmの張り出し部を有すが、第1号・5・15号竪穴でみられるような東側に張り出すものとは方向が異なり注目される。床面積は全掘していないが26㎡前後測るものと思われる。柱穴はa～cの3本検出されたが、主柱穴は他に1本加えた4本と思われる。柱間寸法はa～c 270 cm、a～b 270 cmである。なお、第1・6・15号でみられた。張り出し部の両側に対をなす柱穴はない。長軸×短軸は540 cm×490 cmを測り東西に長い。炉は南側の主柱間に位置するもので一部検出された。多量の木炭粒子を混入した地床炉である。壁高は53 cm～50 cmである。その他に、南西コーナー部に150 cm×150 cm×25 cm程の不定形な土坑がある。壁溝はない。土層の状態は、大きく3層に分かれるが、Ⅰ層黒色土、Ⅱ層茶褐色土、Ⅲ層本炭・炭化材・焼土塊・粒子を多量に含み、床面や床直上部を中央を中心にして広く覆っている。遺物はこのⅢ層中より出土した。土器・管玉1点が出土した。土器の器種は壺・小形壺・甕・高坏等の破片である。なお、竪Na1209は第11号竪穴Na1107と接合した。これにより、この竪はほとんど復原できる。管玉は床面より約30 cm浮きⅢ層中より出土した。



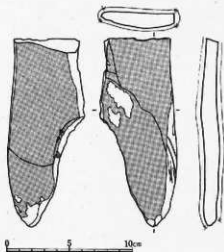
第34図 第12号竪穴実測図

管 玉

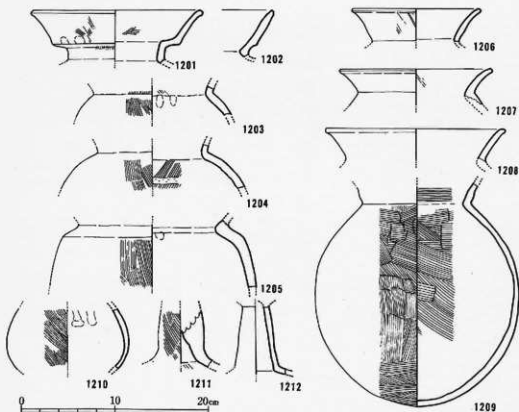
良質の碧玉製と思われる、完形である。色調は深緑色を呈する。長さ2.5cm、径3.5mm、孔径2mmであり両側からの穿孔である。

砥 石

最大長14.9cm、最大幅6cm、厚さ1.2cmを計る。完形と思われる。表裏面・側面と多面を磨き面としている。石材はきめが細く、仕上げ砥段階に近いものと思われる。



第35図 第12号墓穴出土管玉(Ⅱ)・砥石実測図



第36図 第12号墓穴出土土器実測図

() は復元法量

番号	器種	法 量	器 形 の 特 徴	成 形 の 特 徴	胎土・色 調	備 考
1201	壺	口径(12.5)	一度立ち上った後、段をも ちさらに外反しながら開く	口縁部内外面ともハケ調整 後ヨコナデ	堅緻 外面暗褐色 内面黄褐色	
1202	壺	—	くの字に折れ、外面に稜を 持ち直線的に開く。先端で すばまる	口縁部内面～外面稜以上は ヨコナデ、稜以下細かいハ ケ調整、胴部内面はヘラケ ズリ	堅 黄褐色～橙 褐色	
1203	壺	—		外面ハケ調整、頸部はハケ 後ヨコナデ、内面口縁部は ハケ調整、頸部おさえ、胴 部ナデ	堅 外面暗茶褐 色 内面茶褐色	外面焼成 時黒ハン 有り
1204	壺	—	肩部がやや張る	外面胴部ハケ調整、口縁部 ヨコナデ、内面胴部ハケ調 整、一部ナデ	堅 外面暗茶褐 色 内面暗褐色	
1205	壺	—	肩部がやや張る	外面ハケ調整後ヨコナデ、 内面ヨコナデ	堅緻 外面暗褐 色 内面黒褐色	
1206	壺	口径(13.7)	わずかに波うち、外反しな がら開く	外面ハケ調整後ヨコナデ、 内面ヨコナデ	堅 外面灰褐色 内面黄褐色	
1207	壺	口径(16.4)	外反しながら開き、先端で わずかに外方へつまみ出さ れる	口縁部外面ヨコナデ、内面 ハケ調整後ヨコナデ	堅 茶褐色	
1208	壺	口径(19.0)	直線的に開き、先端でわず かに 外方へつまみ出され る	内外面ともヨコナデ	堅 外面黒色 内面黄褐色	
1209	壺	頸 部 径 (12.3) 胴部最大径 (23.0)	最大径を中位にもつ縦長の 球形	胴部内外面ともハケ調整、 ただし内面底部近くは平滑 なナデ、口縁部外面ヨコナ デ	堅 外面黄褐色 内面黄褐色～黒 褐色	第11号壺 穴No.1107 と接合
1210	小形壺	—		外面比較的荒いハケ、内面 平滑ナデ、頸部おさえ	堅緻 外面黄褐 色～暗黄褐色 内面黄褐色～暗 褐色	
1211	高 杯		中ぶくらの脚柱部	外面ハケ調整、内面脚柱部 ナデ、裾部ハケ調整後ナデ	堅 外面黄褐色 内面暗黄褐色	
1212	高 杯		長くのびる脚柱部	外面ナデ、内面ナデ、裾部 平滑なナデ	堅緻外 面暗褐 色～明黄褐色 内面暗褐色	

第 13 号 壺 穴

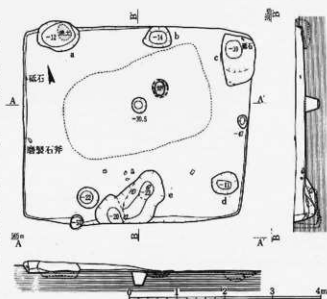
第12号壺穴の北側に位置する。平面形態は長方形を呈す。床面積は18.5㎡を測る。床面は中央部がややくぼんでいる。柱穴は中央に1本検出され、1本主柱穴である。長軸×短軸は480cm×410cm

と東西に長い。炉は中央よりやや北東部に位置するものと思われる焼土が検出された。地床炉と思われる。壁高は1~20cmと浅く南側から北側に向い壁はなく遺存が悪い。その他に、北壁・東壁・南壁側等においてa~eの貯蔵穴を含めた土坑が検出された。不整楕円・円形を呈する。規模はa 90cm×60cm×12cm（焼土・木炭が混入している。）、b 60cm×50cm×14cm、c 100cm×70cm×39cm（砥石が1点出土）、d 60cm×50cm×11cm、e 100cm×100cm×23cmである。遺物は土器・砥石（2点）、磨製石斧（1点）が出土した。土器は極めて少なく甕・高杯の破片が出土している。土層は堅穴が浅く暗茶褐色土が堆積していた。

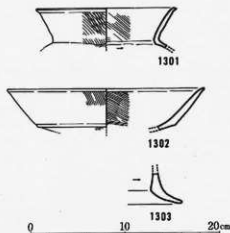
砥石

1. 最大長7.7cm、最大幅2.9cm、厚さ1.6cm~2.0cmを計る。全面使用しており小形である。仕上げ段階の砥石と思われる緻密な面をしている。淡白褐色を呈する粘板岩製である。

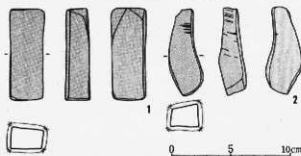
2. 最大長7.3cm、最大幅2.7cm、厚さ1.2~3cmを計る。4面使用で小形である。使用頻度が多くなり摩り減っている。淡白褐色を呈し、粘板岩製のものである。



第37図 第13号堅穴実測図



第38図 第13号堅穴出土石器実測図



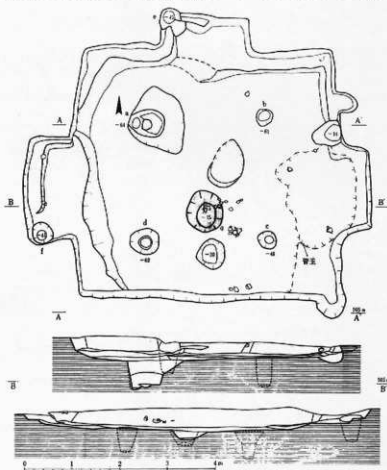
第39図 第13号堅穴出土砥石実測図

() は復原法量

番号	器種	法 量	器 形 の 特 徴	成 形 の 特 徴	胎 土・色 調	備 考
1301	甕	—	「く」の字口縁を呈す。肩部は丸い	口縁部ヨコナデ、胴部内面ヘラケズリ	堅 暗茶褐色	
1302	高坏	—	屈曲部で肥厚し、裾部は小さく開く	外面・裾内面ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	堅 黄褐色	
1303	甕	口径 15.0	口縁部は「く」の字に屈曲して開き、口唇部を外方につまみ出し縁を有す。口縁部中ほどわずかに肥厚する	口縁部内外面ともナナメ、方向のハケ後ヨコナデ、胴部外面はハケ後ナデ内面はヘラケズリ	堅 黄褐色～橙褐色	外面に煤付着

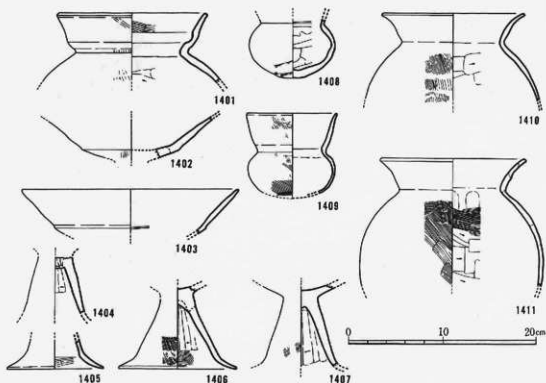
第 14 号 竪 穴

第13号竪穴の西方、発掘区の西方北端に位置する。平面形態は方形を呈すが、第1・5・12・15号竪穴等にみられた壁の1辺側に1つの張り出し部をもつものと異なり、北・西・東壁の3ヶ所にお



第40図 第 14 号 竪 穴 実 測 図

いて方形の張り出し部をもって特異な形態をとっている。張り出し部は、規模・形態・床面の状況・柱穴の位置などでやや異なっている。すなわち、北・西側の張り出し部は一方の隅に柱穴をもち床面はほぼ水平になっている。東側は柱穴がなく床面は皿状にややくぼんでいる。張り出し部の規模は西側が230cm×90cm、北側が190cm×60cm、東側が180cm×50cmである。床面積は32㎡を測る。床面は中央に向かって深くなり、中央附近では平坦である。柱穴はa～fの6本が検出された。a～dが主柱穴で、4本主柱穴である。この主柱穴は、第10号竪穴でみられたように、柱穴の掘り方がきわめて大きい。e・fは張り出し部のコーナー部に位置し、張り出し部附近の上屋に関する柱穴と思われる。柱間寸法はa～b270cm、b～c255cm、c～d260cm、d～a250cmである。長軸×短軸は570cm×520cm（張り出し部除く）、炉は南側の主柱穴間よりやや中央よりに位置し、楕円形を呈し深さ15cmの地床炉である。木炭粒子を多量に含む黒色土がつまっていた。壁高は20～40cmである。その他に炉の南側と東壁の張り出し部のやや北側等に貯蔵穴がある。東壁の貯蔵穴は、第11号竪穴にみられたように壁をえぐる状態で作られている。壁溝はない。土層の状態は、黒色土の堆積を含む自然堆積である。黒色土は深く中央部で床面近くまで達しレンズ状をなしていた。遺物は土器・刀子（1点）・管玉（1点）・磨石が出土した。土器は黒色土下層より出土し、甕・高坏・壺・小型丸底壺等が出土した。刀子は覆土内、管玉はC柱穴の東側において床面より約20cm浮いた位置で出土した。



第41図 第14号竪穴出土土器実測図

() は復原法量

番号	器種	法 量	器 形 の 特 徴	成 形 の 特 徴	胎 土 ・ 色 調	備 考
1401	壺	口径(16.0)	口縁部は外傾したのち、内彎して立ち上り、さらに先端でわずかに外反する	外面ハケ調整後口縁部頸部下ヨコナデ、内面口縁部はハケ調整後ヨコナデ、中段は強くおさえヨコナデ、屈曲部でナデ、おさえ、体部はヘラケズリ	堅緻 外面橙褐色 内面黄褐色	
1402	高坏	—	稜をもって開く	稜以上内外面ともナデ、稜以下ハケ目残る。	やや堅 淡黄茶褐色	外面制離著しい
1403	高坏	口径(23.0)	明瞭な稜をもち、直線的に開く	口縁～外面稜ヨコナデ、稜以下ハケ目残るがナデ消す。内面底部近くハケ	堅 内外面とも明黄褐色	
1404	高坏	—	わずかに中ぶくらみ	外面ヨコナデ、内面上半ヘラケズリ、下半ナデ	堅緻 内外面とも淡灰茶褐色 選されている。	
1405	高坏	総径(10.2)	ゆるやかに開くが、内面に稜をもつ	外面ナデ、裾部ヨコナデ、内面稜以上ナデ、稜以下ハケ調整	堅 内外面とも黄褐色	
1406	高坏	総径(12.6)	ゆるやかに開き、稜はもない	脚柱部外面ナデ、裾部ハケ調整後ヨコナデ、内面ヘラケズリ、裾部はハケ調整	堅 淡黄褐色	
1407	高坏	—	裾を持たずに開く	外面ナデ、下部はハケ目若干残る。内面ヘラケズリ	堅 黄褐色	
1408	小形丸底壺	頸部径 7.0 胴部最大径 9.2	底部わずかに平底を呈する 体部は扁平な球形	外面浅いハケ調整後特に上半部ナデ、内面底部からナデ仕上げ、上部ヨコナデ	堅 黄褐色	
1409	小形丸底壺	口径(9.7) 胴部最大径 9.4	最大径はわずかに口径が上まわる。頸部はあまりくびれず扁平な体部、口縁部は下方でわずかに肥厚するが、直線的にのびる	口縁部外面ハケ調整後ヨコナデ、内面ヨコナデ、体部外面ハケ調整後一部ナデ、内面はヘラにより平滑	堅 黄褐色、焼成時ススにより一部黒～灰褐色	
1410	甕	口径(14.8)	わずかに波うつが先端で外反する端部は平たくおさめる	口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ調整一部ナデ、内面ヘラケズリ	やや軟 淡灰茶褐色	
1411	甕	口径(15.2) 胴部最大径(19.4)	10と同様である	口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ調整内面頸部下ハケ、以下ヘラケズリ	堅 淡黄茶褐色～淡茶褐色	

管 玉

碧玉製と思われる、色調は淡緑色を呈す。現在長1.6cm、径3.9mm、孔径2mmである。



◎ 1

刀 子

現在長9.8cm、茎長2.8cm、茎の幅1cm～1.4cm、刃渡は先端が一部欠損しているが7.6cm前後と思われる。刃部の中央部1cm、背の厚さ2.5mmを計る。茎には木柄の残痕が付着する。刃は少しすり減っている。

凹 石

最大長8.2cm、最大幅6.8cm、厚さ3.6cmを計る表裏面がくぼんでいる。



第43図 第14号竪穴出土刀子実測図



第44図 第14号竪穴出土石器実測図

第 15 号 竪 穴

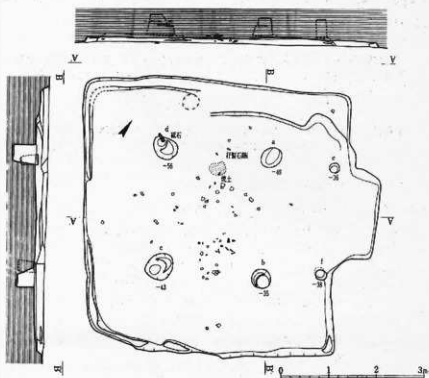
発掘区の中央部に位置する。この竪穴は、試掘時に調査したものである。平面形態は方形を呈す。北東壁に180cm×80cmの方形の張り出し部を有す。床面積は30㎡を測る。床面は比較的平坦であるが北西壁側が約40cm幅の低い段となっている。柱穴はa～gの7本が検出された。主柱穴はa～dの4本で、b・c・dが下位で2段になっている。また張り出し部の両側には対をなす浅い柱穴がある。形態は第1・5号竪穴と同様である。柱間寸法はa～b260cm、b～c230cm、c～d250cm、d～a230cm、e～f220cmである。長軸×短軸は560cm×540cmを測る。a～d主柱間において焼土と浅い落ち込みが検出された。焼土の厚さは3cm程度である。これが炉と思われる地床炉である。壁高は10～16cmである。貯蔵穴は検出されなかった。南西壁に沿って一部に壁溝らしき溝がめぐっている。本竪穴群中初例である。土層は、竪穴が浅く床面近くの茶褐色土が堆積していた遺物は、土器・砥石（1点）が出土した。土器の器種は高坏・小形甕・甕等の破片が出土した。

砥 石

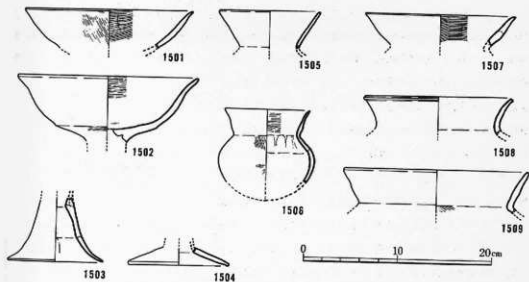
最大長19.4cm、最大幅5.6cm、厚さ1.5cmを計る磨面は一面（表面）を使用し、中央部がややくぼんでいる。石材はやや粗く中砥と仕上げ砥の中間の様相である。砂岩製のものと思われる。



第45図 第15号竪穴出土砥石実測図



第46图 第15号竖穴实测图

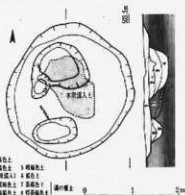


第47图 第15号竖穴出土器实测图

番号	器種	法 量	器 形 の 特 徴	成 形 の 特 徴	胎土・色 調	備 考
1501	高 杯	口径 17.8	内彎しながら開き先端でわずかに外反する	内、外面ハケ調整		
1502	高 杯	口径(19.1) 底径 10.7 深さ 5.4	あまり稜をもたずに屈曲し内彎しながら開く、先端で外方に折れ開く	外面杯部ヨコナデ、底部との境ハケ目的、底部平滑なナデ、内面端部ヨコナデ以下平滑ナデ	堅緻 黄褐色～暗褐色	
1503	高 杯	口径(10.1)	ゆるやかに稜をもたずに開く。脚柱部に、わずかに稜をもつ	内外面ナデ、微先端部ヨコナデ	堅 淡茶褐色 微砂混入	内外面煤付着
1504	高 杯	口径(10.8)	稜をもって大きく開く			
1505	小形壺	口径(10.6)	直線的に開く	内外面ヨコナデ	堅 赤黄褐色	
1506	小形壺	口径(9.0) 頸 部 径(7.0) 体部最大径(10.2)	波打ちながら開き、先端で小さく外反する	外面口縁ヨコナデ、体部ハケ後ナデ、内面口縁ヨコハケ、体部接合部以上は指ナデ仕上げ以下は指ナデ	堅緻 黄褐色	
1507	甕	口径(16.0)	波打ちながら開く	外面ヨコナデ、内面ヨコハケ調整	堅緻 淡褐色 微砂混入	
1508	甕	口径(15.6)	外反しながら開き、端部で外方に露出する	内外面ヨコナデ	堅緻 灰褐色	
1509	甕	口径 19.7	直線的に開くが、中程でわずかに肥厚する			

第 16 号 竪 穴

発掘区の東方、第5号竪穴の北側部に位置する。東西に走る小溝を切ってつくられている。平面形態はやや不整の円形を呈す。規模は南北280cm×東西265cmを測る。壁溝は13cm程であり、床面はほぼ平坦である。竪穴内には不整楕円を呈する落ち込みが3ヶ所で検出され、方形を呈する同様の竪穴とともにこの竪穴の性格が注目される。落ち込みは、北側よりと南側よりにある。北側には、120cm×95cm×40cmの大形ものと55cm×40cm×10cmの小形のものとが接してある。南側は長楕円を呈し95cm×50cm×35cmである。土層の状態は、竪穴覆土は木炭粒子をやや含みやや明るい暗茶褐色土が堆積している。また、中央附近の落ち込み上面において木炭を多量に含む暗褐色土が広がっており、この面が固くなっている。竪穴内落ち込み内は、レンズ状をなし黄褐～暗褐色土が堆積しており木炭粒子はあまり含んでいない。遺物は甕の破片が覆土内から数点出土したが図化できるものはない。落ち込み内での出土遺物はない。



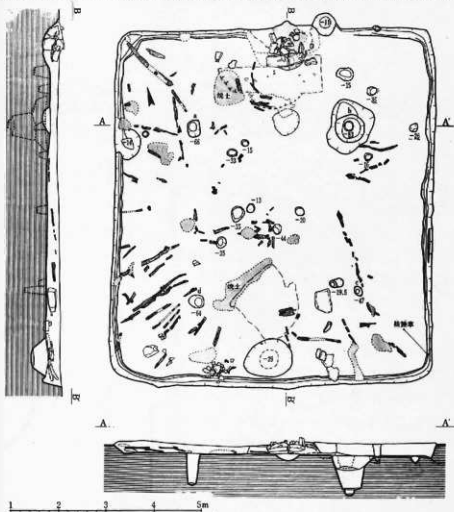
第48図 第16号竪穴実測図

溝遺構

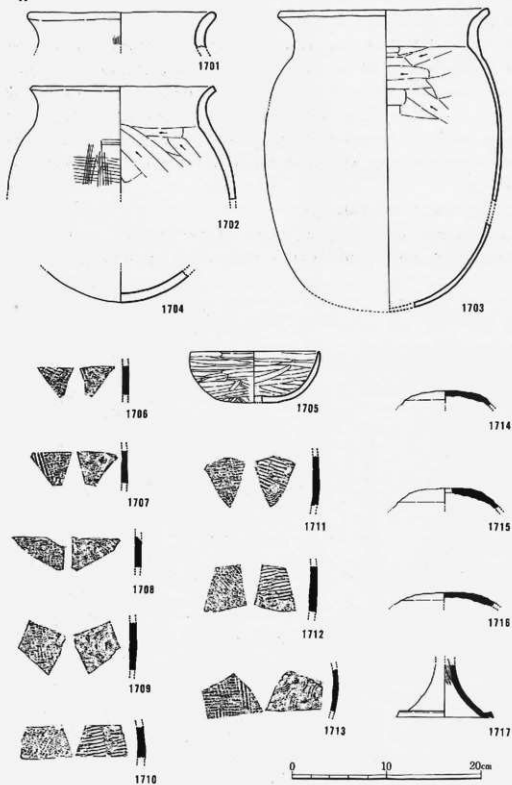
溝は発掘区を東西に走る小溝である。西端は確認できなかったが、東端は崖直前で終り、東西約90mにおよぶ。溝は東に向い深くなっている。また、第12号・13号竪穴の間部において作り替えており新たな溝の始まりをとらえることができる。溝はその部分において合流することになる。断面は逆台形を呈し、上幅90～150cm、下幅40～50cm、深さ60cm前後を測る。溝は第16号竪穴に切られているが、内部からの出土遺物はなかった。土層は茶褐色系統の土が堆積しておりほぼ一層の状況である。時期は古墳時代の竪穴よりは古いが、明確な時期は不明であり、性格についても現時点では不明である。

3 カマド施設をもつ竪穴（第17号竪穴）

C発掘区西方約50mの位置で検出された。この竪穴は試掘段階で検出され、この地区の破壊が当初予想され、また、カマドの発見は当地方としては初例であったことなどの理由により発掘した。



第49図 第17号竪穴実測図



第50图 第17号竖穴出土土器实测图

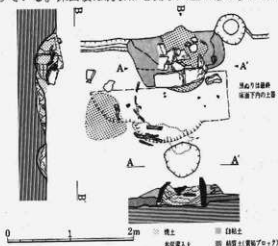
() は復原流量

番号	器種	法 量	器 形 の 特 徴	成 形 の 特 徴	胎 土・色 調	備 考
1701	甕	口径(19.8)	口縁部は一度立ち端部にむかってゆるやかに外反する	内外面ともヨコナデ	堅 外面茶褐色 内面暗褐色	土師器
1702	甕	口径 18.9	肩の張らない肩上半部から、立ち気味に端部へむかってゆるやかに外反する口縁部を呈す。口唇部はやや凹み面をなす	口縁部内外面ともヨコナデ 胴部外面は、ヨコ・タテ方向の粗いハケの後ナデ、内面は口縁直下より鋭い稜をつくるヘラケズリ、下半部はケズリの後ナデ	堅 外面暗黄褐色 内面黄褐色	土師器
1703	甕	口径 21.8 器高(31.4) 胴部最大径(28.4)	ずんどうに近い胴部からゆるやかに幅広い丸底に移向する。口縁部は一度立ち端部にむかってゆるやかに外反し厚い	口縁部内外面ともヨコナデ 胴部外面はタテ・ヨコ方向にナデ、内面はヘラケズリ(上半部は明瞭にケズリ痕を残すが下半部に移向するにつれ板ナデ状を呈する。)	堅 明黄褐色～ 暗褐色	底部周辺は二次的加熱のため白く変化 胴部・口縁外面に煤の付着 土師器
1704	甕	—	丸底	内面はおそらくヘラケズリの後ナデ、指押さえ痕あり	堅 暗黄褐色～ 赤褐色	土師器
1705	鉢	口径(13.5) 器高(5.4)	碗状を呈し、体部は内湾して立ち上がる	内外面とも幅約5mm程度のヘラ状用具でヨコ方向にヘラミガキ、入念な仕上げ	堅 茶褐色	土師器
1706	甕(?)	—		外面平行タタキ後カキ目 内面同心円・平行タタキナデ	堅緻 青灰色	須恵器
1707	甕(?)	—		外面平行タタキ後カキ目 内面同心円タタキ後スリケシナデ	堅緻 青灰色	須恵器
1708	甕(?)	—		外面平行タタキ後カキ目 内面青海波タタキ後半スリケシナデ	堅緻 外面紫灰色 内面青灰色	須恵器 13と同一個体(?)
1709	甕(?)	—		外面平行タタキ後カキ目 内面同心円タタキ後半スリケシナデ	堅緻 青灰色	須恵器 6・7と同一個体(?)
1710	甕(?)	—		外面平行タタキ後カキ目・ナデ、内面平行タタキ	堅緻 外面紫灰色 内面青灰色	須恵器 11・12と同一個体(?)
1711	甕(?)	—		外面平行タタキ後カキ目 内面平行タタキ一部青海波タタキ	堅緻 外面紫灰色 内面青灰色	須恵器 10・12と同一個体(?)
1712	甕(?)	—		外面格子タタキ後カキ目 内面平行タタキ後一部ナデ	堅緻 外面黒紫灰色 内面青灰色	須恵器 10・11と同一個体(?)

番号	器種	法量	器形の特徴	成形の特徴	胎土・色調	備考
1713	甕(?)	—		外面平行タタキ後カキ目 内面背海波タタキ後ナデ	堅緻 外面紫灰色 内面青灰色	須恵器
1714	甕 (蓋)	—	天井部は比較的丸い	マキアゲ、ミズビキ成形 天井部は回転ヘラケズリ、 後狙いナデ。他は回転ナデ 内面一部一整方向のナデ	堅緻 内外とも 青灰色、酌量の 微砂粒とともに 2~3mm程度の 白色小石混入	須恵器
1715	甕 (蓋)	—	天井部は丸いが、一部平坦 部をもつ	マキアゲ、ミズビキ成形 天井部は回転ヘラケズリ、 他は回転ナデ	堅緻 内外面とも 緑灰色、緻密 である。	須恵器 クロク回転 右方向
1716	甕 (蓋)	—	天井部は丸いが、一部平坦 部をもつ	マキアゲ、ミズビキ成形 天井部は回転ヘラケズリ、 他は回転ナデ、内面一部 不整方向のナデ	堅緻 内外面とも 灰褐色、緻密 である。	須恵器 クロク回転 右方向
1717	高杯 (脚)	据径(10.2)	短脚で、下外方に翹いて下 り裾部で一部接地し、上方 にのび外傾は屈曲する。端 部は丸い	マキアゲ、ミズビキ成形 内外とも回転ナデ、内面 にしほり痕	堅緻 内外面とも 白灰~灰色	須恵器

結局第17号竪穴周辺は削平をまねがれ、C地区が削平されることになり、この区を翌年本調査した。C地区は今回報告の対象ではないが、7基の竪穴が検出されており、その内、3基が第17号竪穴と同一時期の所産である。したがって、C地区及びその西方には約10基前後の古墳時代後期の竪穴が存在しているものと思われる。

第17号竪穴は、垂木が中央に向って放射状に検出され、焼土も多く分布している。このことから火災を受けたものと思われる。平面形態は長方形を呈し、北壁の中央にカマドを有す。床面は平坦であり、10~15cm貼り床をし固く踏みしめている。床面積は約49㎡を測り大型である。長軸×短軸は750cm×675cmである。柱穴はa~pの16本が検出された。主柱穴はa~dの4本であり、b柱穴でみられるように掘り方は大きい。a・c・dの柱穴は貼り床部を取らなかったで掘り方が確認してない。柱痕のみの発掘である。柱間寸法はa~b 326cm、b~c 345cm、c~d 337cm、d~a 365cmを測る。壁高は15~30cmで、深さ6cm前後の断面逆台形を呈する壁溝が一周する。小さな落ち込みが



第51図 第17号竪穴カマド実測図



第17号壓穴カマド写真

3ヶ所で検出された。カマドの東側・西壁・南壁中央である。カマド東側の落ち込みは、壁よりやや張り出し、46cm×45cm×31.5cmの規模である。カマドに併設された貯蔵穴と思われる。西壁は深さ23cmの落ち込みで貯蔵穴であろうか。南側の落ち込みは、南側の中央部に位置しており、100cm×80cm×29cmの規模で長楕円形を呈す。この落ち込み施設は位置的に注目される。また、この落ち込みの北側の床面には白粘土が広がっており固く踏みしまっている。すなわち、この落ち込みは入口施設に関係する可能性が強い。またカマドの南側においても小落ち込みが検出されている。この落ち込みはカマドのところでふれる。土層の状態は火災を受けているため、木炭・焼土粒子を含んだ黒色土は、A地区でみられた不純物を含まないものとは異なる。遺物は、須恵器の高坏・甕の破片・土師器の鉢・甕・紡錘車（1点）、台石、凝灰岩の板石等が出土した。土師器は南側落ち込みの西側床面上に集中して出土した。その東側には凝灰岩の板石が重なっており、紡錘車は南東隅で床面よりやや浮いた状態で出土した。

カマドについて

カマドは、床面の整地・壁溝等の付設作業の後、北壁中央の内側に付設されている。カマドは整地層（貼り床）を掘り込み、凝灰岩・安山岩製の板石を2～3枚平行させて立て、その上に（焚口上面）長さ80cm、幅24cm、厚さ24cmほどの凝灰岩切石をのせる。その後、凝灰岩の小塊を混入させた白粘土を覆うように壁体を構築している。長さ80cm、幅145cmを測る。煙道は、上部が削平を受けているため一部しが出されなかった。また、カマド内から支脚は検出されていない。焚口は幅60cmを測る。焚口は前面の立ち割りから、焚口のかさ上げが推定される。また、カマド南側には60cm×56cm×16cm程の小落ち込み検出された。内部には、多量の焼土・粘土がうまっており、カマド内に残った灰・焼土の処理穴であろうか。

紡錘車

結晶片岩製で完形である。幅4.2cm、厚さ3.5～6mm、孔径6～7mm、重さ18gを測る。

（玉永）



第52図 第17号竪穴出土紡錘車実測図

4 B地区の調査

B地区は、楠野台地の中央よりやや東側の南辺に位置する遺跡で西側の湧水を有す小支谷の東縁側で検出された。

発掘区面積は約1100㎡で、2枚の段をなす水田からなっていた。遺構は水田の盤を除去した段階で確認でき、後世の開墾において削平を受けている。発掘区は水田の段を取ったため西から東に向かって低くなり約80～100cmのレベル差がある。従って、西端・東端の遺構はかなり削平を受けた状況であった。

検出された遺構は方形周溝墓7+a基である。周溝墓の広がりを見ると、西・北・東側には遺構の広がりがみられない。しかし、小支谷の縁に沿った南側は、周溝墓発見以前に、工事が開始され大きく削平を受けてしまったため確認することができなかった。

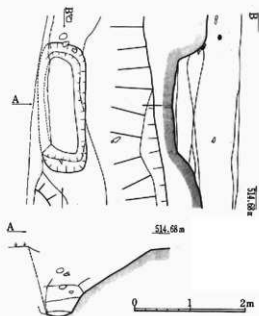
また、同溝墓の周辺からは住居跡等の遺構は検出されていない。

第1号方形周溝墓

発掘区の南西隅に位置する。西辺が未調査である。本周溝墓は東辺において第2号周溝墓、北辺において第6号周溝墓と周溝部分が重複しており、東溝の方向は第2号溝とほぼ平行している。そのため、周溝を含めた規模については不明な部分が多いが一辺9.9m前後の規模をもつものと思われる。台状部は南北幅8.5～9.45m、東西幅8.3m+αを測り、平面形態はいびつな平行四辺形である。溝幅は60～120cm、深さ10～50cmを測り、断面逆台形～V字形を呈している。溝はコーナー部（南東隅・北西隅）が浅く、溝底もせまい。埋葬施設は検出できなかった。溝の覆土の状態は茶褐色系統で、各層ともきわめて近似しているが2～3層に分けられた。遺構の重複関係については1号より6号が新しい。1号と2号は同時か2号が新しいものと思われる。遺物は南辺中央部最上層で鉄銚1点(Na1)、南東隅で床面より約50cm浮いた位置で甕1点が出土した。

第2号方形周溝墓

発掘区の中央南側に位置し、1・3・4・6・7号と周溝部において重複している。南辺が旧道路により切られている。南北幅14.4m+α、東西幅約13m前後の規模を測る。平面形態は南北に長い長方形を呈する。台状部は南北幅10.8～12m、東西幅9.7～10mを測る。溝幅は1.4～2.1m、深さ20～70cm前後を測る。溝をさらに細かくみると、各辺の中央附近が最も深く、幅もひろい、そしてコーナー部に向いしだいに立ち上がって浅くなり、



第53図 第2号方形周溝墓周溝内土坑墓実測図

幅もせまくなる。断面は逆台形ないし、V字形を呈す。溝の立ち上がりは台状部側がゆるやかで、外側が急に立ち上がる形態である。埋葬施設は、台状部内では、中央やや東側で色調のやや異なる範囲を試掘してみたが、この部は黄褐色土層のよごと判断された。従って、台状部内においてはすでに主体部は削平されているものと思われる。また、南辺周溝内において土坑が1基検出された。この土坑は周溝底で確認された。南側の一部を調査できなかったが、東西226cm、南北約90cm、深さ50~60cmを測る隅丸長方形を呈するもので、床は舟底状を呈している。周溝はこの部分において南側に張り出すものと思われ、土坑施設とは無関係な仕事とは思われない。土坑内からは何も検出されなかった。周溝内に配置された土坑墓と思われる。また、土坑墓の東側へ約2mの位置で、溝底から約50cm浮いて焼土が検出された。溝の覆土の状態は、茶褐色系統で色調に大きな変化はない状況であったが数層に分かれ自然堆積である。道構の重複関係は、北辺の土層の観察から、6・7号が2号を切っており、6・7号が新しい。東辺では、理論上は切り合い状況が観察できるものと考えられるが、明確な関係は確認できなかった。しかし、2号が3・4号を切っている可能が強いと思われる。遺物は極めて少なく、東辺・南辺の周溝内より土器の細片が溝底より浮いた状態で出土した。その内、東辺周溝内土器群は2つの小ブロックがあり、一つは丸底壺(Na10)として接合されたが、Na10より南側のものは調査中損失した。

第3号方形周溝墓

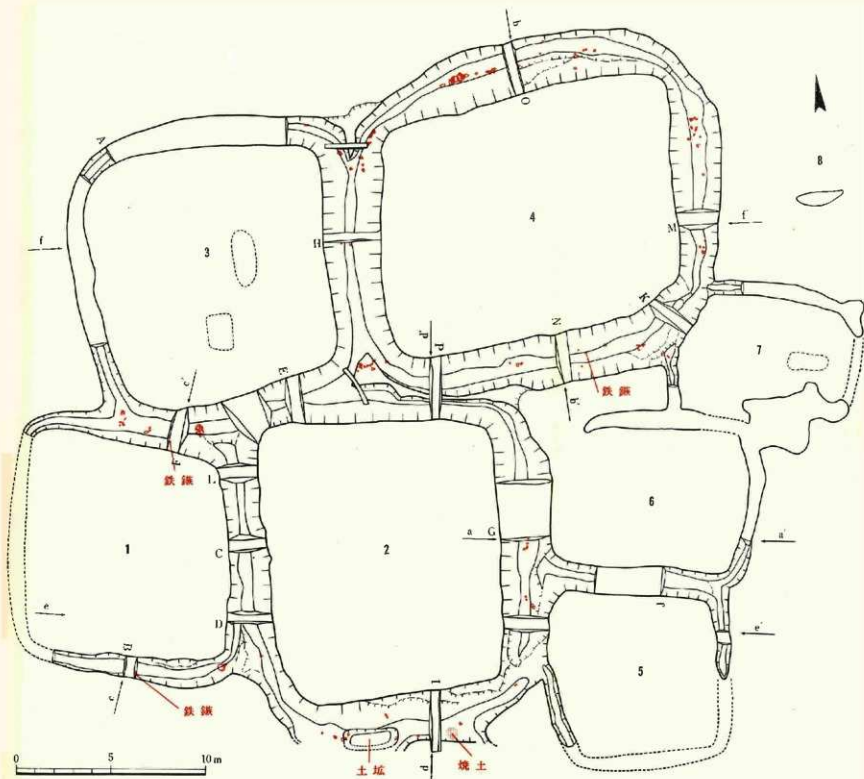
発掘区の南東隅に位置し、2・4号と重複関係にある。南辺部は旧道路跡により攪乱を受けて消失している。東辺は、上部の削平により東辺の南側がすでに消失したもので陸橋部ではない。規模は南北幅約8.5m前後に復原でき、東西幅は8m前後を測る。平面形態はすこしいびつな方形である。台状部は南北幅約7m前後に復原でき、東西幅は7m前後である。溝幅は50cm、深さ5~10cmである。東辺溝掘りすぎである。埋葬施設は検出されなかった。道構の重複関係は2号より3号が新しい可能性が高い。2号と4号は同時が4号が新しいと思われる。出土遺物はない。

第4号方形周溝墓

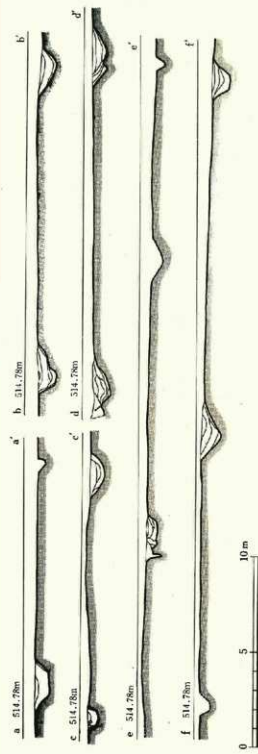
第3号方形周溝墓の北側に位置する。第2・3と重複関係にある。南北幅約7.5m、東西幅約9.5mに復原される。平面形態は東西に長い長方形である。台状部は南北幅5.8m、東西幅8.2mである。溝幅は約50~60cm、深さ25~45cmを測る。北西隅、北西隅は、コーナー部分が浅くなるためかすでに削平を受け消失したものと思われる。埋葬施設は検出されなかった。重複関係は、2号より古い可能性が高い。3号との関係はすでにのべた。

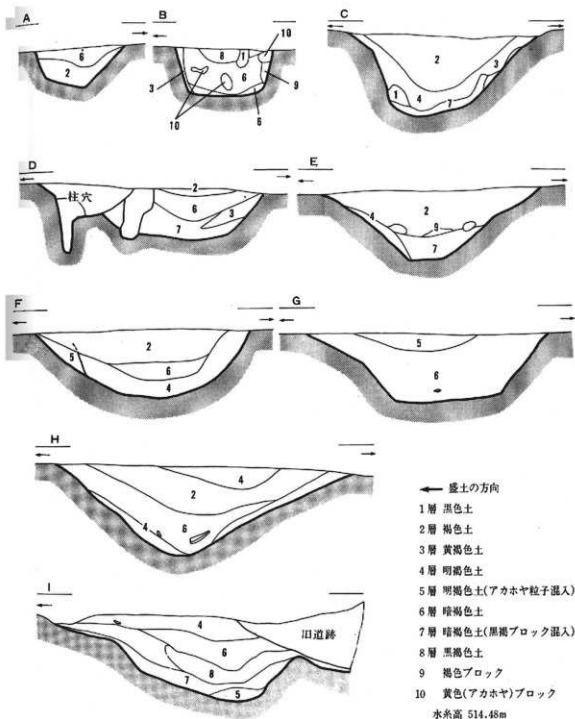
第5号方形周溝墓

第4号方形周溝墓の北東側に位置する。第4・7号と重複関係にある。東辺があくが、削平による消失と思われる。また、南辺東側部が攪乱されており平面プランがみだれている。北辺と西辺の一部を調査した。南北幅約6.5m、東西約8.3mに復原される。平面形態は東西に長い長方形を呈す。台状部は南北幅約5.3m、東西幅7.5mである。溝幅は40~60cm、深さ15cm前後を測る。埋葬施設

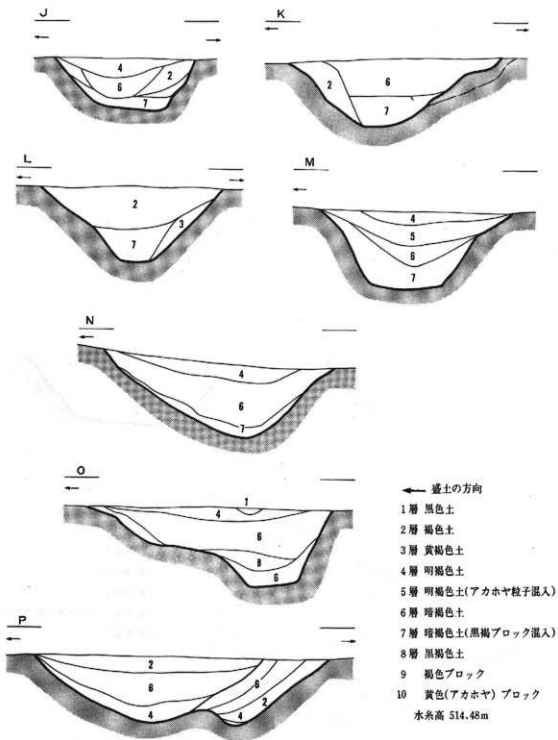


第54圖方形周溝墓遺構實測圖





第55図 方形周溝墓周溝土層図(1)



第56図 方形周溝墓周溝土層図(2)

設は調査をしてないので不明であるが、中央東側（70×170 cmの隅丸長方形）と南辺側の溝に平行して落ち込みがある。しかし、アカホヤ層下の黒色土が部分的に露出している可能性が高い。出土遺物はないが、周辺より№1・2・3が出土している。重複関係は、第7号より古い。第4との関係は不明であるがきわめて近接した時期と思われる。

第6号方形周溝墓

発掘区の北西部に位置する。第1・2・7号と周溝部で重複関係にある。南北幅13.7m、東西幅約12m前後に復原できる。平面形態は隅丸の方形を呈す。台状部は南北幅9～10.9m、東西幅9.7mを測る。溝幅は80～170cm、深さ40～80cmを測る。溝をさらに細かくみると、北辺・西辺幅がせまくなっているが、この部分は上部が削平を受けたためと思われる。溝底のレベルは西と（第7号の溝底）で約30cm程の差があり、北・南溝はコーナー部でやや浅くなるものの、コーナー部から段をつくらずしだいに東溝へ移行してつながっている。遺物は南西隅（№5）、南辺溝の中央よりやや西側より（№7）土器が出土し、№5は細片で接合し、底より総じて約20cm程浮いている。№7は口縁部を欠き、底より約30cm程浮いた位置で出土した。また、南西隅ベルト最上層において鉄鏃（№2）1点が出土した。溝の覆土の状態は、他の溝と大差ない状況である。埋葬施設は、台状部内において、2ヶ所やや色調の異なる部分があり、一応記録したが、第2号と同様黄褐色土のよごれの可能性が高く、すでに主体部は削平を受けたものと思われる。

重複関係は第6号は第1・2号より新らしい。第7号との関係は、東溝の断面で確認できると思われたが、左右からのレンズ状堆積であり、溝内では切り合いは確認できなかった。従って溝幅は第7号よりせまく、深さも浅いことから、第7号溝に切られたとも理解される。しかし、第7号の溝幅に比べての溝の部分は幅広く、第6号台状部東辺と第7号台状部西辺部は互の切り合いはないものと考えられることから、切り合っておれば溝内においてその関係がとらえられるはずである。しかし、すでにのべたごとく切り合いの状況は確認できなかった。このことは、同時か非常に近い時期の造営が考えられる。このことは両者の並びや配置の状況からもうかがえよう。

第7号方形周溝墓

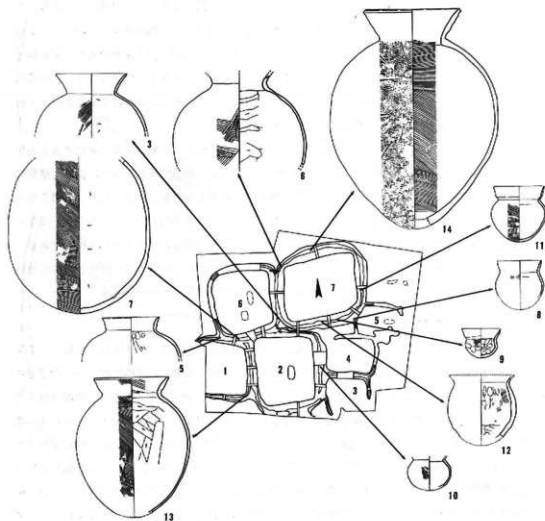
第6号方形周溝墓の東側に接し、発掘区の最も北側に位置する。第2・5・6号と重複し、7基中最大規模をもつものである。南北幅14.8m、東西幅約16m前後を測り、東西に長い平行四辺形に近い長方形を呈す。台状部は南北幅8.3m～10.3m、東西幅12.2m～12.5mを測る。溝幅は最大で250cm、最小で110cm、深さ30～80cmを測る。周溝は各辺の中央が深さ・幅とも大きく、コーナー部に向ってしだいに立ち上がり浅く幅もせまくなっている。断面は台状部側がゆるやかに立ち上がり、外側が急になる逆台形・V字形を呈す。溝の覆土の状態は他のものと大差なく茶褐色系統の土が自然に流入し数層に分けられる。埋葬施設は検出されなかった。遺物は他の周溝に比べ比較的多く出土した。北西隅（№6）、北辺溝（№14）東辺溝（№11）、南辺溝（№8・9・12）、南西隅（№3）から土器が溝底より20～30cm浮いた位置で出土した。№9の小型丸底釜を除いた他の土

器は完形となるものではなく、破片の状態出土した。鉄鍔(№3)が南辺溝より1点出土した。重複関係はすでにのべたように発掘区内において本周溝墓が造営順序からみて最後である可能性が強い。

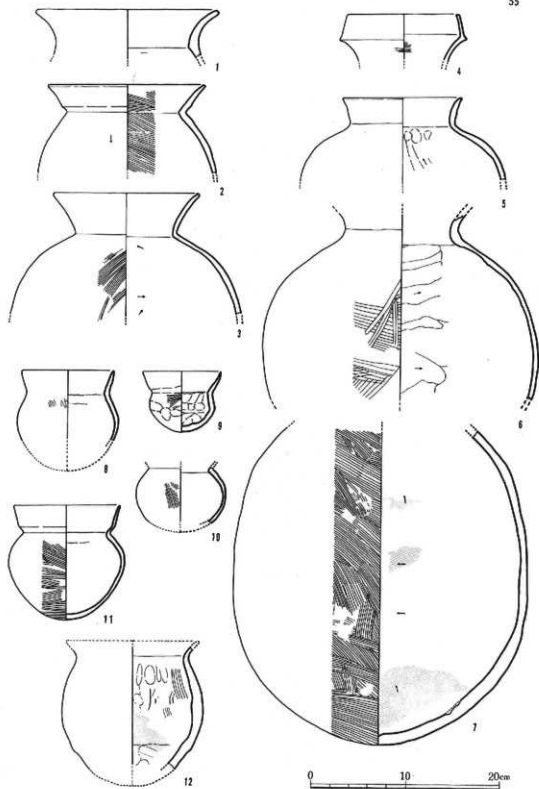
以上が7基の状況である。また、第7号周溝墓の東側において、溝の一部らしい落ち込みが検出されたが、大半が削平を受けており不明な点が多いので扱わなかった、これを周溝墓とすれば8基となる。

土 器

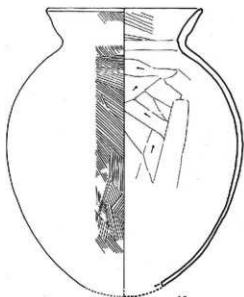
土器は№1・2・4を除き、すべて周溝内より出土し台状部より出土はなかった。土器は№9の小型丸底甕を除き破片で各溝内に小さなブロックをなして出土したが完形となるものはなかった。その内№7・№12・№14の土器の内側に朱が付着している。土器は溝底より浮いた状態で出土し



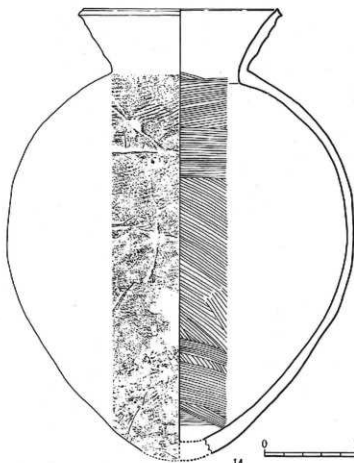
第57図 方形周溝墓出土土器位置図



第58圖 方形周溝墓出土土器実測図(1)



13



14

0 10 20cm

第59图 方形周溝墓出土土器実測図(2)

()は復原法量

番号	器種	法 量	器 形 の 特 徴	成 形 の 特 徴	胎 土・色 調	備 考
1	壺	口径(19.4)	ゆるく外反しながら開く。	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラケズリ	堅 黄褐色～茶褐色	溝墓周辺表採
2	壺	口径(16.6)	口縁部は下方で若干厚い、外面にゆるやかな稜をつくる	外面口縁部はヨコナデ、胴部は頸部から約3cmはヘラケズリ、以下はナデ、内面口縁部はハケ調整の後端部はヨコナデ、胴部はハケ調整	堅	第5号方形周溝墓内出土
3	壺	口径(15.4)	口縁部はやや外反しながら大きく開く、中程でわずかに屈曲する。胴部は肩部がはらずに丸みを持つ	口縁部内外面横ナデ、胴部外面ハケ調整、内面はヘラケズリ、後ナデ	堅 外面黄褐色 内面灰褐色	
4	壺	口径(11.8)	外反した後、わずかに内傾しながら内傾して立ち上がる二重口縁	口縁部上半内外面ともヨコナデ、内面わずかにハケ目残る。下半は外面稜以下は約1cmヨコナデ、以下ハケ調整、内面ハケ調整後一部ナデ	堅 黄褐色～橙褐色	第5号方形周溝墓南東部周辺出土
5	壺	口径(12.7)	口縁部は直立きみに肥厚しながら開き、先端で小さく外反する	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ	堅 黄褐色～橙褐色	
6	壺	—	内面に稜をもたず、肩が張る球形を呈す	外面ヨコナデ、体部はナデられ平滑、内面頸部ナデられ平滑、以下はヘラケズリ	堅 外面黄褐色～明茶褐色	
7	壺	—	下ぶくれの胴部、丸底	外面ハケ調整、内面ヘラケズリ、後ヘラナデ、一部ハケメあり	堅 淡黄褐色	内面に朱の付着あり
8	小形壺	口径(9.8) 体部最大径(10.8)	頸部はあまりすばまらず、口縁部は直立きみに開く	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面肩部付近はハケ目を若干残す以外はナデられ平滑、体部内面おさえ痕ありナデられている		
9	小形丸底壺	器高 6.3 口径 8.3 頸部径 6.3 胴径 6.9	体部はやや扁平で、頸部はあまりすばまらず、内端きみに開く口縁部につづく、口縁部はほそる	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面は指調整痕残るが板状のナデ仕上げ、内面指ナデ後板状のナデ	堅緻 淡褐色口 縁部部分的に黒 褐色、底黒疵あ り	
10	小形丸底壺	—	やや扁平の体部	外面ハケ調整後ナデ、内面上半ヨコナデ、下半ナデ仕上げ	堅緻 外面黄褐色 内面橙褐色	
11	広口壺	口径(11.2) 体部最大径(12.2)	肩部がはり、すばまりきみに丸底の底部につづく、口縁部は一度小さく外反した	口縁部ヨコナデ、体部外面頸部ヨコナデ、以下底部までハケ調整、肩部内面に粘	堅 黄褐色～橙褐色	

番号	器種	法 量	器 形 の 特 徴	成 形 の 特 徴	胎 土・色 調	備 考
11	広口壺	器高(12.0)	後、若干外傾きみに立ち上がり、先端でわずかに外反する	土つき目痕が認められ、その下部に約5cm程ハケ目痕残る。以下ナデられ平滑		
12	広口壺	—	胴部は張らず、口縁部は小さく外反する	胴部内面縁で凹凸はげしい指による調整後、板、ヘラ・指によるナデ仕上げ	やや軟 外面赤褐色	内面底部近くに朱の付着みられる
13	壺	口径 16.5 胴部最大径 25.0 器高(30.5)	口縁部は、外反し中ほどで肥厚する 最大径は胴部中央に位置し、縦長の球形を呈す 底部は丸底を呈す	外面は、ハケ調整、底部付近はハケの後ナデ仕上げ、口縁部はハケの後ヨコナデ内面は、上半部はヨコ・ナメ方向のヘラケズリ、下半部はタテ方向のヘラケズリ、口縁部はナメ方向のハケの後一部ナデ仕上げ、胴部との境は指おさえ	堅 明茶褐色	外面には煤の付着内面下半部炭化物の付着あり
14	壺	口径 21.4 胴部最大径 37.0 器高(47.2)	口縁部は波うちながら大きく外反し、端部は上・下にやや肥厚し平たくおさめる 胴部は肩が張り最大径を中央にもつ、底部は胴部よりすばまりやや突がり気味の丸底を呈すものと思われる	外面は、口縁部はヨコナデ胴部は粗い左下がりのタタキの後ハケ調整、内面は口縁部はヨコナデ、胴部はハケ調整	堅 黄褐色～赤褐色 一部茶褐色 多量の微砂粒とともに小石を混む	内面の一部に朱の付着あり

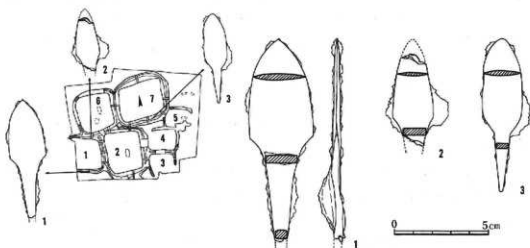
た。出土土器は少なく、第7号周溝墓で8+ α 個体と最も多く他は第1号で1+ α 、第2号で2+ α 個体、第6号で2+ α 個体と少ない。これらの土器は周溝墓に供献されたものであろう。

鉄 器

第1・6・7号周溝墓の溝内より鉄鏃が3点出土した。いずれも原位置にあったものとは考え難く、主体部の副葬品であったものが後世の擾乱において溝内に流れ込んだものであろう。

1は有頸の両丸造りで榕葉形を呈するものである。茎の一部を欠いており、断面四角形を呈する。現在長10.6cm、身部の長さ5.6cm、最大幅3.4cmである。木質などの残存はなかった。2は1と同様の形態である。現在長4.7cm、身の最大幅は2.2cmである。3は有頸の両丸造りで柳葉形を呈する。完形である。最大長8cm、身部の長さ4.9cm、最大幅2.1cmを測る。茎は断面四角形を呈し3.1cmである。木質などの残存はなかった。

(玉永)



第60図 方形周溝墓出土鉄鏃位置図

第61図 方形周溝墓出土鉄鏃実測図

Ⅶ ま と め

1 土 器 の 編 年 (古式土師器を中心にして)

今回の調査では、方形周溝墓および16基の竪穴から古式土師器が出土している。出土状態は必ずしも良好とは言えないが、各竪穴から出土した土器群はほぼ同様の様相を呈しており、竪穴群の営まれた中心的時期のセットを抽出する事が可能であり、土器編年の空白を埋める良好な資料と考えられる。

土師器については前章で観察表によって各個体ごとの説明を行なったが、ここではその編年の位置を明らかにする事を目的として、まず各器種の分類と特徴を述べた上で、大野川流域を中心とした古式土師器の編年を試みることにしたい。

器種は、壺、甕、高坏の三種類が認められる。(第1・2表参照)

壺

複合口縁壺、小形壺、直口壺、小形丸底壺の四種類に分けられる。さらに複合口縁壺はA・Bの二類に、小形丸底壺もA・Bの二類に分類できる。

複合口縁壺A・Bは共に一点ずつの出土であり、竪穴群に直接伴うものであるかどうかは疑問である。特に量的に多く認められるものは、小形壺及び小形丸底壺Aである。

甕

A～Fの六種類に分類される。ただしD～Fは口縁部の形態以外は不明である。

この中で量的に多いのはAで、他は一点ずつの出土であり、竪穴群の営まれた時期に普遍的な甕はAとしてよく、この期の特徴となるであろう。ただしB・Cも出土状態からAと共伴すると考えられる。

高坏

坏部と脚部の接合資料がなく、それぞれの分類を行なわざるを得なかった。坏部はA～Dの四種類、脚部はA～Cの三種類が認められる。

坏部ではA・Bが多く見られ、脚部はA・Bが多く見られる。これらの形態の差は時間差を示すものと考えられるが、それらを明確に分離できるような状態で出土していない。

以上の分類から、確実なセットを抽出してみると、壺は小形壺及び小形丸底壺A、甕はA、高坏は坏部A、B、脚部A・Bということになる。これらの全体的な様相として言える事は、ヘラ磨きが全く見られない事、造形が粗く、ゆがみの見られる土器が多い事などである。このセットは、おそらく竪穴群の営まれた中心的時期の所産と考えられる。

さて、大分県内特に楠野遺跡と関連してくる大野川上、中流域、さらに大分平野^上における弥生時代後期から最古式土師器にかけての土器編年は、近年の龐大な竪穴出土資料の蓄積からはほぼ大

網がまとまりつつある。そのような状況にあって、それ以後須恵器出現以前の古式土師器編年については未だ詳細な論考はなく、立ち遅れは否めない。そこで、最近の研究成果を振り返り、当該地域の古式土師器の編年について述べて行きたい。

玉永光洋氏は従来から言っていた「安国寺式土器」を再検討するにあたって、弥生時代後期～古式土師器にかけての土器をⅠ～Ⅳ期に分けて、Ⅳ期を古式土師器としさらにA・Bの二小期に分けた。そしてⅣB期を「守岡Ⅲ式」の名で呼んだ。最近氏はⅣB期をⅤ期とし、そして新たにⅥ期を加え弥生時代終末から古墳時代初頭の土器編年の見直しを行なっている。氏は改めてⅤ期（「守岡Ⅲ式」）を最古式土師器とし、畿内庄内新式～最古の布留式に併行するとしている。

また、高橋徹氏は大野川中・上流域、大分平野の弥生時代後期の編年を行なう中で古式土師器にふれ、Ⅴ・Ⅵ期を古式土師器にあてている。氏のⅤ期は玉永氏のⅤ期と内容が等しく、庄内新式～最古の布留式に併行する時期であるとする。しかしⅥ期は玉永氏のそれとは異なり、やや新しい様相をもつ土器群で構成されている。

さらに、浜遺跡の報告の中で真野和夫氏等は出土土器をⅠ～Ⅳ期に分類し、Ⅲ・Ⅳ期を古式土師器としているが、これは玉永・高橋両氏のⅤ期を細分する可能性を示すものとして注目される。

このように、古式土師器の中でも古い時期は、弥生時代後期から連続するいわゆるⅤ期の細分と、それに続くⅥ期の位置付けが問題となる。

さて、このような現状にあって当該地域の古式土師器をみると、今回の楠野遺跡などの新たな資料の蓄積により今までほとんど言及されなかった時期の古式土師器に関してもおおまかな流れを把握できるようになった。

それによると、当該地域の古式土師器は三期に大別できる。まず、弥生時代後期以来連続と続く在地系土器（安国寺系土器群）の様相を強く持つ時期（第Ⅰ期）、次に、連続と続いた弥生的様相が姿を消し、布留式の影響を大きく受けた時期（第Ⅱ期）、そして、土器造形技術が粗くなり独自性（地域性）が生まれる時期（Ⅲ期）の三時期である。以下、各時期ごとに述べていく。

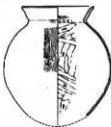
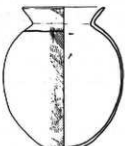
第Ⅰ期

この時期に属する資料は比較的豊富であるが、その中でも最も良好と思われる守岡遺跡第19号住出土の一括土器をまず見てみよう。これは、玉永氏が守岡Ⅲ式とする一括土器である。（第62図）

まず、在地系の土器では、複合口縁壺（1）は頸部と口縁部の伸びがほぼ等しく、胴部最大径を中位にもつ長胴丸底である。そして頸部下の三角突帯は稚拙になり、胴部突帯は断面台形でキザミを施す。単純口縁の壺（2）は、口縁部がやや開きぎみに直口する長胴丸底のものである。壺は二種あって、前時期から系譜をたどれる長胴で口縁部が外反ぎみに開くもの（3）、それとやや球形に近いもの（4）があり、いずれも丸底で内外面ハケ調整である。高坏は坏部が深く、口縁部は小さく外反し、明瞭な稜をもたない（8）。

外来系土器は壺（6）は口縁部がやや波打ちながら開き端部でわずかに上方につまみ上げられたもので、胴部はやや肩のはる球形でやや尖がり気味の丸底である。外面はハケ調整のものが主体

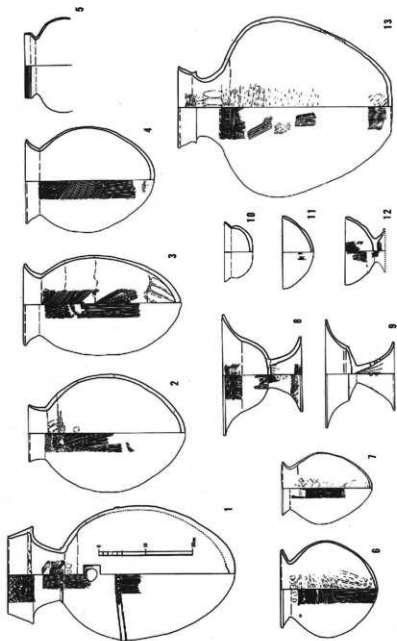
第1表 土器分類表 (1)

	分 類	代表的な土器	特 徴
壺	複合口縁壺	A 	直線的に頸部が立ち上がり一度水平に張り出した後、外反して開く口縁部。
		B 	頸部は外反し、その端部から外傾しながら直線的に開く口縁部で、端部は内傾・肥厚し、やや凹む。
	小形壺		球形の胴部にゆるやかに外反しながら開く口縁部を有す。端部は平たくその先端は外方にややのびる。
	直口壺		偏球形の胴部に、内湾しながら大きくのびる口縁部を有す。端部はほそり丸くおさまる。
	小形丸底壺	A 	やや偏平な胴部に、内湾気味にのびる口縁部を有す。端部は内傾・肥厚し、面をなす。口径・胴部径はほぼ等しい。口縁部高は器高の約1/3を占める。
		B 	肩が張り最大径が上半部にある胴部に短かく直線的に開く口縁部を有す。口径・胴部最大径はほぼ等しい。
甕	A		球形、またはやや縦長の球形胴で最大径は中位にある。口縁部は、微妙な凹凸をみせながら外反して開く。端部は丸くおさまる。 大部分の甕がこれに属する。
	B		胴部最大径を中位にもつやや縦長の球胴体で、「く」の字状に外反して開く口縁部である。口縁部上半でやや肥厚し、端部は隅が丸いが平たくおさまる。肩部に一条の沈線が一周する。

第2表 土器分類表(2)

分 類		代 表 的 な 土 器	特 徴	
甕	C		長胴の胴部に、あまりしまらない頸部から、小さく外反しながら開く口縁部を有す。この類は内外面ともハケ調整後一部ナデ仕上げ。器壁が厚く、特に底部が著しい。	
	D		「く」の字に折れ、一度内湾しながら立ち上がった後、さらに外反する口縁部。	
	E		やや外傾しながら立ち上がった後、先端で小さく外反する口縁部。	
	F		あまりしまらない頸部から、内湾しながら立ち上がる口縁部。	
高 坏	坏 部	A		坏接合部に明瞭な段を持ち口縁部は直線的にのび、先端で小さく外反する。底径はやや小さめで底部は傾斜をもつ。
		B		坏接合部に明瞭な段をもち口縁部は大きく外反しながら開く。
		C		接合部は明瞭な段とならず、口縁部はやや内湾気味に立ち上がりながら開き先端で小さく外反する。
		D		大形の高坏である。接合部は明瞭な段とならず、やや内湾気味に開きながら先端で小さく外反する。
	脚 部	A		上、下の径の差が大きく、ふくらみをもつ脚部に、外湾気味に開く裾部がつく。
		B		上、下の径の差があまりない長脚の脚部に、大きく開く裾部になるもの。
		C		「ハ」の字に開く脚部で、内面の稜はあまり明瞭でない。

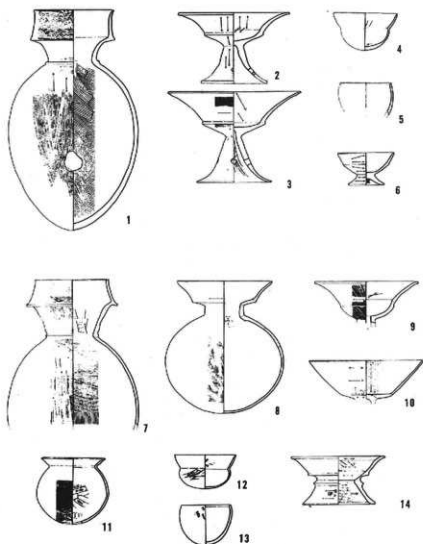
を占めるが、細かなタタキの残るものもある。さらに、やや長胴のもの(7)もある。これらの甕は、肩部に波状文、または横ハケを装飾的に施している。また、「酒津型」の甕(13)も出土している。壺は、口縁部が外湾する複合口縁で、体部は肩がはり底部は平底のもので山陰系としてよいであろう(5)。高杯(9)は、底部に傾斜をもち、口縁部は大きく外反しながら開く。脚部は稜



第62図 守岡遺跡第19号住居跡出土土器実測図(1/4)

をもたずに「ハ」の字状に開く。これは在地系の高坏に外来系の要素が加わったものと理解される。その地、鉢は半球形の体部から、内湾して開く短い口縁部のつくもの(10)、やや内湾しながら開いて終る浅いもの(11)、脚台付の碗状のもの(12)等がある。

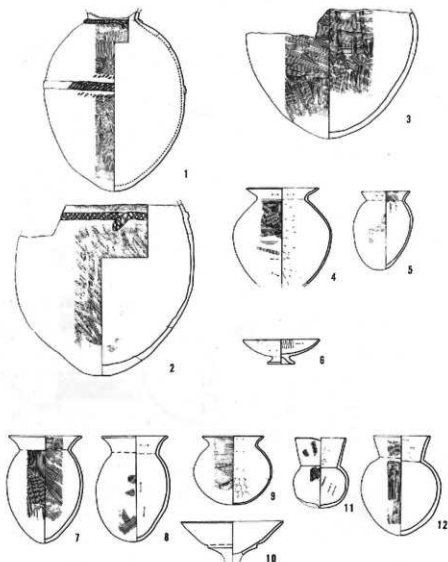
以上が守岡遺跡第19号住出土の代表的土器である。また、在地系弥生土器に系譜をたどれる土器と外来系土器の共伴する資料として浜遺跡D-O1第7土器群と同第3号石棺集辺第1土器群があ



第63図 浜遺跡出土土器実測図(1～6 D-O1第7土器群、7～14第3号石棺集辺第1土器群)(36)

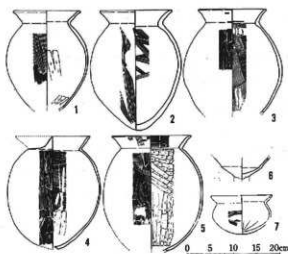
る。

浜遺跡D-O1第7土器群(第63図)は、複合口縁壺(1)、小さな底部から大きく外反しながら開く口縁部に、脚部は稜をもたずにゆるやかに「ハ」の字状に開く高坏(2・3)、鉢は半球形の体部に内湾ぎみの短い口縁部がつくもの(4)と、深碗形で口縁部が尖って終わるもの(5)、さらに壺中位に稜をもち小さな「ハ」の字に開く脚がつくもの(6)などがある。



第64図 日当遺跡出土土器実刻図(1～6、5号住、7～12、8号住)(36)

第3号石棺集辺第1土器群(第63図)は、複合口縁の壺(7)と、いわゆる「茶臼山タイプ」の壺(8)が共伴し、甕(11)は球形胴にやや内湾ぎみに開き端部で上方につまみ上げられる口縁部のもの、高坏は二種あって、弥生土器に系譜を求めうる内湾する底部に外反する口縁部のつくもの(9)と、水平の底部から直線的に大きく開く口縁部のもの(10)がある。鉢は、半球形の体部に若干内湾ぎみの口縁部のつく小形丸底壺と呼べるもの(12)と、深埵形で口端部内面に稜をもち端部が尖って終わるもの(13)がある。さらに鼓形器台(14)が共伴している。



第65図 小園遺跡第107号住居跡出土土器実測図(1/8)

以上の土器群の中で特に在地系弥生土器に系譜がたどれる複合口縁の壺と甕に注目してみると壺は口縁部と頸部の長さがほぼ等しく、頸部下突帯はだれ、胴部突帯は断面台形でキザミが施されており、胴部は最大径を中位にもつ長胴丸底である。甕は長胴と、やや球形に近くなった長胴のものとなるが、共に丸底で口縁部は外反しながら開く。このような特徴をもつ土器群を他の遺跡で探すと、日当遺跡^{第18}、二本木遺跡^{第22}などで見られる。

日当遺跡では5号住(第64図)、8号住(第64図)から出土している。両者とも柱穴内に一括廃棄されたもので、一括資料としてあつかわれる。5号住の壺(1・2)は口縁部を欠くが、台形突帯にキザミを施している。甕(5)は底部が丸底で口縁部は若干外反しながら開く。さらに外来系の影響を受けた土器に、口縁部がやや内湾ぎみに開き、端部で若干外方につまみだされ、肩部がややはりぎみの長胴の甕(4)と、低脚のついた坏(6)がある。

8号住は、複合口縁の壺はないが、甕(7・8)は外反しながら開く口縁部で長胴丸底である。球形胴の甕(9)も共伴する。その他、高坏(10)は底部に傾斜をもち直線的に開く。壺(11)は直口縁のものである。

次に、二本木遺跡では第18号、第22号、第33号、第55号住などで出土している。これらはいずれも前述したタイプの複合口縁壺と甕の組み合わせを有する。しかし、外来系の土器はほとんど見られない。

また、大野川上流域ではこのような組成の土器群が乏しいが、小園遺跡^{第12}第107号住^{第13}には壺は含まないが、同様のタイプの甕がある。

以上、各遺跡の住居跡資料の中からみてきたが、外来系土器において若干の時期差を指摘できる。即ち、庄内新式に属すると考えられる守岡19号住、D-O1第7土器群と、最古の布留式に属す

と考えられる浜3号石棺集団第1土器群である。また、在地系の甕において顕著な長胴と、やや球形に近い長胴、大きく外反しながら開く口縁部のものと、「く」の字状に近く折れ開く口縁部のものと二者が存在するが、これはともに前者から後者への型式変化と考えられる。以上のことからⅠ期をⅠA期、ⅠB期の二小期に細分できるであろう。ⅠA期には二本木18、22、33、55号住、日当8号住、ⅠB期には日当5号住、小園107号住が相当する。

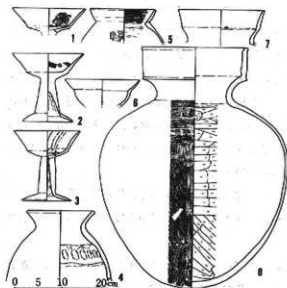
第Ⅱ期

第Ⅱ期は第Ⅰ期に顕著にみられた弥生土器から系譜をたどれる土器が姿を消す時期である。これらの土器群は、他地域をみると畿内布留式の影響を強く受けた形態を有するが、県内においては良好な資料に恵まれない。その中でも小園遺跡第110号住出土土器(第66図)に、やや内湾ぎみであるが先端をまるくおさめる甕(5)がある。共伴の高環(1・2・3)をみると、脚部は筒状を呈する長脚で環部はやや深めで口径の小ぶりなものである。この特徴を有する高環は、いわゆる布留式の典型といわれるものに近似し第Ⅱ期に属するとしてよいであろう。しかし、高環はⅠB期のものと間にヒアタスがあり、その間に一型式置く事が可能である。

そこで第Ⅱ期をⅡA期とⅡB期に分ち、小園遺跡第110号住出土土器はⅡB期に位置付けたい。

ところで地域的にはやや異なるが、中津市上万田遺跡^{RE14}の採集資料の中にやや肩のはる球形胴で、内湾ぎみに開く口縁部を有する甕や、大きく開く口縁部の小形丸底甕などが存在するが、セット関係などが不明であり、ここでは上万田遺跡採集資料の中に第ⅡA期に属する可能性のあるものがある事を指摘しておく。

また、未報告であるが牧ノ原遺跡^{RE15}第8号方形周溝墓に良好なセットがある。(第67図)それは、口縁部が大きく外反し体部にミガキの見られる小形甕(1)、口径が大きい小形丸底甕(3)、脚部が柱状にのび、やや深めの環部をもつ高環(2)である。これらの諸特徴は、小園遺跡第110号住出土土器群よりやや新しい様相をもつが、第Ⅱ期の中でとらえてもよいであろう。



第66図 小園遺跡第110号住居跡出土土器 (3/6)

第Ⅲ期

この時期に属すると考えられるものは従来あまり知られていなかった。特に大野川流域での資料の稀少性は否めない。そこで、やや地域的に離れるが玖珠町おごもり遺跡Ⅰ区方形周溝墓出土の土器群をとりあげてみたい。

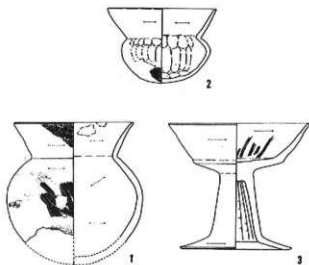
方形周溝墓からは、西側、北側、南側のそれぞれの溝で一括して土器が出土している（第69図）。それらの

中で、北側溝と西・南側溝のものとはやや形

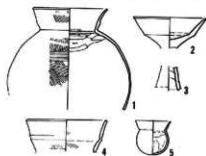
態に差がみられる。それは特に高坏において顕著にみられ、若干の時期差としてとらえられるであろう。即ち、高坏は底部が小さく、外反しながら開く口縁部に裾部内面に明確な稜をもち開く脚部のもの（11）から、底径が大きくやや内湾ぎみに開いて先端で小さく外反する口縁部に、裾部内面の稜が不明瞭になった脚部がつくもの（6）への変化である。また、甕は胴部最大径が若干下位になる。このように北側溝出土一括土器→西、南側溝一括出土土器の流れがあると考え、今後住居跡資料の増加を待ってさらに検討を加えたい。

ところで、先述したように大野川流域においてはこの時期の資料は少ないが、上流域の石井入口遺跡³¹⁷で若干確認されている。その中でも第26B号住居跡出土の土器（第68図）は、出土状態から一括土器としてとらえてよく、数少ない良好な資料のひとつである。

甕（1）は、球形胴を呈し口縁部はやや凹凸をみせながら外反して開く。壺（4）は口縁部のみだが、屈曲部の稜は不明瞭である。高坏は、小さめの底部からやや外反ぎみに開く口縁部（2）と、上、下の径の差が小さい脚部（3）が出土している。小



第67図 牧ノ原遺跡第8号方形周溝墓出土土器実測図（1/4）



第68図 石井入口遺跡
第26B号住居跡出土土器実測図（1/8）

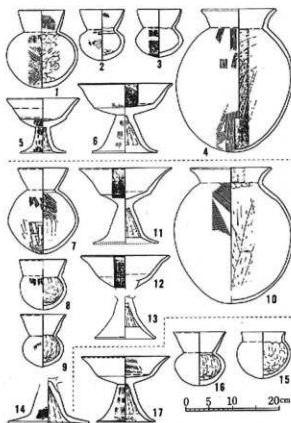
形丸底壺(5)は、口縁部の短いものであまり開かない。

これらの特徴は、ⅡB期とおごもり遺跡Ⅰ区方形周溝墓北側溝出土土器群との間をつなぐもので、第Ⅲ期は石井入口26B号住→おごもり方形周溝墓北側溝→同西、南側溝の変化がたどれる。それぞれをⅢA、ⅢB、ⅢC期としておきたい。

現在までの資料によると、上記のように当該地域の古式土師器は7小期に細分できる。その中で、楠野遺跡住居跡群出土の前述したセットは、ⅢA期が中心となるが、高坏などにやや新しい要素もみられる。また、方形周溝墓群出土の土器は、ⅡB期を中心とした時期のものである。

ところで、今回資料不足で言

及できなかったが、大分平野、大野川中、上流域それぞれの地域の編年、他地域との併行関係、絶対年代の問題、古式の須恵器との時間的關係など今後の問題も多い。(小柳)



第69図 おごもり遺跡Ⅰ区方形周溝墓出土土器実測図
(1～6 西側溝・7～14 北側溝・15～17 南側溝)(1/8)

注1. これらの地域は、弥生時代後期に共通の複合口縁壺を有するが、それに伴う壺はそれぞれ特徴をもつ。この特色は一部古墳時代にまで受け継がれ、厳密には同一土器文化圏を形成するとはいえないが、今回は資料不足から近接する地域として一括して扱う。

注2. 『東九州における弥生式土器研究Ⅰ』『古文化談叢第5集』玉永光洋 1978 九州古文化研究会

注3. 『二本木・松木遺跡を中心とした土器編年(案)』『大野原の遺跡』玉永光洋 1980 大野町教育委員会

注4. 『廃棄された鏡片』『古文化談叢第6集』高橋徹 1979 九州古文化研究会

注5. 『浜遺跡』1980年 大分県教育委員会

注6. 報告者は、Ⅲ期(布留式に先行する時期設定が行われている)を「守国Ⅲ式」にはほぼ相当するとし、Ⅳ期を「茶臼山古墳タイプの二重口縁壺形土器との共伴資料である」として、Ⅲ内新式と最古の布留式を明確に分離しようとしている。これは茶臼山タイプの壺の共伴の有無を問題としているが、この壺の出現に関しては今後さらに検討を要する。しかし、他の器種に関しても、Ⅲ期、Ⅳ期は型式変化

を追う事ができ、連続する二時期としてとらえられよう。

- 注 7. 前述のように、当該地域においては弥生時代後期から古墳時代初期にかけての土器編年は、第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期、第Ⅳ期、第Ⅴ期、第Ⅵ期という呼び方で共通している。そして第Ⅴ期、第Ⅵ期を古式土師器としているが、今回はその見直しも含めて行なった為、新たに古式土師器第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期を設定した。

注 8. 『守岡遺跡』 1979 大分市教育委員会

注 9. 註 5 に同じ

注 10. 『日当遺跡』 1980 大分県教育委員会

注 11. 『大野原の遺跡』 1980 大野町教育委員会

- 注 12. 大野川上流では、竹田市板井尾遺跡、荻町中山遺跡等の弥生時代終末～最古式土師器にかけての時期の遺跡が最近相次いで調査されたが、大野川中流域、大分平野とは若干土器様相が異なるようである。詳細はこれらの遺跡の本報告を待たねばならないが、いわゆる組製窯が、古墳時代になっても工字文突帯を消滅させた姿で存在する事は確かで、これに守岡遺跡第19号住で見られたような複合口縁蓋が明確な形で共存するかどうかが問題であろう。また外來系の土器も、大分平野にみられるように明確に入ってきているのかどうか、粗製窯の残存（言いかえればハケ調整窯が主流にならない）という現象と合わせて、さらに当該地域最古の古墳である七ツ森古墳の出現ともからめて、今後検討せねばならないであろう。

注 13. 『菅生台地と周辺の遺跡Ⅳ』 1978 竹田市教育委員会

注 14. 『上万田遺跡』 1972 中津市教育委員会

注 15. 第12回 理論文化財研究会（宇佐市）における資料による。

注 16. 『おごもり遺跡調査概報』 1977 玖珠町教育委員会

注 17. 『菅生台地と周辺の遺跡Ⅵ』 1981 竹田市教育委員会

- 注 18. 北部九州の併行関係は今後の課題として残るが大分県内で当該地域とともに比較的多くの古式土師器が出土している豊前地域との関係は下記の表に示した。

注 19. 県内最古の古墳である赤塚古墳から土師器が出土しているが、それがⅠa期に属するならば、Ⅰa期を4世紀初頭又は3世紀末にまで遡らせ得るのではないかと考えている。また、Ⅲ期は未だ最古式須恵器との共存はしられず5世紀後葉までは下らない時期が考えられる。

- 注 20. 現在、県内では、古式須恵器と土師器の良好な共存資料に恵まれないが、その中で中津市上ノ原横穴出群において5世紀後葉の横穴から須恵器と土師器が出土している。その土師器はⅢc期よりさらに後に位置付けられる。

第3表 大分県内古式土師器周年表

		大分平野、大野川中・上流域	豊前地域
Ⅰ	A	守岡第19号住居跡、二本木第18号・22号33号・55号住居跡、日当第8号住居跡、浜D—O ₁ 第7土器群	赤塚古墳、赤塚梅林方形周溝墓、赤塚西側方形周溝墓
	B	小園第107号住居跡、日当第5号住居跡、浜第3号石棺、第1土器群、同E—O ₁ 第3号土器群、同D—O ₁ 第5号土器群	内河遺跡 } 上万田遺跡 } 赤塚西南地区方形周溝墓 (N1、N2グリット)
Ⅱ	A		
	B	小園110号住居跡、牧ノ原方形周溝墓、楠野方形周溝墓	
Ⅲ	A	石井入口第26B号住居跡、楠野住居跡群	勘助野地方形周溝墓、赤塚第1発掘区方形周溝墓
	B	おごもりⅠ区方形周溝墓北側溝	
	C	おごもりⅠ区方形周溝墓西、南側溝	

2 その他の土器の時期について

第10号竪穴出土土器 甕と壺が出土している。甕は大野川上流域を中心とする範囲に分布する粗製の甕である。口縁部はゆるやかに外反し端部は平たく面をなし、頸部から胴上半部において2条の三角突帯をめぐらし、その上下を1本の突帯で4ヶ所つなぐものである。底部は、小さな平底を呈すものと尖がり気味の底部を呈すものの二者が出土している。壺は大形のもので、頸部はしまり、口縁部は小さく外反し、胴上半部を欠くが、胴部は卵形を呈し、底部は凸レンズ状を呈す。頸部に三角形、胴下半部に台形の帯状突帯をめぐらし、口唇部・頸部突帯に刻みを施すものである。また、外面には粗いタタキ痕を残している。この壺は本地域では類例をみないものであり、形態、成形の特徴から、北部九州地方の影響を強く受けている土器と理解される。

さて、これらの特徴を有す土器群の時期であるが、粗製甕の特徴からみて、弥生後期後半でも新しい段階（第Ⅲ期新段階^{注1}）に位置づけられよう。なお、第10号竪穴出土土器群は一括投棄の状態を示す土器群と床出土の土器群に分かれているが土器群の使用・廃棄等による時間的考えられるが型式における時期差は土器群の特徴から看取されない。

第17号竪穴出土土器 土師器と須恵器が相伴している。土師器は、甕・鉢が出土している。甕はずんどうに近い胴部からゆるやかに幅広い丸底に移行し、口縁部は一度立ち端部にむかってゆるやかに外反し厚くなるなどの特徴を有し、カマド施設に対応した形態となっている。鉢は内湾して立ち上がる碗状を呈すものである。須恵器は、甕（胴部破片?）・蓋環（蓋破片）・高環（脚）等が出土している。しかしいずれも細片であるため時期比定などに不確定な状況のため、C地区の状況を少しふれてみたい。C地区では2基^{注2}のカマドを有す竪穴が検出されており、土師器・須恵器相伴して出土している。出土状態・器種とも良好であり、土師器甕等の特徴から第17号竪穴とはほぼ同時期の所産と考えられる。須恵器は蓋環（蓋・身の破片）・甕の破片等が出土している。その内時期決定の資料とすることの多い蓋環の全体を復元できるものが数点ある。蓋は天井部と体部との境に若干の段や稜をもち、全体に扁平なもので、坏身は蓋受けの立ち上がりが低くなっており、小形である。ヘラケズリは天井部の一部に施されている等の特徴を有している。このような特徴をもつ土器は北部九州地方須恵器編年のⅢ期後半～末葉頃の年代が与えられよう。このことは、第17号出土高環（脚部）や蓋の特徴からみても矛盾しない。従って、第17号出土土器群は6c後葉～末葉頃の所産に位置づけられよう。

なお、この期の遺構は、本地域では初例であり、現段階ではカマド出現期の上限とすることができ^{注4}る。

（玉永）

注1 高橋徹「廃棄された鏡片一遺後における弥生時代の終焉」「古文化談叢第6集」1979・清水宗昭他『大野原の遺跡』1980 大野町教育委員会

注2 牧尾満則氏教示、なお、カマド施設を確認した住居跡は2基であるがこの期の住居跡は他に1基ある。しかし、後世において削平を受けており一部しか残っていない。

注3 小田富士雄氏等による研究成果

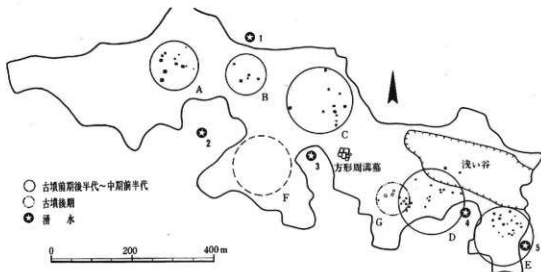
注4 以降については竹田市原山遺跡において奈良期のカマドを有す住居跡が2基検出されている。
玉永光洋他『菅生台地と周辺の遺跡』 1979 竹田市教育委員会

3 集落と方形周溝墓について

東西約 1.3km におよぶ楠野台地上において、約70+α基の堅穴群^{図1}と方形周溝墓7+αおよび溝が検出され、堅穴群は台地の広範囲において分布し、方形周溝墓は一ヶ所に集中している。溝は台地西部と東部（A調査区）において検出されている。

堅穴群の時期はその大半が内部の発掘を行っていないため不明瞭なところが多いが、弥生時代に属する堅穴はきわめて少なく、明確にそれとわかった堅穴はA調査区のみである。また、表探遺物でもきわめて少ない。堅穴群の中心をなす時期は古墳時代前期後半代～中期前半代（ⅡB～ⅢA期）のものである。次に古墳時代後期（ⅥC後半～末）に属する堅穴がある。この期以降の堅穴および遺物は検出されていない。また溝は部分的な調査で、遺物は出土していないので時期については不明であるが、いずれも古墳期の堅穴に切られている。

堅穴群の分布をいますこし細かくみると、古墳時代の前期～中期に属する堅穴群は、楠野台地の南側に開析された湧水谷（No.2～4）と崖の中腹でテラスとなっている部分で出る湧水（No.1・5）を取り巻き、いくつかのまとまりある群（A～F）を形成して楠野台地上に営まれていたものと思われる。それぞれの群は約100～200mの空間をもって分布しているが、すべてが同時に開始したとは考えられない。各群の時期は先にのべたように、不明な部分が多いが、方形周溝墓の造営時期とA調査区の堅穴群と若干の時期差がみられることから、各群の形成には微妙な時期差を想定した方がよいであろう。しかし、各群の堅穴覆土内で採集された土器にはそれほど差はなく、ある時



第70図 楠野台地集落分布図(想定)

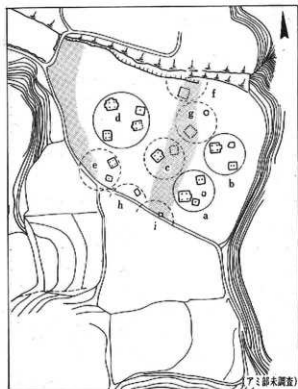
期数群が同時に営まれていたことは想像できるのである。

今回、これらの群の一つA調査区(E群)を調査することができた。

計21基の堅穴が検出され、弥生後期の堅穴が1基あるが、他はすべて古墳中期前半(ⅢA期)に属するものである。その内、調査できた堅穴は15基であり、火災を受けた堅穴が1基確認された。16号堅穴の円形をのぞけば、方形基調である。その内第1・5・12・14・15号堅穴に方形の張り出し部を有す。第1・5・15号堅穴は東側の中央部に一ヶ所、第12号堅穴は西側中央に一ヶ所、第14号は西・北・東側に3ヶ所ある。そして、第1・5・15号堅穴には、張り出し部の両側に対をなす浅い柱穴を有し注目される。この柱穴は、張り出し部附近の上屋に関するものと考えられることから、一応ここを出入口と想定することができよう。とすれば第12号堅穴が西側へ、第14号堅穴が西・北・東の3ヶ所の出入口があることになる。しかし、第14号は西側・北側と東側では柱穴の位置など異なり、全て出入口とするには躊躇する。いずれにしても3方への張り出し施設は初例であり今後の課題である。規模は大型・中型・小型とあり、床面積は最大で37㎡(第1号堅穴)、最少で4㎡(第4号堅穴)を測る。柱穴は20㎡を超える堅穴は4本主柱穴となっており、20㎡未満のものは2本・1本・0本となっている。炉は、4基(第4・8・15・16号堅穴)を除き、南側の主柱穴間や中央よりやや南側に位置する地床炉である。炉内には木炭粒子を多量に含む黒色土がつまっているが、床面が焼け焼土化した例はない。他の4基は、第4・15号堅穴が北側に位置し、第8・16号堅穴には炉跡は検出されなかった。貯蔵穴(この場合は炉の南側に位置する隅丸ないし不定形の皿状の浅い落ち込みを含まない。)は、6基の堅穴から検出された。位置は壁および竈周辺にあるが、これといった規格性はない。円形・楕円を呈する落ち込みである。中からは磨石・砥石・土器破片等が流れ込んだ状態で出土したが、他の遺物は何ら確認できなかった。一つの堅穴内における貯蔵穴の数は1個から5個程度ある。その内、第2・16号堅穴の場合は床面積の内で貯蔵穴の占める割合がきわめて多く、生活空間がほとんどないといった状況である。竈溝は検出されなかった。

さて、これらの堅穴群配置についてみてみる。堅穴群は土置き場や発掘区の南側地域が不明であり、また、いろいろな制約のため判然としないところが多いが、E群とした北半分の状況についてはある程度その配置を知ることができる。恣意的ではあるが一試案として第71図のように分類してみることができる。この分類はa・bグループの状況を手がかりとして行なっている。すなわち、張り出し部を有する大型の堅穴とその張り出し部側に向う中・小型の堅穴で構成される3~4基のグループである。なお、dグループについては3方に張り出し部を有す第14号堅穴を含めたが、特異な形態であり、その方向も他とは異なるため、これを独立させることも考えられる。しかし、他の大型の堅穴と比較して張り出し部が異なる以外何ら変わったところはなく、規模も第1号堅穴よりは小さいものである。e~iは、実のところこじつけの感が強く、これは今後に期待しなくてはならない。cはa・bと同様な構造を考えている。

以上のように多くの問題はあがるが、a・bの状況は注目すべき内容と考えられる。すなわち、この期における集落を構成する小最の単位として位置づけられる可能性が大きいと考えられるわけで



第71図 A地区古墳時代中期竪穴分布図

ある。しかし、この単位を即3～4軒の住居からなるとしてよいかどうかであるが、かならずしもそうではないようである。たとえば、aグループ内における第2・3号竪穴、bグループ内における第7号竪穴等の小型に属する竪穴は、規模や内部構造から住居以外の機能が想定され、就寝する住居の可能性は少ないと考えられる。また、第16号竪穴の場合も、住居の機能は考え難く、むしろ貯蔵を目的とした施設の感が強い。さらに、dグループでは、こういった小型の竪穴はなく、他のグループとは異なる構成となっている。このように、各単位はいわゆる住居とともに、他の機能を有した施設を含む構成が考えられ、それは3～4基の竪穴群からなるものと言えよう。そしてE群はこのような単位の集合体として成

立しているものと考えられ、楠野台地に展開した各群も同様な構成体としてとらえられるものではなかろうか。

さて、次にこのような集落を形成している竪穴群の集合体について少しふれておきたい。山尾幸久氏は『魏志』倭人伝に記載のある「屋室」・「門戸」・「宗族」という用語から社会構成の実態についてふれている。それによると、屋室を個々の竪穴住居としてとらえそのいくつかのまとまりを門戸、そして門戸が同族・地縁の紐帯によっていくつか集まってできた集団を宗族としている。これを歴史上の用語に置き換えれば、屋室＝世帯、門戸＝世帯共同体、宗族＝農業共同体（氏族）ということになる。この見解は「倭人伝」の段階頃の社会をのべたのであるが、共同体の實質過程からみれば、家父長制的世帯共同体（家父長制的家族）成立以前は、以然として弥生時代以来の伝統的な体制を残しているものと考えられ、集落の実態についても、従来の特質を有しているものと考えられる。^{注6}

これらのことを楠野遺跡に即して見るならば各群（A～F）の集合体を宗族に、数群の内一群を門戸に、さらに最小単位である竪穴群（a～i）を屋室にそれぞれ対応させることも可能であろう。そして、楠野台地の自然地理的環境・竪穴群の配置などからみて、親族的血縁関係で強固に結ばれた集団とすることが正しいように思われる。そして各群の分布状態からみて、数系統の血縁関係が認められるが、楠野遺跡の場合は出自はもととひとつの可能性が強いものと思われる。^{注7}

第4表 楠野遺跡堅穴一覽表

堅穴番号	平面形	主柱穴	規 模		内 部 施 設				時 期	備 考
			(m) 長軸×短軸	(m ²) 床面積	炉	竈	カマド	貯蔵穴		
第1号堅穴	長方形	4	6.1×5.7	37	南主柱穴間	—	—	—	古墳中期	東側に張り出し部
第2号堅穴	方形	1	3.6×3.3	12	南 東 側	—	5	—	古墳中期	多くの土師器
第3号堅穴	方形	2	4.5×4.4	20	中央南側	—	1	—	古墳中期	鉄鏝・多くの土師器
第4号堅穴	方形	—	2.2×1.9	4	北 側	—	—	—	古墳中期	—
第5号堅穴	方形	4	6.0×5.2	27	南主柱穴間	—	—	—	古墳中期	東側に張り出し部 鉄鏝
第6号堅穴	長方形	2	4.8×4.0	18	中央南側	—	—	—	古墳中期	—
第7号堅穴	長方形	—	3.5×1.5	8	中央南側	—	—	—	古墳中期	西側に張り出し部
第8号堅穴	長方形	1?	3.3×2.6	9	—	—	—	—	古墳中期	—
第9号堅穴	方形	4	4.7×4.2	20	中央南側	—	—	—	古墳中期	—
第10号堅穴	方形	4	5.1×5.1	28	南主柱穴間	—	—	—	弥生後期	東側に張り出し部 多くの土器
第11号堅穴	長方形	4	5.5×4.6	24	南主柱穴間	—	4+α	—	古墳中期	ガラス製小玉
第12号堅穴	長方形	4 (1本 未検出)	5.3×4.9	—	南主柱穴間	—	—	—	古墳中期	西側に張り出し部 管玉 磁石 火災
第13号堅穴	長方形	1	4.8×4.1	18.5	中央北東側	—	3+α	—	古墳中期	磁石
第14号堅穴	方形	4	5.7×5.2	32	中央南側	—	1	—	古墳中期	西・北・東側に張り出し部 管玉
第15号堅穴	方形	4	5.6×5.4	30	北主柱穴間	—	—	—	古墳中期	磁石
第16号堅穴	円形	—	2.8×2.65	—	—	—	2	—	古墳中期	—
第17号堅穴	長方形	4	7.5×6.75	49	—	北壁中央	2	4壁	古墳後期	紡錘車・須恵器・土師器・火災

次に、このような楠野台地に営まれた集団の位置づけについて方形周溝墓を整理するなかで考えてみたい。

方形周溝墓は、合計7基検出された。しかし、第7号周溝墓の東側に残存とおぼしき周溝の一部が確認され、また調査区の南側一帯がすでに削平を受けていたことなどからみて、全体の数については不明な部分が多く残念であった。しかし、北・東側についてはその範囲をおさえることができた。墳墓群は、楠野台地の中央やや東側の南縁部において群をなし分布している。周辺には他の遺構がみあたらず、この地域が墓域となっていたものと推定されるが、C地区堅穴群と約100m程度の空間しかなく、立地も住居群の景観と変わらないことなどから、集落に近接して墓域を設定したものと考えられる。規模は最小で6.5m×8.3m（第5号）、最大で14.8m×16m（第7号）あり、10m以下のもの3基（第3・4・5号）、10m以上のものが4基である。造営順位は、方向・重複関係等からみて、〔3・4・5〕→〔1→2〕→〔6→7〕の順位が考えられるが、3～5号の関係は不明であり、1と2号、6と7号の関係は同時か後者が新しいと考えられるが、方向等からみて緊密な関係にあると思われる。また、供献されたと思われる土器は型式的に大差なく、短期間の内に次から次へと造営されたものと思われる。盛土の状況は不明であるが、いずれも内部主体部が削平のため未検出であり、周溝内の堆積状況等からみてもある程度の盛土は想定される。また、陸橋部はなく、コーナー部が浅く、溝幅を狭くする程度である。土器はいずれも溝底から浮いた位置で検出され、第7号周溝墓が最も多く、全体として少ない状態であった。器種は、壺・甕であり、高

坏が一点も出土していないことが注目される。土器の内面には朱が付着しているものも一部あった。また、第1・6・7号の周溝からかなり上位の位置で、鉄鍬が検出された。これは、もともと主体部の副葬品としてあったものが、後世の擾乱において溝内へ流れ込んだものと考えたい。埋葬主体部は、すでにのべたように、検出されなかった。しかし、第2号周溝底において土坑墓が1基検出され注目された。周溝内からは、主体部に関する石材等は検出されてなく、主体部は、箱式石棺等の施設はなく土坑及び木棺等が想定される。

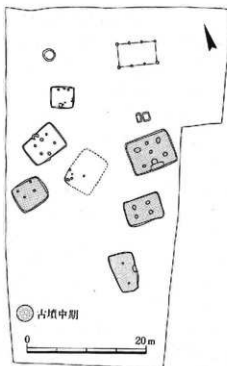
したがって、主体部が一墳多棺葬か一墳一棺葬であるのか全くわからなく、また、副葬品もほとんど不明であり、その性格づけにはきわめて困難な状況となっている。しかし、このような状態の中で、第6号周溝底で検出された土坑の存在は一墳多棺葬をある程度推測させるものであり、また各墳墓の周溝は、重複関係においてマウンド部を侵すことなく造営がなされており、さらに、堅穴群に近接する立地状況等からみて、ある程度その性格についてふれることができる。

すなわち、上記の特徴は、共同墓地的な様相を強くもっているものと考えられ、小地域の首長的性格は考えられない。むしろ、楠野台地に移った母集団における有力な世帯とその近縁者集団としての性格を考える方が妥当性が強いであろう。そして、楠野の集団は、七ツ森古墳群の被葬者を中心とする政治的地域集団の下部単位を社会的背景とし、大和政権の新しい支配体制の末端に組みこまれた集団とみることもできるのではなかろうか。

次に古墳時代後期に属する堅穴群についてのべる。

この期(6c後半～末)に関する遺構は、前代の遺構が台地のほぼ全域に分布していたのに比べ、一ヶ所に集約されるような分布の状況を示している。楠野原台地の東方、前代の時期にあたるD群と重なる位置で検出された。現在までの段階では、この地区に集中している以外検出されていない。

すでにのべたように、第17号堅穴の周辺には10基前後の堅穴が分布しているものと考えられ、C地区において3基が調査されている。C地区については、詳細は報告を待たねばならないが、時期はほぼ第17号堅穴と大差ないものである。規模は第17号に比べ小形で大きさにばらつきがあり、この期も



第72図 C地区の遺構配置図

第5表 楠野遺跡方形周溝墓一覧表(B地区)

単位 m

号数	南北幅	東西幅	台 状 部		主体部	周溝幅	周溝深	除橋部	周溝出土遺物	備 考
			南北幅	東西幅						
1	11.0	(10.4)	8.5~9.45	8.3+ α	—	0.6~1.2	0.1~0.5	—	土師器 1 + α ・鉄線 1	西辺未調査
2	14.4	13	10.8~12	9.7~10	—	1.4~2.1	0.2~0.7	—	土師器 2 + α	南辺周溝内より土版 1 基検出
3	(8.5)	8	(7)	7	—	0.5	0.05~0.1	—	—	南辺削平
4	(7.5)	(9.5)	5.8	8.2	—	0.5~0.6	0.25~0.45	—	—	周溝の一部調査
5	(6.5)	(8.3)	5.3	7.5	—	0.4~0.6	0.15	—	—	周溝の一部調査
6	13.7	(12)	9~10.9	9.7	—	0.8~1.7	0.4	—	土師器 2 + α ・鉄線 1	北・西辺未調査
7	14.8	(16)	8.3~10.3	12.2~12.5	—	1.1~2.5	0.3~0.8	—	土師器 8 + α ・鉄線 1	ほぼ完掘

大型・中型・小型といった構成をなしている。平面形態は長方形を呈する。遺物は、土師器・須恵器・他に金環が出土しており、この期の横穴墓等に副葬される遺物として注目される。3基の内1基は削平を受けて不明であるが、他の2基はいずれもカマドを有しており、おそらくすべての堅穴にカマドをもつものと考えられる。第17号堅穴は7.5m×6.75mを測り、大型に属するものであり、北壁中央にカマドをもち、壁には周溝をめぐらしている。遺物は、土器類の他に紡錘車が出土している。これらは、いずれもカマド施設を有する堅穴住居跡として理解される。また、C地区内の北端部において、掘立柱の建物が1棟検出されており、調査者によると遺物等の出土はなく、時期比定には苦慮していると聞いたが、もし、この建物がこの時期のものであるならば、堅穴式と掘立柱(住居とする場合)の併存は重要な意味を内在しているものと考えられる。

掘立柱の建物は気になるが、第17号は、規模やその他の施設等は注目すべき内容であると思われる。しかし特殊な性格を示すものは何らない。

以上のように、この時期の最大の特徴は、住居形態の急激な変化をみせているということである。前代まで住居内の火の施設は炉を中心としていたが、住居の壁に付設されたカマドがそれに変わる。また、すべての住居に貯蔵穴が備わり、蒙溝をめぐらす。特にカマドの付設は、カマドを中心とした厨房の一角が住居内に形作られるのであり、日常土器の形態等を含めた生活様式の大変革がなされたものと思われる。そして、カマドは当初より完成された姿として付設されているようである。このことは、前代の集落との時期差がかなりあり、その後をつなぐ資料も現在のところ確認されていないことなどからすれば、前代の集落とは断絶しているものと思われ、この期の集落は新たにこの地に進出してきた小規模な経営単位の集団として理解できないであろうか。それは、6c以降顕著になっていく群集墳・横穴墓群形成の社会的背景として言われているような、家父長制的世帯共同体の成長・家族の自立化とは無関係ではないものと考えられ、集落の構造面でも、また農業経営の分野でも一段の変貌を成しとげていたと推測される平野部を含めた周辺部の動きの中で、捉えていく必要があろう。

歴史的環境の項でものべているように、大野川上流部の台地上に立地していた弥生時代後期の集落は、古墳時代に移行すると、いくつかの地域的な政治集団に統一されていったものと考えられ（現在のところ、セツ森古墳群が造営された舊生台地周辺において顕著な例を見出すのみであるが。）、その最大がセツ森古墳群とその周辺の集落群である。しかし、この地は弥生集落を母体として成立したものと考えられるが、要衝地といった外的要因が強く感じられるのであり、この要衝地としての使命を終えると衰退の一途をたどっていく地域のようなのである。おそらく、不安定な生産基盤にもその要因は考えられるのである。

そのことは、弥生期にあった大半の集落は上流部台地から姿を消していることなどからみて、竹田盆地や河川沿いの沖積地・支谷・谷戸といった地域に移っていくことが想定されるのである。畑作・狩猟中心から水田稲作中心へとしだいに移行していったものと推定される。それは、半湿田・乾田を開墾・耕作する鉄製農具、特に鉄鋤^{図11}の普及等が考えられる。5c後半～6c初頭に比定され、横短板紙留短甲・刀・鉄鏝を出土し、その遺物から小地域の酋長墓的性格が考えられる扇山横穴^{図12}が沖積地を望む丘陵上に出現していることや、6c代になり支谷・支谷に面した崖に横穴墓が数多く形成されていくことから、集落がこの地に移っていったものと考えられる。おそらく、この動きは5c～7c代にかけて徐々に沖積地から谷戸・支谷へと進むものと考えられ、この過程では、母村と分村といった関係ではなく、経営単位の縮小＝小規模な集団へと世帯（家族）の自立化が進んでいくものと思われる。

6c後半～末に出現した楠野の小規模な集落もこのような新たな動きの中で、畑作のために原野の開墾に向った集団を意味するものとして理解できないだろうか。そして、大・小の住居のあり方からみて、複数の世帯とその類縁者で構成された家族の可能性が高い。しかし、この畑作への動きは、共同体の紐帯から解き放たれた小家族へ発展する契機をも含んでいたものと思われる。舊生台地の南側に位置する原山台地で検出された奈良期の集落の特徴は、小さな経営単位に分れた自立農民層の姿としてとらえることができるのではなかろうか。^{図13}（玉永）

- 注1 本来であるならば堅穴式住居跡とすべきであるが、すべてが住居の機能を有しているものとは現在考えていないので、あえて今回は堅穴群として記述している。
- 注2 張り出し部を有する堅穴は、大野川上・中流域の弥生時代後期の住居跡から見ることができる。外側に張り出すもの、内側に張り出すもの等があるが、いずれも、一方向のものである。
- 注3 このような炉の形態は、大野川上・中流域の弥生時代の住居跡と同様な形態である。また、炉の位置についても弥生期のものと基本的には変化がなく地域的な連続性がみられる。
- 注4 この土壇についても、弥生期と同様な形態であり、位置についても炉の南側にある。従って、炉とセットになる施設と思われるが性格については現段階では不明なところが多い。
- 注5 山尾幸久「政治権力の発生」『岩波講座日本の歴史』1975 岩波書店
後藤宗俊「大和国家の成立と二帯の在地酋長」『大分県史古代編』1982 大分県

- 甘粕建・西谷正・吉田晶「古墳文化と時代像をもとめて」『歴史公論63』1981 雄山閣
- 注6 和島誠一・金井塚良一「集落と共同体」『日本の考古学V』1970 河出書房新社
佐田 茂「群集墳形成の一視点」『史淵 110輯』1973 九州大学文学部
佐々木達夫「古代村落の変遷過程」『原始古代社会研究1』1974 校倉書房
- 注7 服部敬史「古代集落の形と特徴」『日本考古学を学ぶ3』1979 有斐閣
- 注8 小田富士雄「西日本における晩生期古墳の地域相」『古文化談叢4』1978 九州古文化研究会
- 注9 C地区の状況については牧尾義則氏の御教示による。また、現在のところ大分県内におけるカマドをもつ住居跡の検出は、宇佐市葛原遺跡(6c 後半~末)、大分市地蔵原遺跡(現在調査中であり詳細は不明だが、6c 後半代をさかのぼらないとのことである。また、カマドの形態も類似する点が多いと聞く。)等で数多く検出されているが、遺跡数としては極めて少ない。
「葛原遺跡」『宇佐地区開場整備関係発掘調査概報』1978 宇佐市教育委員会
地蔵原遺跡は大分市教養課坂和氏の御教示による。
- 注10 注6の文献等による。また、このことについて、大分県下毛郡上ノ原横穴群の調査において注目すべき成果が提出されている。すなわち、I期・II期(5c 後半~6c 初頭)に属する初期横穴墓群の初葬は全て熟年~成人男性を埋葬している。このことから、調査者はこの期を家父長制の確立期として捉えている。
村上久和・吉留秀敏、「上ノ原遺跡調査概報I・II」1982・83 大分県教育委員会
- 注11 鍬・鋤の検出は大分県内の場合極めて少ないが、鍬については菅生台地に立地する小国B地区 122号住居跡より、鉄板を左右から折り返す大形鉄器が出土しており、鍬の機能が考えられる。鋤は、宇佐市葛原遺跡第18号住居跡よりU字形鋤が出土している。
『菅生台地と周辺の遺跡VI』1978 竹田市教育委員会
「葛原遺跡」注9と同じ文献
- 注12 真野和夫「古墳時代」『大分の歴史1』1976 大分合同新聞社
- 注13 その反面、弥生時代以降においても、台地上に残り、継続して営まれた集落も当然考えられ、この側面からの追求を忘れてはならない。しかし、古墳時代以降におけるこの地域は、沖積地から谷戸・支谷へと大きな動きが想定されるのであり、この地を本質とした地縁的な共同体(その内部を含めた)の分解過程の中で、集落の動きをとらえてみる必要もあろう。
- 注14 標高 約590mの原山台地上に位置し、湧水谷を有し、小支谷にはさまれた小規模な台地の北端に立地する。3基の堅穴住居跡が検出されている。その内、2基が発掘されている。住居跡はいずれも東側にカマドを有し、その南側(南東コーナー部)にカマドに接するように貯蔵穴を設けている。規模はいずれも4~5mを測り、方形を呈しているなど平均化している。遺物は土師器・須恵器の土、砥石・刀子・鏃等が出土している。周辺部をグリッド方式で試験しているが、遺構の密度は薄く、10軒にみたない程度の小規模な集団であろう。
- 注15 注7の文献

5 大野川上流域の畑作農耕について

楠野遺跡のある大野川上流域では、近年土地改良事業に伴う発掘調査により、相ついで弥生時代～古墳時代の集落跡が検出されている。楠野遺跡もそのひとつであるが、そのほとんどは弥生時代後期のものである。この地域では、この弥生後期に爆発的に集落が拡大し増加した事を示している。当然これらの集落の発展を支えた生産基盤が問題となる。この飛躍的な発展の背景として、何らかの農耕文化の普及又は発展ということが考えられるはずである。この場合多くの遺跡は高燥な火山灰台地上にあり、この台地を刻む谷は深く急峻であるから、常識的に台地上の畑作を中心に考える他はない。台地上における畑作と、周辺の山林資源の採集・収奪が主たる生業であったと考えられるのである。しかし、この畑作の検証となると必ずしも容易ではない。現在の所、畑作を裏づける穀物遺体等も出土例に乏しく、生産手段としての石器・鉄器等の分析もお今後を待たねばならない。それらの分析は他にゆずるとして、ここではこの地域での〈畑作〉の歴史を、現代の状況をふまえながら概観しておきたい。私見では、この作業を通して抽出される当地域での畑作農耕の諸様相と、原史時代の畑作が無縁異次元のものであるとは考えられず、この作業の中から地域の原始畑作農業を考える上で参考とすべき所見が、少からず得られると思うからである。

竹田市菅生地区から萩町柏原一帯は、近世には菅生四原^{（四）}と呼ばれ、当地を領した岡藩領下最大の畑作地帯として知られていた。今でも阿蘇外輪山東麓の火山灰台地に、広々とした畑地が展開し、レタス、キャベツ、トマト、トウモロコシ、タバコ等が植えられている。養蚕に供する桑畑も多い。ただ現状をみると畑地に混って多くの水田が目につく。しかし、この大野川上流の台地上における水稲耕作は、そのほとんどが近世後期以後、とくに明治以降に開田されたものである。もともと不安定な畑作中心の農業から脱し、水田中心の農業を確立することは、近世以来、この地域の為政者・住民共通の悲願であった。これを実現するためには、まず第一に用水を引かねばならない。高燥な火山灰台地、その間を刻む無数の深い谷、それを克服して安定した水利体系を確立することは容易ではなかった。この地域の大規模な灌漑工事は、寛文2年（1662）の津原井路の着工に始まる。これは岡藩が大野川の支流木下川に水源を求めて着工し延宝7（1679）完工し約10haの開田を果したもののだが、用水の漏れ等のため機能を失い、間もなく田地も荒廃し失敗に終るという有様であった。その他菅生地区の旧今村一帯にかかる天保井路も天保7年（1836）に完工し楠野地区などを水田化する契機となっている。

しかし、この地域に真に安定した水利を確立するためには、さらに大規模なプロジェクトを必要としていた。これにひとつの展望を与えたのは明治14年（1881）の工藤祐範の発起である。彼は大野川上流の諸条件を考え、積年の調査成果をふまえ、その水利の水源を、現熊本県阿蘇郡の大谷川の豊富な水に求めた。これを県境沿いに幾つかの谷をまたいで引いて、これから多くの支線を配して給水しようとするものであった。当時としては夢のまた夢としかいえない壮大なプロジェクトだったが、この大事業の完遂なくして、大野川上流の菅生四原一帯の耕地の安定化は果しえないのが現実であった。このプロジェクトの最終的な完成は、昭和15年（1940）の大谷留池の完工であったから、

事業の規模の大きさがわかる。要するに当地の火山灰台地に水を引き、水田化してゆくという構想は、この地区では近世後期から現代にいたってはじめて実現したのである。こうしたプロジェクトの実現する以前の当地の農業が、そのほとんどを雨水に依存した粗放的な畑作と、狭い谷あいのわずかな田による他なかったことは容易に想像できよう。江戸時代初期の郷村の石高を示した正保4年(1647)の「豊後国郷帳」は、当地域における大規模灌漑の導入以前の農業を知る上で興味深い史料である。ここには当時の石高が畑と田に区分されて表記されており、当時の畑と田の耕地率の大概を把握できるからである。この中から菅生地区と柏原地区の分を抽出すると下表ようになる。

これらの郷村は、阿蘇外輪山東麓の火山灰台地が、大野川の支流によって開折されて山きたなかなば独立した台地上に分布している。

この中には^{しげた}開田、舞次等のように、明らかに台地と谷の境界に位置し、水田耕作の比重が相当に高いところもある。これらを別にすれば他の村落は、一様に畑作が卓越している。特に柏原台地では畑作のみに依存した郷村が多い。菅生台地でも、全体として畑が卓越し、地域としては畑作地帯の様相が鮮明に抽出できる。例えば楠野村は石高66石のうち63石が畑で3石が田である。畑作の占める率は実に93%に達する。田畑の収量の差を考えつつ耕地面積の比に換算すれば95%をこえることとなろう。当時の石高の平均的水準から換算してみれば、5町歩ほどの畑と、0.3町歩(3反)ほどの田で形成された村であったことになろう。この3反の田は、現在の集落の東西にかん入した小谷にあったのであろうか。

この他、楠野村に近い^{あまぐし}甘繰村は43石すべてが畑、いってみれば純粹の畑作村落である。地域の中

第6表 柏原・菅生地区近世村落の石高と畑地率 正保4年(1647)郷帳による

柏 原 地 区					菅 生 地 区				
	石高計	田	畑	畑地率		石高計	田	畑	畑地率
	石	石	石	%		石	石	石	%
陽 目	121.8	31.7	90.1	74	菅 生	203.1	43.7	159.4	78.5
八 屋	21.2	0	21.2	100	原 山	129.1	13.5	116.1	90
叶 野	85.6	0	85.6	100	甘 繰	43.9	0	43.9	100
中 山	28.4	0	28.4	100	田 代	80.9	16.8	64.1	79
高 榎 木	44.3	0	44.3	100	今	234.8	45.4	189.4	81
新 藤	40.8	9.8	31.0	78	小 塚	87.8	38.9	48.9	56
池 原	21.1	0	21.1	100	池 辺	96.7	15.8	80.8	84
瓜 作	176.4	6.2	170.2	97	宮 園	44.4	9.7	34.6	78
入 佐	25.7	0	25.7	100	石 井	57.2	10.2	46.7	82
宮 平	48.6	4.5	44.1	92	楠 野	66.4	3.3	63.1	75
田 代	121.7	39.9	81.8	67	戸 上	213.4	61.2	152.1	71
中 畑	31.2	8.1	23.1	74	南 河 内	163.9	118.0	45.9	28
西 福 寺	130.1	15.4	114.7	88					
下 迫	8.9	0	8.9	100					
吉 野	153.9	35.6	118.3	77					
舞 次	42.7	12.4	30.3	71					
鴨 田	98.1	31.0	67.1	68					

秋村落というべき菅生台地の戸上村も213石のうち152石が畑である。總じてこれらの地域の村落は、高嶺な火山灰台地の上に集落を構え、台地上の畑を主たる生産基盤とし、一部谷すじに下りて田をつくるという形態であったとみられる。楠野村の例でいえば、その集落は現在の楠野集落である。今ここに11戸の農家があるが、正保期では石高からみて5〜6戸となろうか。この程度の戸からなる集落が約30ヘクタールの広さをもつ台地の上で、およそ5〜6町の畑を耕作していたこととなる。とすれば台地周辺になお多くの未開の可耕地をもっていたこととなるが、事實はそうではあるまい。「正保郷帳」の63石の石高を割り出した基礎となったのは、積算時点で耕作されていた畑であって、他に多くの荒畑、または休耕畑をもっていた可能性を考えておかねばならない。当時の畑がすべて整然と耕起され、常に施肥されて耕作された常畑であったとは考え難いからである。「豊後藩史料」所収の「検見事奥書」によれば当時の岡藩内の田畑は、きわめて不安定な状況にあった。「全体当御領内は山国故、秋に至り霜害等之災難多く、これによって田畑秋毛上検見勝手次第事なり」という状況であった。「御覽帳期注」には「開畑向後仕候ハバ 孝反ニ付大豆鉾宛上納可仕候」としながら、その後は「是又迄年切ニ開替可申も勝手次第の事」としている。藩は畑の永年耕作を必ずしも義務づけていなかったふしがある。

文化八年(1811)におこった有名な岡藩一揆はじめ江戸時代の一揆の多くが、菅生四原に端を発した事でもわかるように、この地の作柄の不安定さは岡藩の大きな悩みとなっていたのである。

この菅生周辺の畑地について、後藤重巳氏は、きわめて粗放的な焼畑又は近畑の類が多かったろうとしている。即ち氏は、岡藩内の江戸期の開畑・開田の実態を分析し、全体として水田の開田はきわめて微々たる面積しか行われず、又面積の増減もきわめて少ないのになお、畑は前年比70%とか100%とかいうような開畑例が多く、かつ年ごとの畑地面積の変動も大きいことを指摘している。このことは、当時の畑には、きわめて粗放的に行われる焼畑、近畑の類が多く、その故に、これを維持する段階でも、田とは違い容易に放棄される場合の多かったことを示している。

開拓しやすく、かつ放棄されやすい畑、そのような畑が、菅生四原では多くを占めていたとみられるのである。このような畑でどのような経営が行われたかを考える直接的史料はない。ただ菅生四原に近い直入郡城後村等の村明細帳は、直入郡下の近世村落の実態を知るうえで興味深い。この城後村は延享3年(1746)の明細帳によれば、石高188石余、反別にして22町余の村である。このうち田7町、畑15町で

第7表 応永20年(1413)
「段銭結解土代」による
直入郷の名田面積
(注)・「豊後国大野荘の
研究」より

名	反銭賦課面積 (丁)(反)(歩)
上肥田名	15.
下肥田名	6.4. 60
三宅名	3.
平田名	15.
狭田名	12. 10
柏原名	5.1. 20
泉名	22.7.260
志士智名	11.2.240
久住名	9.8.240
岩瀬名	17.5.180
同	8.8.120
白仁名	2.
埴田名	18.7
木原名	14.0.240
市用名	17.4
松木名	6.9.240
田北名	18.
田原名	7. 240
家中名	1.1.
植木名	7.3.240
坂田村	8.6.120
坂折名	3.
直毛名	(御料所)
下志士智	
計	242.8. 10 (234.0. 50)

あるから、菅生四原ほどではないにしても畑作の卓越する村であった。

この村の畑では大豆（3分）、小豆（1分）、粟（2分）、ひえ（2分）、麦（1分）が耕作されていた。豆類は上納作物であつたろうが、粟、ひえは重要な食料だったのであろう。この畑に野稻はみえない。畑作の肥料は馬こやしのみがあげられている。村人口本百姓150人、29軒、牛12頭、馬11頭の村であった。わずかな畜力、馬こやし程度の施肥、そして雑穀中心の作物、いずれにせよ、きわめて粗放的でかつ停滞的な畑作といわねばならない。このような畑作の実態は、ほぼそのまま菅生地区に導入してみてもよいであろう。とくに楠野村や甘糠村のように、ほとんど田をもたぬ村では、上記の様相はもっと端的にあらわれていたと思われる。

以上、近世の菅生四原の農村のあり方についてみてきた。当地域の近世村落は、基本的に畑作中心の村である事を確認したが、注意すべきは、大野川最上流部の火山灰合地上の、ほとんどすべてに、こうした近世村落が分布しているということである。これらの村々は少くとも近世初期にほぼ出そろい、現代にもなお地域の基本的単位として生きつづけている。

近代以降のいわゆる開拓村落のいくつかの存在と、近年すめられた畑地整備に伴う景観的な変化を除外して考えれば、農村地帯としての地域の景観は近世以後大きくは変化していないのである。

さて、中世以前の当地はどうであろうか。正保郷帳の記録する村落は、基本的に中世末期の村落をふまえているとみられるから、上記の様相を戦国期あたりに遡らせて考えても大過ないと思うが、それ以前となると史料乏しくその跡を辿ることはむづかしい。

ただ応永20年（1413）の「段銭結解土代」^{表10}は、中世の直入郷の村落を知る上で参考となる。（第2表）

ここで反銭賦課面積として計242.8町があげられている。弘安8年（1285）の園田帳^{表11}では直入郷は計270町とある。これには直入郷の他入田荘35町、朽網郷^{くきみ}40町をふくむから、直入郷は195町ほどとなる。これと対比すれば応永12年の直入郷242町は当時の荘園の全面積を示しているとみてよいだろう。そこで、このうちに記される上肥田名^{うへだ}以下の名を現地に照合すると、そのほとんどは、現在の竹田市の市街地あたりから、大野川の支流飛田川や稲葉川流域の狭い谷あいにあることがわかる^{表12}。

景観的には、狭小な谷すじの段丘上の田と、山裾の小集落という形で抽出することができるのである。おそらく中世荘園制下の直入郷の主たる生産基盤は、この大野川の支流の谷すじにあり、上流の菅生四原などの畑地帯ではなかったといえよう。しかし上記結解状には菅生四原^{へいよう}の名もみえる。すなわち柏原名22町余と葎原名（御料所）がそれである。

このうち柏原名は菅生地区から現在の萩地区の柏原に及んだとみられるから、ここに、中世の菅生四原の台地上の農村の存在をかりうじて読む事ができよう。ここにいう柏原名の22町は、台地上の畑でなく、一帯にある深い谷すじの水田をさすと考えるのが妥当と思われる。しかしながら柏原、葎原名は推定される広さと名称の特色からみて、菅生四原の一帯に住む耕作民とその耕地を、大まか

に一括してとらえ、ひとつの名としている形跡がある事に注目せねばならない。この地の村落がすべて荘園制下の収奪の体系に組み入れられたかどうかはともかく、中世の菅生四原にも「正保御帳」の村々に系譜を連ねる村落が点々とあり、その多くが台地上で畑作に励んでいた事は確かと思われる。それにしても直入郷の荘園制下の生産基盤の主力が、これら台地の村でなく、飛田川等の谷筋にあった事は確認しておかねばならない。

さて中世をさらにさかのぼって、古代の菅生地区はどうだったのであろうか、この点になると文献的にはほとんど手がかりはない。

わずかに天平9年(737)「豊後国(直入郡)正税帳」で、出挙稻の中に粟が多くあげられていることなどに、かすかにこの地の畑作の存在とその比重の大きさを伺い知るのみである。一方『日本書紀』景行紀12年条、「豊後国風土記」直入郡条等には、直入郡柏原郷の^{庄19}柳庭野の地に^{うちきる}打猿、^{やた}八田、^{くねまろ}閑摩侶の土蜘蛛が居り、天皇の行幸に反抗したとある。^{庄14}これら土蜘蛛伝承は、大和朝廷の統一過程においてこれに容易に従はなかった地域集団とその長の広汎な存在を示呼していると考えている。^{庄15}

とくに直入郷の土蜘蛛は、水田農耕を営む農耕民というイメージは異質の、いわば山の民としての印象がある。畑作を中心とする大野川上流域の文化史を考えると、一応検討しなければならない問題を、この土蜘蛛伝承は内包しているようにみえるが、それは他にゆずりたい。

以上、大野川上流域、とくに菅生地区を中心とするいわゆる菅生四原の、畑作を中心とする村落のあり方を、現代から時代を逆行する形で概観した。現状では残念ながら、中世以前は甚々不明のまゝとせねばならないが、この地の村落史を、畑作を中心に考える上で参考とすべき事は少くないと思う。注意すべき問題点は多岐にわたるが、当面重要とみられる二三の点についてふれておきたい。

第一には、菅生四原の一帯に分布する近世村落の、その占地にあたっての基本的な条件の問題である。ここでは、一部谷筋に近い村落(鴨田村、南河内村等)の他は、占地の第一条件として「農業用水」の問題が考慮されていない。水は飲料水又は生活用水としてのみ考慮の対象となっている。むしろ生活用水の面でも致命的ハンデを負うことを、あえてふみこえてこの地域が選ばれている。とすればこれら村落の台地上への立地の第一の条件は何だったのか。それはまず、火山灰台地の広さとその開拓のしやすさ、そして森林資源の豊富さ等であろう。この条件を選択するために、水利、気候、交通等の様々なハンデが捨棄されているのである。これらの村々の畑作は、谷筋や平野部の村落のように、水田の不足を、補完するものとしての園地的畑地の耕作というレベルでは考えがたい。即ち田と表裏の形で耕作される園地的な畑ということであれば、菅生四原の大半は全く不向きであるといわねばならず、水田のための水に執着し、これをベースとする村落の立地の原理では、この地の村の占地の理由は説明しがたい。もとより菅生四原の谷筋でも水田は不可能ではなかった。事実それは(可能な所では)存在した。しかしそれは第一義的なものではなかった。この地の人々が台地上を耕地として選んだ結果は、一応の生活の安定をもたらした。しかし近

産政策の下では、その生産力の不安定さは否めず、このためこの台地への〈水〉の導入と、それにもとづく〈水田化〉の構想がとりあげられることとなる。それは閑落の落権力によってはじめて着手され、近代の土木工技術によってようやく完成されたものであった。

したがって近世初期以前の当地方の畑作が、きわめて粗放的かつ停滞的なものであった理由も自から明らかであろう。荒野を焼き払い、又は刈り払い作物を植える。水は雨水に任せ、施肥も殆どない。作物は雑穀主体であるという農業がここでは永年にわたって行われた。このような農業はそれに自足している限り、持続的な発展のデコとなるべき諸契機を欠いている。

ただそれにしても、これらの村落が、個々の台地の間を画する谷をこえて、移動するというケースは、特別な例の他はみられない。少くとも近世初期には、これは村落は郷村としての形をととのえ、その形を維持しつつ現代まで持続している。ただ楠野村の例にみるように一つの台地上で単位村落が耕作した耕地は小さいから、台地上で畑が移動した可能性は考えねばならない。集落の位置は定着し、耕地はそのまわりに設定されるが、粗放的であるが故に常に休耕地や荒地をふくみ、畑は移動する。しかしその移動の範囲は、楠野村の場合一つの台地内に限られている。耕地と集落を一体としてとらえたものを村落と呼ぶとすれば、楠野村は楠野台地をテリトリイとする一つの村落である。そのような村として、他の台地の村々と併立し現代に至っているといえる。この地域は村落個々の境界が明瞭であり、耕地と集落との関係をふくむ村落史を考えやすい点で、類のない恵まれた条件をもっている。

第二には、上記に指摘した〈畑作〉農耕の村落群の周辺又は下流部の水田主体の村落群との関係の問題がある。前述したように、中世直入郷の荘園は菅生四原ではなく、やゝ下流の大野川支流の谷筋に分布する。近世以後、これらの名田は郷村として発展し、直入郡の〈水田地帯〉として維持されている。これらの地域と菅生四原の関係はどうかという問題である。これはすべて今後の調査に待たねばならないが、状況としては注意すべきいくつかの点がある。そのひとつは、菅生四原の村々にも（可能なところでは）水田を耕作しており、上記の水田地帯から畑地帯へは、地形の変化に順って暫時的に変化して行くということである。柏原の舞次・鴨田・菅生の南河内等の村々がその中間に位置する。双方は互いに何らかの交通流通関係を維持しつつ、又中には系譜的に祖を同じくするものもあるかも知れない。現状では両者は、民俗学の分野等で指摘されるような山（畑）、里（田）¹⁸の文化の存在として、その発祥期にさかのぼって対立的に考えるのは躊躇する。それで両者を一つの農耕文化の基盤の上で考えるとすれば、当然、谷の水田農耕主体の村からの、台地の畑作への進出という図式を描くことができることとなる。しかしその見方だけで、弥生時代後期以来（その間の一時的断絶の有無は別として）、各時代に検証しうる菅生四原の〈畑作〉文化の基盤を説明しうるかという問題は残る。問題の視点としては平野、谷から台地上をみるのですべてなく、台地から周辺を見るという方法が、有効でありかつ必要であろうと思う。

最後にこれまでに見た中、近世以降の当地域の畑作とこれを基盤とする村落のあり方と、弥生時代集落跡の問題との関連性であるが今これについて言えることはまことに少ない。特に中世・古代

の史料的空白は如何ともしがたいが、近世村落と弥生集落が、少くとも時間の空白を越えて、ほぼ同じ条件下で立地していることは指摘しておかねばならない。

例えば楠野台地の古墳時代村落の立地にあたっては、近世の楠野村と同じく、〈水〉は生活用水としてしか考慮されておらず、この集落に〈農耕〉を想定するとすれば、それが第一に台地上の畑作をめざしたものであることは明らかである。その農耕の実態は、当然近世の楠野村のそれを越えるものでなく、これよりさらに粗放的かつ原始的であつたろう。近世の楠野村は、少くとも集落は定住化し、耕地とともに父祖伝来のものとして代々受けつがれているが、この時代はそれすらも果されていたかどうか疑わしい。楠野台地の領域をこえての移動も考えておくべきであろう。このような村落を厳密な意味で農業(村)共同体と呼べるかどうか判断に苦しむ所である。少くとも上記のような村落のあり方は、結果としては一般に考えられている弥生時代の稲作文化のイメージからはずい分と違い感じは否めない。

もし、このような大野川上流域の弥生文化もまた、稲作を中心とする弥生文化の技術と慣行の範疇で、その一ケースとしてとらえられるとすれば、弥生時代に渡来した稲作文化は、想像以上の多面性を本来的のもっていたと考えねばならない。一方、こうした畑作中心とみられる集落群の存在を、弥生時代の稲作文化の体系の外にある、何らかの文化的伝統の問題として考えれば、当然のようというところの縄文時代農耕論とかかわりにふれねばならない。いずれにせよ、こうした問題の検討にあたっては、現代にまでつながる当地の〈畑作〉村落の、村落としての歴史の初現期の問題として考えることが必要であろうと思う。(後藤宗俊)

注1 竹田市菅生、荻町恵良原、岡津原、岡柏原の四原をさす。

注2 荻町土地改良区・大分県農政部編 1981『荻町土地改良区史』
兼子俊一「大野川の水利」 1979『大野川』大分大学教育学部

注3 前掲2参照

注4 『豊後国郷領』(下) (『大分県地方史料叢書』二)

注5、6 後藤重己「近世における開畑の性格—岡藩末期御物成帳の分析数値を中心にして」(『史学論叢』6号・昭和48年)

注7 豊田寛三・後藤重己『大分の歴史』(6) 農民と一揆 1978 大分合同新聞社

注8 前掲5、6論文参照。同論文によれば、例えば葦原地区の場合、本田積14町8反余に対し、開田積は1反余、率にして0.086%。これに対し畑は、519町余の本畑に対し開畑243町余と約50%近い開畑が行われている。岡藩領全体でいえば本畑5350町に対し開畑2140町としている。これと逆に前年比で-50%と落ちこむ例もみられる。

注9 『豊後国直入郡城後村銘細帳(写)』(『豊後国村明細帳』大分県地方史料叢書1)所収

注10 豊後国直入郡直入郷政経結解状 (大友史料9)

注11 『弘安図田帳』には直入郡条に荏・入田荏・朽郷郷がみえるが直入郷はみえず、図田帳に誤記があるとされている。直入郷は入田、朽郷をのぞくほぼ全郷に及んだとみられる。

注12 結解状にみえる名田名のうち、肥田(飛田)、拜田原(拝田)、市用(市用)、板折(板折)、坂

田（坂田）、平田（平田）、木原（城原）、志土智（志土知）、狭田（狭田）、泉（泉）、植木（植木）、岩瀬（岩瀬）、白仁田（白仁田）、松本（松本）、等は今なおほぼ現地に地名を残し、近世御村としても引きつがれている。いずれも大野川支流の狭長な段丘上を水田化し山を背にして、集落を構える形を示す。典型的な中世村落の形跡は、現地で今も実見することができる。

注13 『寧楽遺文』（上） 1962 参照

注14 『日本書紀』景行紀12年 月条、『豊後國風土記』直入郡条及び遠見郡条参照。

注15 後藤宗俊『大和國家の成立と二體の在地首長』（『大分県史—古代1』昭和57年）

注16 柏原の中山村は、嘉永2年（1849）岩戸橋開通に伴う交通条件の変化のため、村あげて隣接の台地上の高練木地区の日向石に移った。（角川版『日本地名大辞典』中山村の項参照）

注17 木村 礎『日本村落史の研究』 1978

注18 坪井洋文『稻を選んだ日本人』 1983

Ⅶ 縄文式土器

1 縄文早期 (K J I 区)

当地は方形周溝墓群から約 400 m 西の地点で楠野台地を刻む小支谷に面する。この小支谷には湧水が存在する。以下に紹介する遺物 (第73図) は、すべて工事中に周辺より表採されたもので押型文土器が主体を占める。かつては良好な包含層が存在したと思われる。

1～25は押型文土器で、そのうち1～20、25は山形文である。1～8は口縁部であるが、いずれも口縁直し、外面口縁下に無文部がみられる。外面は無文部以下に横走の小型山形文が施文され、内面には原体条痕と横走山形文がみられる。口縁端部は角ばったものと、やや尖り気味のものがある。以上のなかで、1と2および3と4はそれぞれ同一個体の破片と思われる。9～20は胴部破片で、20をのぞき小型山形文が横走施文されたものである。20は粗大な山形文が斜走施文されている。25は尖底の底部で、底部ぎりぎりまで小型の横走山形文が施されている。

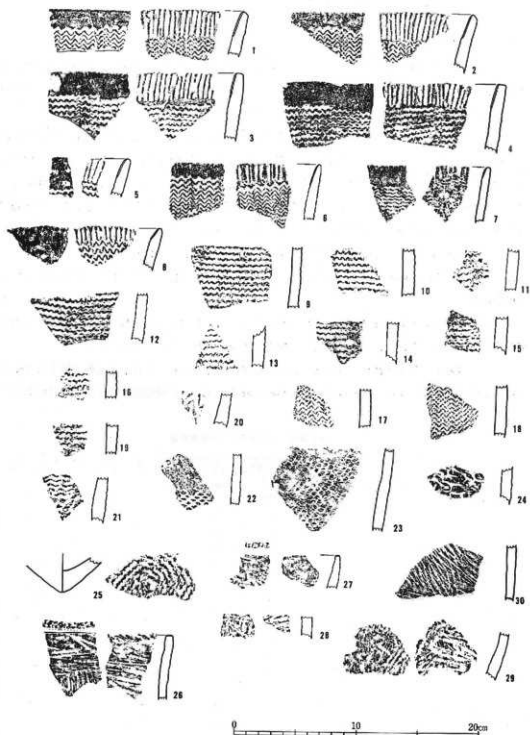
21は山形文と楕円文の両方が施文されているもので、楕円文ののち山形文が施文されているものと思われる。

22～24は楕円文である。22は一部無文部を残し小型楕円文が横走施文されている。23は小型楕円文が部分的にナデ消されている。24は粗大な楕円文が施文されたものである。

26～29は内外条痕が施された一群である。26は口縁部破片で、外面口縁下 3 cm 程は横または斜方向に、それ以下は縦方向にそれぞれ浅い条痕がみられる。また、口縁端部面には浅い刻目がある。

第8表 楠野道跡K J・I 地区出土土器観察表

調査 番号	出土 位置	器 種	文 様	形 態	破 片	注 記	調査 番号	出土 位置	器 種	文 様	形 態	破 片	注 記
1	楠野道跡 1区	高台	口縁下短走 面下横走の山形文	横走の山形文	△	△	16	高台	高台	横走の山形文	ていねいなナデ	△	△
2	高台	高台	"	"	○	○	17	高台	高台	"	"	△	△
3	高台	高台	"	"	○	○	18	高台	高台	"	"	△	△
4	高台	高台	"	"	△	△	19	高台	高台	"	"	△	○
5	高台	高台	"	"	△	○	20	高台	高台	粗大な山形文	ナデ	△	○
6	高台	高台	"	"	△	○	21	高台	高台	横走の山形文と山形文	"	○	○
7	高台	高台	"	"	△	○	22	高台	高台	横走の楕円文	"	△	○
8	高台	高台	口縁下短走	"	○	○	23	高台	高台	"	新設工員によるナデ	△	○
9	高台	高台	横走の山形文	横走の山形文は ていねいなナデ	△	△	24	高台	高台	横走の楕円文	ナデ	△	△
10	高台	高台	"	ていねいなナデ	△	○	25	高台	高台	横走の山形文	"	○	△
11	高台	高台	"	"	△	○	26	高台	高台	条痕	条痕	△	○
12	高台	高台	"	"	△	○	27	高台	高台	"	ナデ	△	△
13	高台	高台	"	ナデ	△	○	28	高台	高台	条痕	条痕	△	△
14	高台	高台	"	ていねいなナデ	○	○	29	高台	高台	条痕	"	△	△
15	高台	高台	"	"	△	△	30	高台	高台	横走の山形文	"	△	○



第73图 楠野遺跡K J I地区出土土器実測図

以上の条痕文土器は羣A式と呼ばれる一群と思われる。30は条痕あるいは縞糸と思われるものがみられる。

その他図示しなかったが無文土器も出土している。しかしその量は押型文土器の半数程である。

2 縄文晩期 (K J II区)

縄文晩期包含層は、方形周溝墓群北側のK J II-a区、K J II-b区で確認された。とくにK J II-a区では径数m程の遺物集中がみられ良好な状況であった。しかし、諸般の事情から十分な調査ができず、両区の遺物出土地点ごとの一括資料というかたちでとりあげた。そのため出土遺物の厳密な意味でのセット関係の把握、および遺溝の確認などは不十分である。

このほか晩期の遺物は方形周溝墓の溝内や住居跡内などからも出土しており、当地に広く晩期包含層が存在したと思われる。

以下K J II-a、K J II-b各区より出土したものと、周溝墓周辺などより出土したものをあわせてその概要を述べる。(第74図～第81図)

深鉢

深A 外湾あるいは内傾気味に伸びる頸部から沈線の施された口縁部が立ち上るものでこれからの派生形態を含む。

深A1 (K J II-a区 32～34、K J II-b区 95～99、表採167)

頸部から口縁部がほぼ垂直に立ち上るもので、口縁部外面に2、3条のしっかりした沈線が整然と施される。また、口縁内面の立ち上り部にわずかな段がつくものがある。この段は深A1に多くみられる傾向にある。

深A2 (K J II-a区 31、35～43、K J II-b区 100～107、109、表採169、171)

口縁部の立ち上りが鈍くなり外反気味になる。とくに口縁部内面の立ち上りが深A1に比べ不明瞭になり、頸部からゆるやかな線がつづく。また口縁外面の沈線も数が増し、多いもので6～7条に達し沈線自体もやや雑になってくる。この沈線の増加に比例し口縁部の幅が広がる。

深A3 (K J II-a区 44～48、K J II-b区 108、110～112、表採170)

口縁部の立ち上りが消え、くの字状に強く折れた頸部からいきなり口縁にいたる。口縁外面には口縁立ち上りの痕跡として段がつくが、さらに退化して段がみられなくなる場合もある。口縁外面の沈線は細くかつ雑になり多條化する。胴部は強くくの字状に張り、底部から屈折部までと、屈折部から口縁までの高さがほぼ等しくなり、頸部以上の占める割合が全体の $\frac{1}{4}$ かくなる。

深B 深Aと同様な器形を呈するもので、口縁外面の沈線がなく無文のものである。

深B1 (表採172)

口縁部が頸部からほぼ垂直に立ち上るもの。

深B2 (K J II-b区 116～118、120、表採168)

口縁部の立ち上りが鈍くなり、外方に開き気味になる。

深B3 (K J II-a区 55)

口縁部の立ち上りがなくなり、くの字状に折れた頸部から発達した口縁帯が開く。

深C (K J II-a区 94)

波状口縁を呈する口縁部は肥厚気味で、頸部からくの字状に開く。胴部はゆるやかにふくらみ底部につづく。このうち口縁部の開く感じは深B3などに類似する。しかし、全体の器高のなかで頸部以上の占める割合が小さいのと、胴部が中程で強くくの字状に張らない点が大きく異なる。

深D (K J II-a区 52、53、K J II-b区 133、表採 175、176)

口縁下に刻目のない貼りつけ突帯を施すもので、口縁に貼りつけ突起を付すものもある。

深E (表採177)

口縁下に刻目をもつ突帯が施されたもの。

深F (K J II-a区 56~63、K J II-b区 119、121~131、表採173)

深鉢の口縁部で粗製のものが多く、全体の器形を知り得るものは少い。よって深B3などの口縁部を含んでいる可能性もある。器形的には直線的に開くものF1 (56~63、122~126、130、131)、内湾気味に開くものF2 (119、127~129)、内傾するものF3 (173)、胴部からくの字状に開くものF4 (121)、口縁が短く外反するものF5 (132)がある。

深鉢胴部 (K J II-a区 64~66)

いずれも胴部最大径を示す部分で、その部分に軽い沈線あるいは段を施すもの(64、65)と、施さないもの(66)がある。

浅鉢

浅A 頸部が胴部から外反気味に開き口縁部が立ち上るもので、これからの派生形態も含む。

浅A1 (K J II-a区 74、K J II-b区 136)

口縁が頸部からはほぼ垂直に立ち上るもので口縁外面に比較的しっかりした2条の沈線が施される。

浅A2 (K J II-a区 71~73、75~80、K J II-b区 134、135、138~141、143)

口縁が比較的シャープに立ち上るもので、口縁外面には1条の沈線が施される。

浅A3 (K J II-a区 81~83、85、K J II-b区 142、144、145、表採162)

口縁の立ち上りが鈍くなり、口縁外面の沈線もやや雑になる。

浅A4 (K J II-a区 86、87、K J II-b区 147、148)

口縁部の立ち上りがなくなり、頸部と一体化する。しかしこれまでの口縁部立ち上りの痕跡として口縁増部に粘土紐を意識してつけており、内外に段がみられる。

浅A5 (K J II-a区 84)

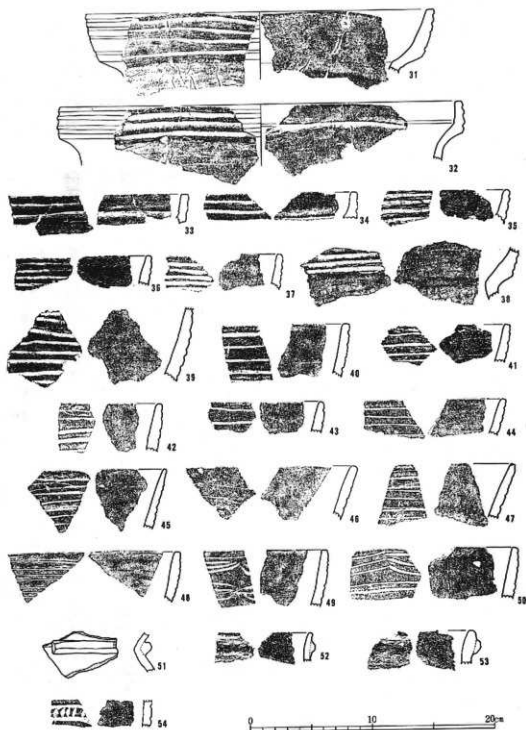
浅A4でみられた口縁部における粘土紐貼りつけの手法が消え、頸部から口縁まで完全に一体化してしまう。しかし口縁部粘土紐貼りつけの痕跡として、口縁内外に1条づつの沈線がみられる。

浅B 浅Aに比べ頸部が短い一群である。

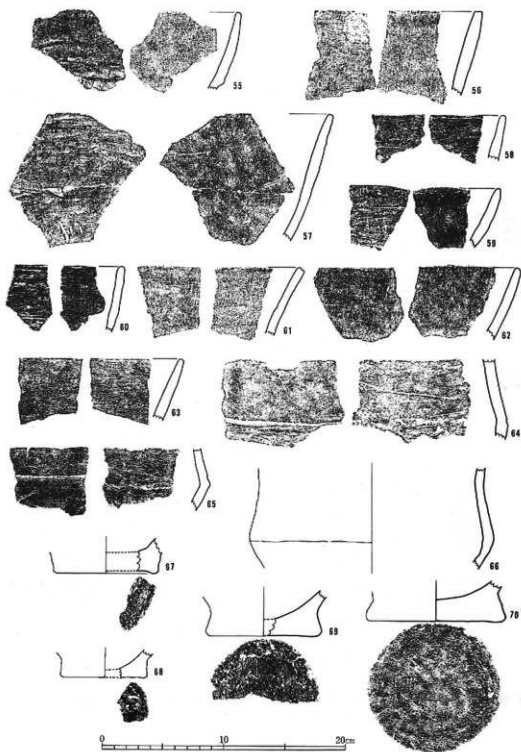
浅B1 (K J II-b区 137、表採161)

第9表 楠野遺跡KJⅡ-a地区出土土器観察表

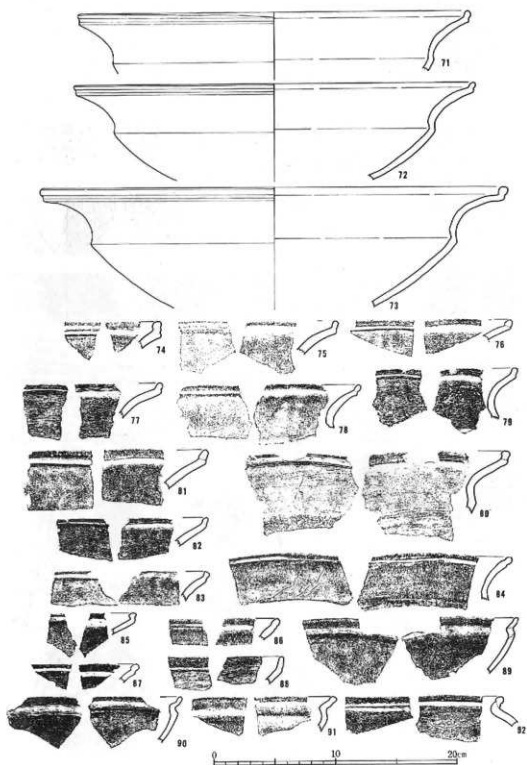
[illegible]



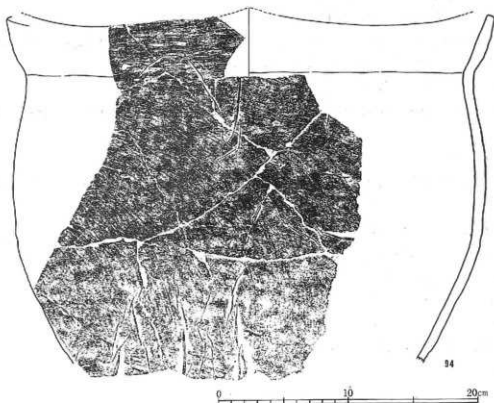
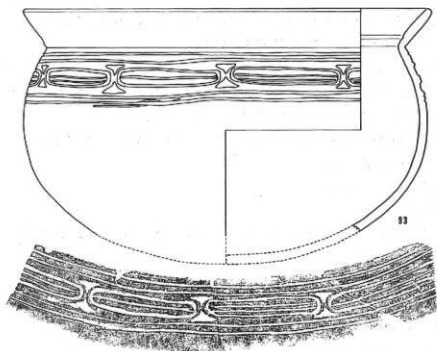
第74图 楠野遺跡K J II-a地区出土土器実測図 (1)



第75图 楠野遺跡K J II-a 地区出土土器実測図 (2)



第76图 楠野遺跡K J II-a地区出土土器実測図 (3)



第77图 楠野遗迹K J II-a地区出土土器实测图 (4)

頸部は短く外反し、口縁がほぼ垂直に立ち上る。また頸部下には沈線が1条施される。口縁部には山形隆起がみられ、その部位に刻みが施されている。

浅B2 (K J II-b区 152)

口縁部の立ち上がりが消え、口縁が頸部と一体化して開く。口縁外面には沈線、内面には段がそれぞれみられる。また、頸部下には沈線が1条施される。

浅C 口径と胴部最大径がほぼ等しいもので、胴部最大径の部分で強くくの字状に折れる。

浅C1 (K J II-b区 151)

口縁部が鈍く立ち上るもの。

浅C2 (表採 164)

口縁部の立ち上がりがみられなくなるもので、口縁内外に沈線が1条ずつ施されるのみである。

浅D (表採 163)

最大径が胴部にあり、その部分で胴部が強くくの字状に折れる。口縁部は短い頸部からやや開き気味に立ち上る。

浅E 比較的長い胴部から頸部がくびれ、短い口縁部が開く。

浅E1 (K J II-a区 89、90)

口縁部が屈折して若干立ち上る感じのものである。

浅E2 (K J II-a区 91、K J II-b区 149、150、表採 166)

口縁端部が上方に拡張するもの(150)、あるいは口縁端部内面が丸く肥厚されるもの(91、149、166)である。E1に比べ胴部から口縁までの長さが長くなる。

浅F (K J II-a区 92)

丸味をもった胴部から口縁部がくの字状に立ち上るもので、口縁内外に段あるいは沈線がみられる。

浅G (表採 165)

全体の器形は不明であるが、外面口縁下が凹線状を呈する。口縁には三角形の貼りつけ突起が施されている。

浅H (K J II-b区 146)

しまった頸部から口縁が開くもので、口縁内面端部が肥厚する。

浅I K J II-b区 153)

丸味をもつ胴部から短い口縁が立ち上るもので、胴部中程に沈線がある。

浅J (K J II-a区 88)

胴部から口縁が1cm程立ち上るもので、口縁外面下部に段がある。

鉢

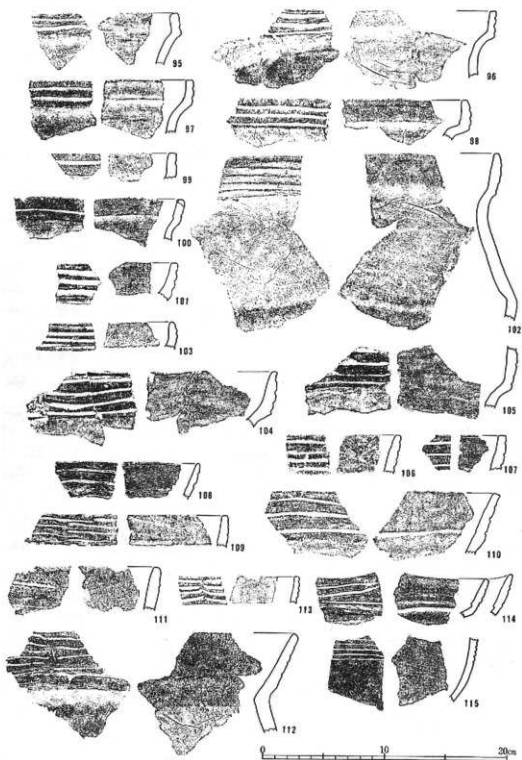
鉢A (K J II-a区 93)

球状を呈する胴部から口縁部がくの字状に開くもので、丸底を呈するものと思われる。外面口縁

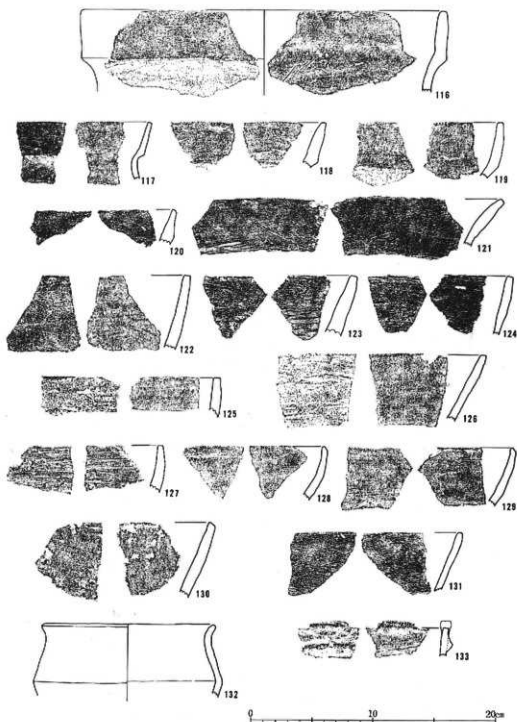
第10表 横野遺跡KJⅡ-a地区出土土器製表

() 發生 () 多數 () 中道 () 少數

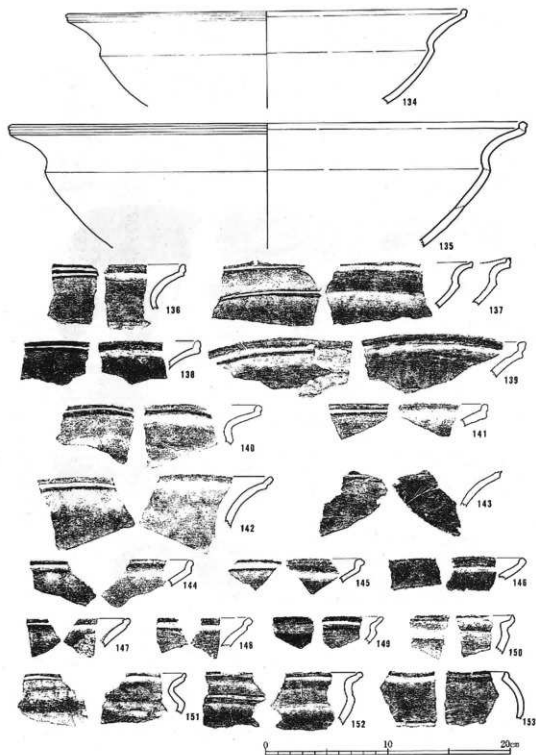
[illegible]



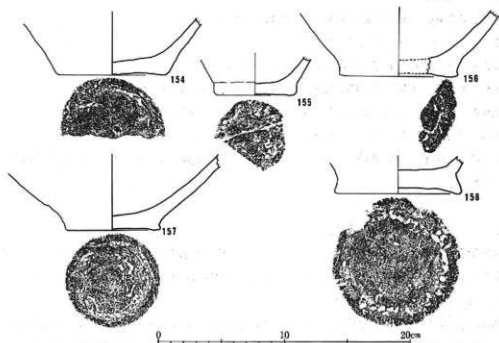
第78图 柿野遺跡KⅡ-b地区出土土器実測図 (1)



第79図 楠野遺跡K J II-b地区出土土器実測図 (2)



第80図 楠野遺跡K JⅡ—b地区出土土器実測図 (3)



第81図 楠野遺跡K J II-b地区出土土器実測図 (4)

下には沈線と三角形のくり込みを用い文様が構成されている。また口縁内面下部にも沈線が1条施されている。

鉢B (K J II-b区 114)

頸部でいったんしまり胴部へつづく器形と思われ、波状口縁を呈する。口縁外面には弧線文が施されている。

鉢C (K J II-a区 49、50、K J II-b区 113、表採178)

全体の器形は分らないが、口縁部などに遊置里系の弧線文が施されるものである。その文様によりC 1 (50、178)、C 2 (49) に分類できる。

その他の鉢 (K J II-a区 54、K J II-b区 115、表採179)

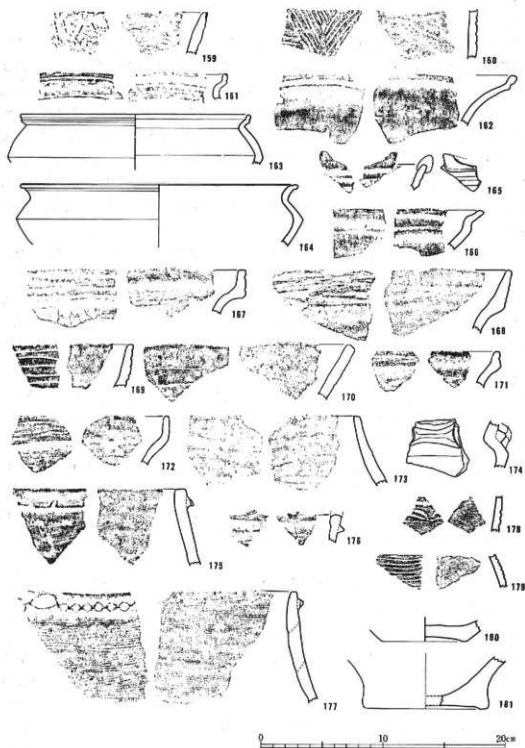
115と179は球状の器形を呈すると思われ、胴上部に鋭く細い沈線が施される。54は胴部破片で沈線と刻みが施されている。

その他 (K J II-a区 51、表採 174)

深鉢や鉢の頸部くびれ部につく貼りつけ文様で、棒状のものと(51)、螺ネクタイ状のもの(174)がある。これらがこれまで述べたどの器種につくものかは本遺跡の資料に限れば特定できない。

底部

いずれも深鉢の底部と思われる。



第82図 柿野遺跡表探その他の縄文式土器実測図

4 ま と め

早 期

まず遺跡立地についてみる。楠野台地で早期遺物が採集されたK J I区は、楠野台地を刻む小文谷に面した台地の端にあり、眼下の小支谷には湧水が存在する。押型文期のこのような遺跡立地は菅生台地、萩台地を中心とする地域ではしばしばみられ、萩町政所馬渡^{Ⅱ-3}、竹田市下菅生B^{Ⅱ-3}、西園南^{Ⅱ-3}など同様な立地条件をみせる遺跡は多い。また遺跡の規模も小規模な場合が多く、縄文晩期や弥生後期、古墳期などの遺跡が湧水を中心に台地中央まで展開するのとは対照的に台地の端に小じんまりとまとまる傾向がある。しかしこのような押型文期の遺跡のなかでも西園南遺跡のように規模的、内容的にみて同時期の遺跡群のなかでも群を抜く遺跡もある。こういった遺跡規模の違いが拠点集落やキャンプサイトなどの違いとして解釈されるのか、当地域に多く存在する押型文期遺跡群を考えるうえで興味深い。

次に土器についてみる。東九州における押型文土器編年は賀川光夫氏により、川原田式一早水台式一田村式一ヤトコロ式とされた^{Ⅱ-4}。しかし近年における調査研究から、賀川氏により「小型深鉢の尖底に小形彫刻原体をもって山・楕円・格子目を施文する」とされた早水台式が稲荷山式一早水台式一下菅生B式に細分されるにいった。稲荷山式一早水台式の流れは橋昌信氏により提唱されたものである。稲荷山式は器高が口径と同じかあるいは勝る土器で、押型文が内外面横走施文される。しかし内面の原体条痕は認められない。稲荷山式は川原田式により近い特徴をもつ。早水台式は口縁直口するもので、外面は押型文が横走施文され、内面には原体条痕と横走押型文がみられる。下菅生B式は後藤一重により設定されたもので、口縁部外反し、外面押型文の施文が縦走になる点を特徴とする。また内面には原体条痕と横走押型文が施される。下菅生B式は早水台式までにみられた横走施文という基本原理が変換するという事で押型文土器変遷の一つの面図とみなすことができる。本遺跡より出土した土器は外面に小形の横走山形文が、内面に原体条痕と横走山形文が各々施文されるもので、口縁直口、尖底をなす。また外面口縁下には無文部がみられる。これらの特徴をもつ一群は新たに細分された早水台式に位置づけられるものである。

晩 期

1、ここでは前項の分類に従い現状における出土土器の一応の位置づけを行いたい。

土器の検討に入る前に、まず現在にいたるまでの晩期土器編年についておおまかに概観する。本遺跡の所在する東九州の晩期編年は賀川光夫氏により大綱が組み立てられ、現状における編年作業の根幹となっている。しかし近年における晩期遺跡調査例の増加から好資料が蓄積され、部分的ではあるがより細かな議論が可能となった。このような状況下で高橋徹氏は近年の成果をふまえ、東九州における土器型式の流れを大石式一浦久保式一上菅生B式一下黒野式とした。高橋氏のいう大石式、浦久保式は賀川氏のいう大石式あるいは晩期I式とされたものの細分で、賀川氏が詳細の不明確なかたちで使用してきた晩Ia、晩Ibに大筋として相当するものと思われる。また上菅生B式を特徴づけるものとされた刻目のない実帯文土器は、すでに賀川氏により田村上層式として紹介

の時期に位置づけられる。底Aは御領式にみられるもので、その形態が当期まで残る。以上Ⅰ期は御領式に直統する時期で、その器形、文様などにその影響が認められる。

Ⅱ期 深鉢は深A2、深B2などでⅠ期に比べ口縁内面の立ち上りにシャープさを欠くようになり、外開き気味になる。深A2では口縁外面の沈線が増し、沈線自体もやや雑になる。浅鉢は口縁直立し外面に1条しっかりした沈線が施される浅A2がみられる。深A2では、口縁帯があまり発達せず外面の沈線が3～4条と少いものと、口縁帯が発達し沈線も6～7条と多条化するものがある。次のⅢ期の深鉢である深A3とのつながりを考えた場合、前者から後者へという流れが考えられる。しかし浅鉢をみた場合、口縁部の立ち上りや沈線の感じに若干の違いがあるものの時期的な違いとして分離することは難しい。以上のようにⅡ期は深鉢、浅鉢の明確なセットとして分離できないものの、深A2などには内容的に若干のパラエティーがある。この時期の遺物を出土する遺跡として、高橋徹氏により浦久保式とされた大分県荻町浦久保遺跡^{Ⅱ15}がある。ここでは深A2、浅A2などととも滋賀里系の文様をもつ鉢が出土している。これは滋賀里Ⅱ式^{Ⅱ16}に相当するものと思われ、本遺跡で鉢C2とした文様に類似する。これらから近畿地方との併行関係が漠然とではあるが推定できる。また山崎、島津両氏により浦久保式の併行型式とされた阿蘇山西麓域の古閑式^{Ⅱ17}をみewithみると、高橋徹氏も指摘しているように本遺跡のⅡ期、Ⅲ期のものが含まれていることが分る。よって古閑式とされたものは2期に分離できるものと思われる。古閑遺跡からも滋賀里系文様をもつ鉢などが出土しているが、これらも古閑遺跡の主体を占めるⅡ期、Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。またⅣ期に位置づけられる鹿児島県黒川洞穴、長崎県宮の本遺跡^{Ⅱ18}などでは滋賀里系文様をもつものが認められないところから、本遺跡で鉢A、B、Cとした滋賀里系文様などをもつ有文土器の下限はⅢ期と思われる。

Ⅲ期 深鉢は深A3、深B3などにみられるようにⅠ期以来続いてきた口縁の立ち上りがなくなり、頸部で強くくの字状に折れそのまま開く。外面には口縁帯の痕跡として口縁下に段が残るが、さらに退化してその段が消えるものもある。深A3には口縁外面に細くかつ雑になった沈線がみられる。深A2と深A3では、頸部のない口縁部破片だけからはそれらを明確に区別し難い面もあるが、外面の沈線によりおおよその区別がされる。深鉢外面の沈線はこの期を最後にⅣ期以降みられない。これら深鉢の器形的特徴として、胴部最大径部分の強くくの字状に張った部分を境として口縁までと底部までの高さの比がほぼ等しく頸部以上の占める割合が全体の1/4ちかくなる。また深Cも口縁の開く感じなどから当期に位置づけられると思われる。鉢Aはこの深Cと重なるようにKJⅡ-a区から出土したが、両者とも火破片であることから不十分な調査ではあるが共伴としてとらえられる可能性が高い。浅鉢は口縁の立ち上りが鈍くなる鉢A3が主体を占め、口縁外面の沈線も雑になる。大分県竹田市石井入口遺跡^{Ⅲ19}堅穴遺構の資料は少数ではあるがほぼ当期の一括資料としてとらえられる。これには深A3、深B3、浅A2、浅A3などがみられ、熊本県益城町古閑遺跡でみられる深鉢や鉢の頸部につく縞ネクタイ状などの貼りつけ文様はみられない。この頸部の貼りつけ文様は次のⅣ期の深鉢などにつく場合が多いがその出現はⅢ期に遡るものと思われ

る。しかし深鉢につく場合、Ⅲ期では深A3、深B3などの口縁下の段が消滅した新しい傾向のものにつくものと思われる。このようにみると当期も内容的に若干の差が想定され、Ⅳ期とあわせて将来的に検討の余地がある。深鉢の底部は底Dとした円盤はりつけ状のものが出現するが、底Cなどと混在する状況で、底Dが盛行するのは次のⅣ期である。

Ⅳ期 当期は高橋徹氏により上菅生B式とされた時期にあたり、ここでもっとも注目されるのは深Dとした刻目のない突帯文土器の出現である。これは後期以来続く深鉢の流れとは異なる要素で、晩期後半期に盛行する刻目突帯文土器の先駆をなすものである。Ⅳ期になると深鉢は、Ⅲ期でみられた深A3、深B3の器形の胸部屈折部が上方に移行してくる。頸部には蝶ネクタイ状などの貼りつけ文様がつく。この深鉢はさらに胸部屈折部が上方に移り、頸部のくびれ部がシャープでなくなり外反気味にくびれながら口縁に続く感じになる。これにともない頸部の貼りつけ文様も消滅する傾向に向うものと思われる。深鉢は当期においても以上のような形態変化をとげるものと推定されるが、これらの器形は本遺跡では確認されていない。浅鉢は浅A4、浅A5、浅Fなどがみられる。浅A系統の浅鉢は口縁部の立ち上りが認められないものが主体を占め、形式的には浅A4から浅A5への移行が考えられる。また浅Fは黒川式に特徴的な器形である。口縁部には浅Gなどにみられるリボン状などの貼りつけ突起が認められる場合がある。口縁部の貼りつけ突起は深鉢などにもみられ、この時期に顕著な特徴とされる。次に深Dとした刻目のない突帯についてみてみると、その分布は東九州などに集中する傾向にあり、西北九州などではほとんどみられない。東九州などでは当期を中心とする遺物と混在して出土する例が多く、深Dの出現時期は刻目突帯文よりも遡る当期に位置づけられるものと思う。しかしその出現メカニズムは現状において定かではなく、また深鉢でみられたように当期内でも若干の時期幅が考えられるが、それと深D出現との関連も現状においては遑断しかねる。

V期 刻目突帯文の時期である。本遺跡では表探資料1点のみでセット関係などは不明である。

以上Ⅰ～Ⅴ期にわたり分類したが、遺物の出土量から本遺跡の主体はⅡ、Ⅲ期に位置づけられる。

2、次に器種による土器組成をみてる。ここではKJⅡ-a、KJⅡ-b両区出土遺物の口縁部により分類を試み、おおまかに晩期前半代の傾向としてとらえてみた(第13表)。

器種は大きく深鉢と浅鉢に分けたが、その比はほぼ1:1である。深鉢のなかでは、口縁部に沁線を施す深Aと深Fなどが各々半数近くを占め、刻目のない突帯を施す深Dに少い。浅鉢は浅A系統のものが圧倒的に多くみられる。また、鉢A・B・Cなどとした澁質里系文様を施すものは2.5%と少量である。

本地域においてこの時期の土器組成比率を明らかにした遺跡はほとんどない。しかし、今後それを明らかにすることにより、その時代性、地域性がより明確になるものと思われる。(後藤一重)

第13表 柿野遺跡KJⅡ-a、KJⅡ-b区土器組成表

		KJⅡ-a		KJⅡ-b		計	
深鉢	深 A	25	19.8	19	24.6	44	21.7
	深 D	3	2.4	1	1.3	4	2.0
	その他	28	22.2	27	35.1	55	27.1
浅鉢		67	53.2	28	36.4	95	46.7
滋賀里系文様をもつもの		3	2.4	2	2.6	5	2.5
計		126	100%	77	100%	203	100%

注 1. 坂本嘉弘「政所遺跡」『萩合地の遺跡Ⅱ』1977 萩町教育委員会

賀川光夫「政所遺跡」1982 別府大学付属博物館

注 2. 後藤一重「下菅生B遺跡」『菅生台地と周辺の遺跡Ⅳ』1981 竹田市教育委員会

注 3. 田代健二「西園南遺跡」『菅生台地と周辺の遺跡Ⅴ』1983 竹田市教育委員会

注 4. 賀川光夫「縄文文化の発展と地域性—九州東南部—」『日本の考古学Ⅱ』1965 河出書房新社

注 5. 4に同じ

注 6. 橋 昌信「二日市洞穴の調査」1977 九重町教育委員会

注 7. 2に同じ

高橋 徹「寺ノ前遺跡」『萩合地の遺跡Ⅵ』1981 萩町教育委員会

注 8. 4に同じ

賀川光夫「晩期の様相と研究史—九州—」『新版考古学講座3』1969 雄山閣

注 9. 高橋 徹「大分県考古学の諸問題—刻目突帯文土器とその展開について—」『大分県地方史98』1980 大分県地方史研究会

注 10. 賀川光夫他「縄文晩期農耕の起源に関する研究（大分県萩町板山遺跡、恵良原遺跡、横迫遺跡）」

『別府大学考古学研究報告2』1971 別府大学

賀川光夫他「小高野遺跡調査報告」『別府大学考古学研究報告4』1974 別府大学

注 11. 4に同じ

注 12. 高橋信武・安藤英治「大分県宮地前遺跡の探索資料—大分の晩期前半を中心にした土器編年—」『赤レンガ2』1983

注 13. 山崎純男・島津義昭「晩期の土器 九州の土器」『縄文文化の研究4』1981 雄山閣

注 14. 8に同じ

注 15. 坂本嘉弘「浦久保遺跡」『萩合地の遺跡Ⅳ』1979 萩町教育委員会

注 16. 加藤 進・丹羽裕一他「滋賀里遺跡」『湖西線関係遺跡調査報告書』1973

家根祥多「晩期の土器 近畿地方の土器」『縄文文化の研究4』1981 雄山閣

注 17. 13に同じ

別府大学考古学研究室「古閑遺跡」『古保山・古閑・天城』熊本県文化財調査報告47集 1980 熊本県教育委員会

注 18. 12に同じ

注 19. 河川貞徳「黒川洞窟発掘報告」『鹿児島県考古学会紀要2』1952 他

注 20. 後藤 直「宮の本遺跡」1980 佐世保市教育委員会

注 21. 玉永光洋・後藤一重「石井入口遺跡」『菅生台地と周辺の遺跡Ⅵ』1981 竹田市教育委員会

VIII 先土器時代・縄文時代の石器

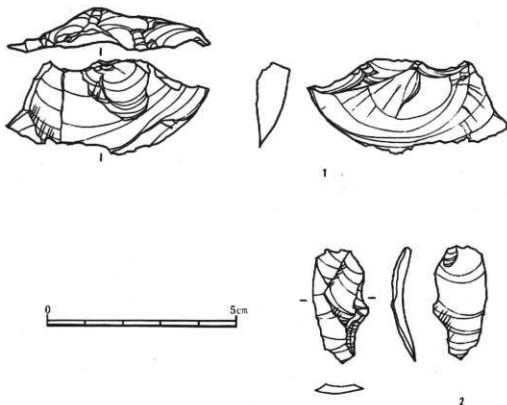
楠野台地における先土器・縄文時代の遺跡は5ヶ所確認されている。ここでは、それぞれの遺跡より検出、採集された石器についてふれ、若干の考察をくわえたい。

1. KJ I 地区

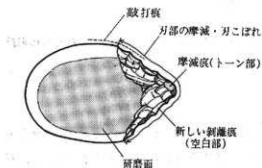
先土器時代と縄文早期の遺物が採集されている。

先土器時代の資料は2点の剥片である。1は流紋岩製の横長剥片である。打面部にはやや荒い調整剥離が施され、正面より見て山形に整形されている。剥片剥離は打角110°で行なわれている。石核素材の底面は、先行する剥片剥離面により中央部を失い両端に残るが、その要素は観察困難である。剥片の主要剥離面は左側が階段状剥離に終わり、右側が開放している。

2は、流紋岩製の小形の縦長剥片である。打面が不明瞭であり、背面の先行する剥離面の状況から、石核に関わる調整剥片と考えられる。



第83図 楠野遺跡KJ I地区の石器 (1/1)



第84図 石器図面記号の意味

晩期に明確な共存関係を持つとして考えてよい。

石器群は大きく礫石器と剥片石器に分けて説明する。なお、打製石斧の多くは板状の剥片を素材としているが、本稿では礫石器に含めてあつかうことにする。

石斧・剥片石器の調整、使用痕については、第84図の様に記号化して示した。

A、石 斧

打製石斧（破片を含む）28点と磨製石斧2点が出土している。以下ではそれらの資料的要素である三つの点、石材（素材）・形態・使用痕について観察する。

a、石 材（素材）

打製石斧の石材は肉眼観察によって8種類に区分した。^{註1} 堆積岩、火成岩、変成岩を含むが、何れも遺跡の周囲20km以内に産出するものである。しかし、大きく傾山山系に産出し、神原川、奥興川流域に分布する石英琺瑯岩、緑色凝灰岩、ホルンフェルスと、阿蘇山系の（輝石）安山岩、凝灰岩とに二分することができる。本遺跡では前者の比重が大きく、6割を越えている。また、安山岩は阿蘇の古期噴出物であり、凝灰岩としたものはAso-4の溶結部であり、それぞれ植野台地を含む本地域の基盤を形成するもので、遺跡周辺の台地崖面で入手可能な石材である。

次に、こうした石材の素材としての形態を見ていきたい。

まず、傾山系とした石材であるが、17点中13点に背面に自然面を認めることができる。自然面は滑らかで大きな円弧面のそれで、河床礫と推定できる。主要剥離面の観察可能な16点で見ると12点が横長と大多数を占め、残りの4点も不定形の縦長である。また主要剥離面には階段状剥離を見るものも多い。2次調整で観察できないが、打面設定、調整などをへた、目的剥片の剥出は行なわれていないと推定できる。つまり、やや大きめの河原円礫に対し任意の面より、調整加工を施さず、直接剥片を作出したと考えられる。

阿蘇系の石材のうち安山岩については背面に自然面を持ち、横長の剥片素材である点から、傾山系の石材と同様の素材作出を考えたい。安山岩、凝灰岩は、背面・主要剥離面が不明瞭な板状素材である。自然の磨滅痕などが観察できないところから、崖面に露出する岩盤から直接に採取した

2. KJII-a・b地区出土の石器

方形周溝墓とその北西側一帯で多くの石器、剥片が出土、採集されている。明らかな共存関係を持つものはないが、その多くは、すでに報告されている縄文晩期前半の土器群に伴うものと考えられる。ただし、一部に形態・石材・風化度などの要素から、より古期のものを含んでいると考えられる。

なお、KJI-a地区の「縄文集中包含層」からも石斧類が5点出土している。これは縄文

と考えられる。また、1点であるが、緑色片岩が利用されている。石質などから朝地付近で見られる温厚変成岩のものと考えられる。

さて、採取された素材の形状であるが、横長の割片が多いために全体に中央に厚く、両端に薄い。大きさは最大で約 20×10 cm、最小で約 11×6 cmである。ばらつきが大きい長さが $12 \sim 15$ cm、巾 $6 \sim 8$ cmに集中するようである。しかし、欠損品が多く素材の形状を推定しうるものが少ない。厚さを見ると不明確ながら次の3群に分かれる。A群・ $0.8 \sim 1.6$ cmで大多数を占める。B群・ $1.7 \sim 2.2$ cmで6点ある。C群・ 2.5 cm以上で2点ある。A群には金石材が見られ、平面形でも中心をなすものに合致する。B—C群は主に石英珪岩が占めている。

磨製石斧は2点出土したが、何れも蛇紋岩を石材としている。この石材は秩父古生層中に脈状に存在しており、大野川流域では次の4ヶ所の産出地が知られている。1.奥嶽川上流、2.七瀬川流域、3.三重町、4.佐賀岡町である。この中で本遺跡に最も近距離は、1.奥嶽川上流である。原石の形状は先の尖る棒状のものであり、多くは長さ 30 cm以下で、産出地によって形状に若干の差があるという。原石素材は極めて硬く、加工は困難であるが、原石の形態が大きな加工を経ずとも利用できることから、現在の石斧の形態が原石のそれを反映している可能性は高い。本遺跡の2点共に復原長は 13 cm以下であり、今後原産地や原石素材の調査が進めば、その判断の目安になると考えられる。

b、形態

採取された素材は、入念な2次調整が施され石斧として完成する。この2次調整が少ない程、石器製作作業を短時期にし、また、素材の大きさを損うことなくその有効な利用が可能である。また逆に素材採取の段階で、素材の形態から、利用できる範囲は定められてしまう。本遺跡出土の打製石斧は2次調整が少ないものが多いが、素材の形態上のばらつきが多く予想され、石斧としての形態分類に注意が必要と考えられる。本遺跡の例では比較的な入念な側面加工から分類する。

打製石斧は、欠損品が多く困難であるが、3群に分けられよう。大形で挽形の形態を持つもの(Ⅵ5)。中形で両側面は平行するもの(Ⅵ2・3・8~11)や、その一部に挽形を含む(1・13)。小形で両側面が平行するもの(6・7・12・14~16)。石斧の刃部は未調整のものも多く、先丸あるいは隅丸方形を呈する。刃部が主軸に対して斜行するものは、素材割片の形状をなお残しているものである。なお、一辺にのみ2次調整を施す例、あるいは、一辺にのみ刃部として利用された痕跡を認めるものがある(20~23・4)。これについては形態上の不統一から同じ石器とは認め難いが、類例を待って再検討したい。

なお本遺跡では、石斧類の2次加工に伴う破片は極くわずかし、得られていない。石材についてもふれたように、多くの場合、2次加工に至るまでの工程は、原産地で行なわれたと考えられる。

c、使用痕

欠損や使用痕については石器の機能を追求するのはもとより、遺跡の性格を知る上でも欠かすこ

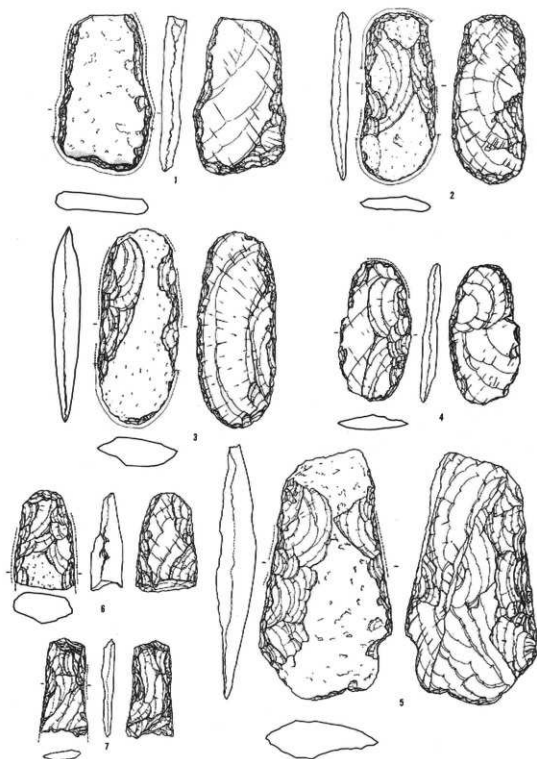
第14表 橋野遺跡石斧(型、打痕)・磨石類表(第85~87図)

番 号	出土地点	計測値(α, β)	素材の高度	磨盤の長さ	磨盤の幅	磨盤の厚	磨盤の形状	磨盤の用途	欠損
1	6号周溝内	12.4	7.4	1.6	235	—	磨石	磨石	—
2	周溝跡の北側	13.3	5.9	1.4	137	—	磨石	磨石	—
3	KJⅡ-b区表	15.5	6.3	2.2	235	—	磨石	磨石	—
4	KJⅡ-a区C	11.1	5.7	1.2	79	—	磨石	磨石	—
5	周溝跡の北側	19.9	10.5	3.1	563	—	磨石	磨石	—
6	KJⅡ-b区	7.4	(4.8)	2.5	111	—	磨石	磨石	—
7	KJⅡ-b区	7.4	(3.8)	1.0	32	—	磨石	磨石	—
8	KJⅡ-b区表	(9.9)	6.5	1.6	106	—	磨石	磨石	—
9	KJⅡ-b区表	(9.9)	6.5	1.6	106	—	磨石	磨石	—
10	周溝跡の北側	(9.6)	6.4	1.9	98	—	磨石	磨石	—
11	KJⅡ-b区	(9.0)	7.9	0.9	62	—	磨石	磨石	—
12	KJⅡ-b区	8.3	6.5	1.3	61	—	磨石	磨石	—
13	1-5号周溝内	(9.1)	(5.5)	1.2	53	—	磨石	磨石	—
14	KJⅡ-b区表	(4.1)	(4.3)	1.1	26	—	磨石	磨石	—
15	5号周溝内	(7.9)	4.6	0.9	40	—	磨石	磨石	—
16	KJⅡ-b区	(9.3)	(4.3)	1.3	76	—	磨石	磨石	—
17	KJⅡ-b区	—	—	—	22	—	磨石	磨石	—
18	KJⅡ-b区	(3.9)	(3.9)	1.0	34	—	磨石	磨石	—
19	2号周溝内	(6.0)	(6.1)	0.9	48	—	磨石	磨石	—
20	周溝跡の北側表	(4.5)	(8.5)	1.1	32	—	磨石	磨石	—
21	周溝跡の北側	5.9	10.9	1.9	125	—	磨石	磨石	—
22	KJⅡ-b区表	(3.2)	(4.4)	0.7	15	—	磨石	磨石	—
23	KJⅡ-a区	9.2	14.7	1.7	160	—	磨石	磨石	—
24	1号周溝内	(4.4)	(4.0)	1.5	40	—	磨石	磨石	—
25	5号周溝内	(11.4)	5.0	3.0	234	—	磨石	磨石	—
26	6号周溝内	16	(8.2)	4.9	—	—	磨石	磨石	—
27	6号周溝内	14.3	8.9	4.7	—	—	磨石	磨石	—
28	KJⅡ-b区	20.1	7.1	4.5	—	—	磨石	磨石	—
29	KJⅡ-b区	9.5	8.3	5.0	—	—	磨石	磨石	—
30	KJⅡ-b区	11.4	11.0	4.0	—	—	磨石	磨石	—

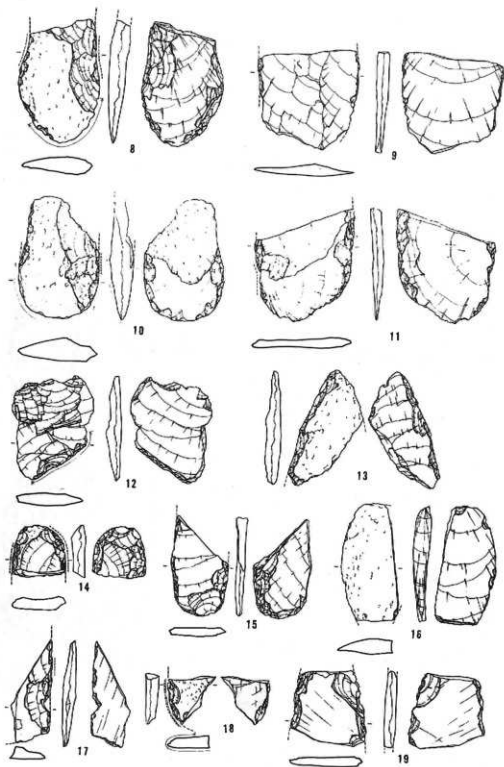
() は測定値である。

橋野遺跡 KJⅡ-a区 磨石類表(第88~90図)

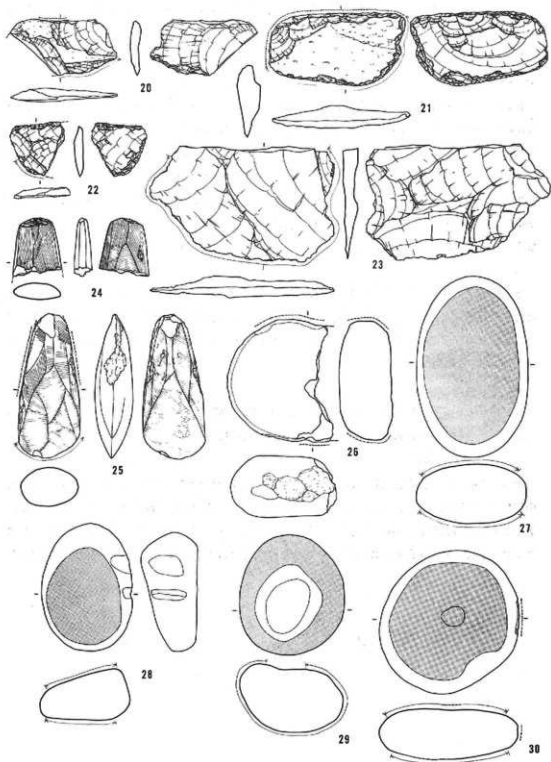
番 号	出土地点	計測値(α, β)	素材の高度	磨盤の長さ	磨盤の幅	磨盤の厚	磨盤の形状	磨盤の用途	欠損
1	13.3	7.1	2.1	282	—	—	磨石	磨石	—
2	14.0	5.9	1.9	204	—	—	磨石	磨石	—
3	12.2	5.8	1.6	105	—	—	磨石	磨石	—
4	5.9	8.8	1.6	74	—	—	磨石	磨石	—
5	(2.6)	(3.4)	1.2	10	—	—	磨石	磨石	—



第85図 楠野遺跡出土石器実測図 (1) (1/3)



第86図 楠野遺跡出土石器実測図 (2) (1/3)



第87圖 楠野遺跡出土石器実測圖 (3) (1/3)

とのできぬ要素である。さて、本遺跡出土の石斧はすでに述べたように表採品を含み、方形周溝基の溝内を含めて二次的な移動が考えられることから、欠損や使用痕には新しいキズを含んでいる可能性がある。また、その識別は軟質な石材が多いためか困難であった。本例では事実記載程度に留めたい。

報告した打製石斧のうち28点中完形品は11点である。したがって欠損品は17点である。その内わけは次の通りである。基部を欠損するもの5点、先端（刃）部を欠損するもの2点、両者を欠損するもの2点である。また、破片は基部（その周辺を含む）が4点、刃部が3点である。以上から見ると、基部欠損に関わるのは11例であり、刃部のそれは7例となり、前者の方が多い。石斧の着装形態と遺跡の性格を示すものかもしれない。また刃部がわかるものでは13点中7点に顕著な摩擦痕か線状痕が観察できた。線状痕は刃部のみに長軸方向に入っている。資料数が少なく、個別の使用痕としての比較検討が困難であるが、全体に頻繁な使用を物語る 것이라고考えられる。

B、磨石

本遺跡からは5点の磨石が出土している。全てこぶし大のやや平坦な円礫を利用している。石材は識別が困難であるが、全て火成岩質と考えられる。両平坦面に研磨痕が認められるもの（27・28・30）、平坦面中央に敲打による凹みが認められるもの（29・30）、側面に敲打痕が認められるもの（26・30）がある。

C、剥片石器

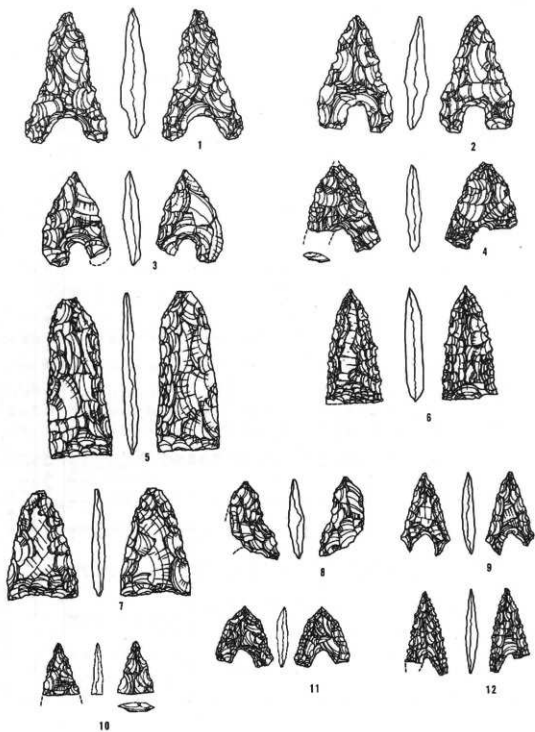
楠野遺跡6-5-7区で出土または採集された剥片、剥片石器類の内わけは第9表の通りである。なお、石材の分類は肉眼観察であり、表記は吉留1981に準じた。

1. 石鏃（1~21）

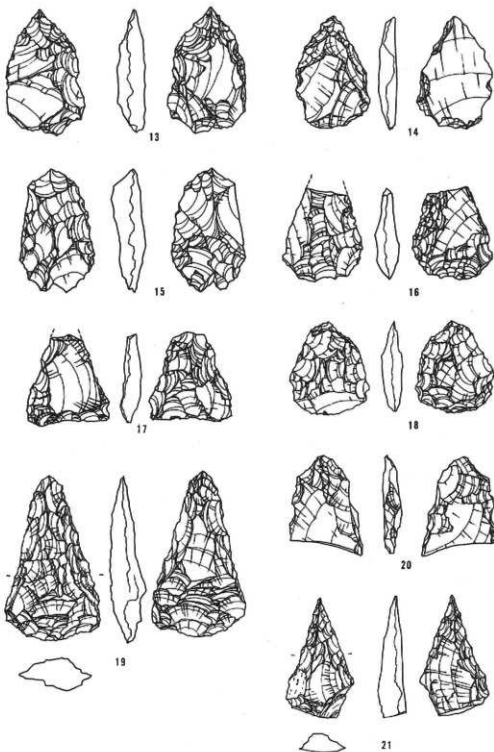
21点出土している。石材は肉眼観察で大きく3種類に区分できた。それはチャート2点、輝石安山岩12点、黒曜石6点である。このうち安山岩は風化の度合により、明らかに2分できるもので、2・3は他の石鏃が黒色の色調を持っているのに対し、青灰～白灰色を呈している。また黒曜石はさらに3分類され、姫島産黒曜石2点、松浦地方産黒曜石2点、漆黒色不透明風化強の黒曜石1

第15表 楠野遺跡剥片・剥片石器類石材別表

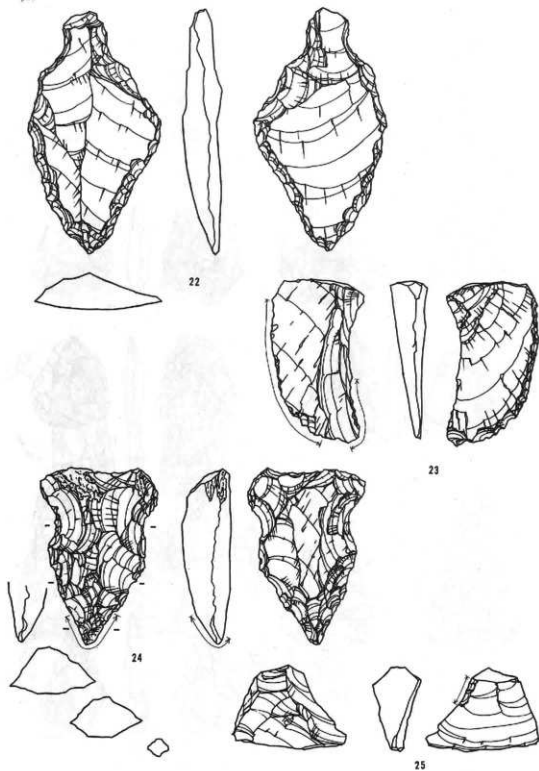
器種 出土地点	石 鏃				Screper	Core				Flake				Chip				計				
	黒曜石 a b c e	安山岩 f	チャート g	安山岩 h	安山岩 i	黒曜石 a c e	安山岩 f	黒曜石 a b c e	安山岩 f	チャート g	黒曜石 a b c	安山岩 f	チャート g									
KJ I-a区 包含層								1					1	1		3						
KJ I-a区縄文包含層								1	1	6		2	3			13						
KJ I-a区 区					1	1	1	1		1						6						
KJ II-a区 縄 縄	1	1		7	2			1	1	2					1	16						
KJ II-a区黒中包含層						2	1		1	2	1	3		3	2	2	17					
KJ II-a区 西トレン	1						1		1	4	6	2	1			1	17					
KJ II-a区 表 採		1	2			2	1		4	3	4	8		2		2	30					
6-7 月産高周		1	1	3		1			1		1	2					10					
小 計	2	0	3	1	12	3	6	3	1	1	2	15	5	14	2	20	4	6	3	5	2	2
計	21					6	7				60				18				112			



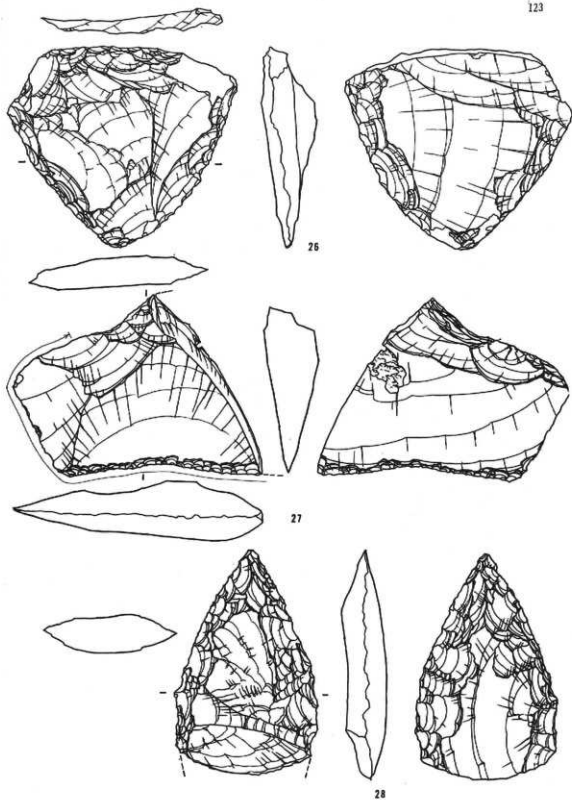
第88圖 楠野遺跡出土石器実測圖 (4) (1/1)



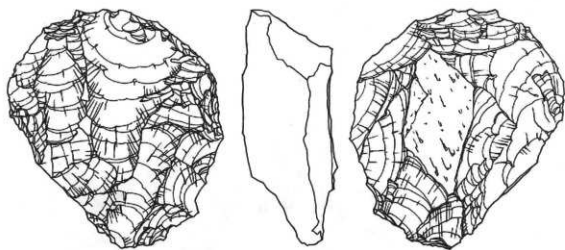
第89图 楠野遗址出土石器实测图 (5) (1/1)



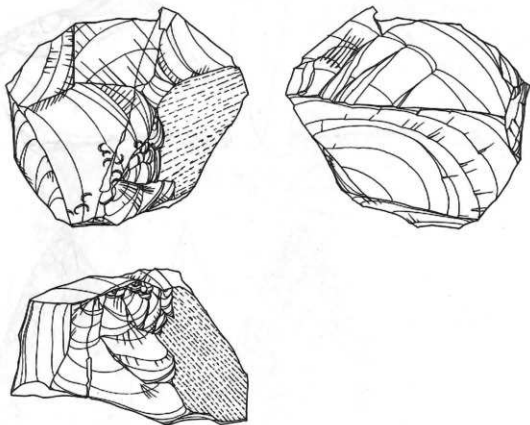
第90图 楠野遺跡出土石器实测图 (6) (1/1)



第91图 楠野遺跡出土石器実測図(7)(1/1)



29



30

点である。最後の石材の産地はなお不明であるが、阿蘇周辺ではないかと考えている。

次に形態であるが、未製品と考えた2点(20・21)を除き、すべて無茎礫であり、大きく平基式であるⅠ類と、凹基式であるⅡ類に区分される。さらにそれは次の様に細分される。

Ⅰa類(5~7)

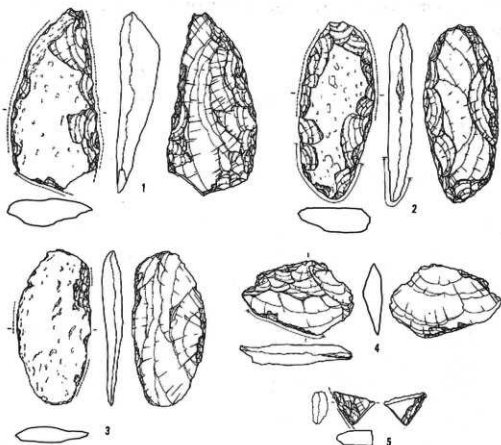
基本的には左右対称の二等辺三角形を呈し、先端近くでややすばまる。側辺に鋸歯加工を持つ例がある。

Ⅰb(13~19)

左右非対称で、素材の形状を残し、荒い作りのものが多い。底辺が曲線をえがく場合が多い。

Ⅱa(1~3)

長身であり、短い脚部はゆるく内折する。いわゆる「鉞形礫」である。



第93図 楠野遺跡出土石器実測図(9)(1/3)

Ⅱb (4・9・10)

長身であり、先端近くでややすぼまる。脚部端を「コの字」状に成形するもので、側面に鋸歯加工を持つ例が多い。

Ⅱc (8・10・11)

長身であり、脚部先端が尖る。側面は鋸歯加工を施す。

欠損は、未製品を除く19点中8点に認められる。部位は脚部5例、先端部3例であり、脚部ではⅠa、Ⅱa、Ⅱb類に見られる。資料数が少なく、その検討は避ける。

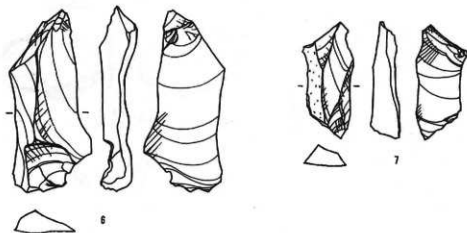
さて、以上の石鏃は石材、その風化状況、形態から単一の石器群の所産とは考えられない。周辺から出土している土器、石斧類はほとんど晩期前半のものである。比較資料に乏しいが、竹田市ネギノ遺跡^{註9}では、Ⅰa・d、Ⅱb・c類が出土しており、特にⅡb類を「駒形鏃」と呼び、晩期に比定している。また主に安山岩と黒曜石という石材も本遺跡の例と一致している。Ⅱa類については、荻町政所遺跡^{註4}、寺ノ前遺跡^{註7}の例から大きく縄文早期後半に位置付けられるものである。またⅠb類の一部もこれに伴うものらしい。以上の見地から石鏃を時期区分するならば、次のようになる。

縄文早期後半

Ⅰb類 (13・15・16)、Ⅱa類 (1～3)

縄文晩期前半

Ⅰa類 (5～7)、Ⅰb類 (14・17～19)、Ⅱb類 (4・9・10)、Ⅱc類 (8・10・11)、未製品 (20・21)



第94図 楠野遺跡出土石器実測図 00 (1/1)

2. 石 匙 (22)

1点だけ出土している。風化のあまり進んでいない輝石安山岩製である。不定形の縦長剥片を素材とし、周辺部の加工だけで整形している。使用痕は不明確で、つまみ部の磨滅なども認められない。類例がネギノ遺跡E-40グリットから出土している^{図1}。縄文晩期前半のものと考えられる。

3. スクレイパー (23・26・27)

全て、風化の進んでいない輝石安山岩製である。23は、縦長の不定形剥片を素材とし、両側辺を刃部としたものである。26は、末広がりの不定形剥片を横位に加工したもので、全体の整形加工を施し、三角形に仕上げている。二辺を刃部としている。27は、横長の不定形剥片を素材としたものである。打面側には若干の調整剝離を施し背とし、対する一辺を主に刃部としている。類例がネギノ遺跡^{図2}で採集されている。以上の3点も縄文晩期前半のものと考えられる。

4. 石 錐 (24)

風化の進んでいない輝石安山岩製であり、背部に自然面を残す厚手の不定形剥片を素材とする。周辺から入念な調整剝離が施されており、それには開放剝離も多い。基部には石匙に見られるようなつまみ部が作り出されている。先端部には著しい磨滅が観察される。先端近くの側面の各稜線上には微細な線状痕が認められる。それは、正面左側辺では右上がり、左側では左上がりに残されており、回転の作業ではなく、左右にひねりながら押す作業が復元できる。これには類例が無いが、石材の状態から縄文晩期前半のものと考えたい。

5. 尖頭器 (28)

風化の進んでいない輝石安山岩製である。やや厚手の横長剥片を素材とし、周辺からの入念な平坦剝離により製作している。背部、裏面には素材の剝離面を大きく残している。したがって剥片のゆがみをそのまま残している。一端を欠損するが、復元長は約8.5cmと推定される。石材の風化の度合から他の例と同様に縄文晩期前半の時期と考えられるが、その類例は現在ない。

6. 使用痕を持つ剥片 (25)

風化の強い輝石安山岩製の横長不定形剥片である。背面の剝離面は風化のため切り合いが明瞭でない。主要剝離面左側にわずかに刃こぼれが見られる。風化の度合は石錐のそれより強く、時期は縄文早期か、それ以前に遡る可能性もある。

7. KJII-a区縄文包含層出土剥片

全体で19点の剥片、石核類が出土している。(表-16)。ここでは、同時に出土した先土器時代遺物について報告する。6は、流紋岩製の縦長剥片である。打面両設であり、本剥片は剝離面の調整剥片の可能性がある。7も同じく、流紋岩製の縦長剥片である。打点部を失っている。背面には自然面を残し、下方からの剝離面も認められることから、打面両設の石核から剝離されたものと考えられる。6・7は接合関係は無いが、石材、色調、形態などの表面上の観察から同一母岩の可能性が高いと判断される。

D 石核 (29・30)

29は、黒色不透明な黒曜石を素材としている。裏面には自然面が残っている。裏面に残る石核打面調整剥離は左側→上・下部打面周辺→右側の順に行なわれている。剥片剥離面側では、左右側辺の剥離面調整→下方からの剥片剥離→上方からの剥片剥離の順で、この剥離を以って、木石核の剥離作業は終っている。30は、やや暗色気味の姫島産黒曜石を素材としている。片側に節理面を残している。剥離作業は次の様に復元される。まず節理面を打面として剥離する。これが石核の素材の剥出になると考えられ、次に左側からの荒い剥離を施し、さらに裏面の大きな剥離の後、現状の最終剥離を行なっている。その際に大きく分割したと考えられる。29は縦長の不定形剥片30は横長の不定形剥片の残核と考えられる。この2者の時期比定は困難であるが、風化が進んでいないこと、同じ石材の剥片が多く出土していることなどから、何れも縄文晩期前半の所産と考えられる。

3. ま と め

以上、楠野台地上の2遺跡出土の石器類について報告してきた。その結果それらは、3時期に分けられるものと考えた。古期のものからまとめると、次のようになる。

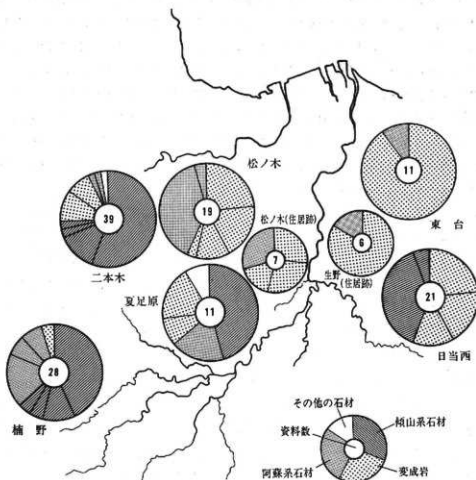
先土器時代の資料は、K J I地区の剥片2点とK J II-a区縄文包含層出土の剥片2点がある。何れも流紋岩製のもので、大野川流域の先土器時代遺跡群に一般のものである。それらの石器群の構造や所属時期は資料が乏しく不明である。

縄文時代早期の資料は、K J I地区とK J II地区に出土している。しかし、石鏃を除いて剥片や石核、それに不定形の石器が含まれると考えられるが、その抽出は困難である。石鏃は楠野遺跡においていわゆる「鉋形鏃」と不定形の「尖頭状石器」が認められた。共存土器はおそらく押型文土器群と推定されるが、その出土はない。「鉋形鏃」の形態は、やや大型であり、脚部が内折する古い形態をもっている。これはヤトコロ遺跡^{註10}や寺の前遺跡^{註11}の例より古い段階と考えられるが、早水台遺跡^{註12}の石鏃より粗雑であることから、早水台期より後出すると考えている。

縄文晩期前半の資料は、量・質共にK J II地区の主要な位置を占めるものと考えられる。これは、定形石器では、板状の素材を利用した打製石斧と、輝石安山岩と姫島産、松浦地方産黒曜石を利用した剥片石器群に代表されるものである。剥片石器群については、楠野遺跡の西方1.6 kmに位置するネギノ遺跡と時期、内容共に類似するものである。しかし、石鏃、尖頭器は新知見のもので、この時期の定形石器としての位置付けは、今後の資料の集積に待ちたい。

さて、楠野遺跡では縄文晩期前半の打製石斧（以下「石斧」と略す）をある程度まとまって得ることができた。以下では、これについて若干の検討をくわえたい。

大野川流域では縄文後期後半から晩期前半にかけての遺跡が急増する傾向が捉えられる。さらにこうした遺跡では特徴的に「石斧」を多く出土している。賀川光夫氏は、これを「扁平石器」「扁平打製石器」と呼び、農耕具と考え、氏の提唱する晩期農耕論の根拠としている。この農耕論の是非はともかく当該期の生産活動を考察する上で、この「石斧」の検討は有意義なものと考え



第95図 後期後半～晩期前半の打製石斧の石材

られる。

さて、大野川流域の縄文後期後半から晩期前半の遺跡で出土する「石斧」の量は、知られている限りでも膨大なものになる。緒方町大石遺跡は賀川氏らによる1958年より67年まで5次にわたる調査の結果、200点以上の「石斧」を出土し、1973年に渡辺誠氏によって調査された大野郡大野町宮地前遺跡でも約250点の「石斧」類が出土している。この他に大分県文化課によって調査された当該期の遺跡でも多くの出土がある。また、地元の研究者らにより採集された資料も多い。しかし、一部に概要が示されているだけで、これらは何れも正式の報告がなされず検討することができない。

これまで報告が示されたものを概観しながら楠野遺跡の資料を見て行きたい。

まず石材であるが、すでに見たように楠野遺跡の「石斧」の素材は大きく三種の産地のものから成っている(第95図)。過半数を占める傾山系の石材と、阿蘇山系の石材、それに少量の孤見変成岩である。こうしたあり方は周辺の晩期後半の遺跡でも一般的な状況のようである。断片的な報告例であるが、萩町岩戸口^{図18}、横迫遺跡^{図19}でも傾山系の石材を利用した「石斧」が出土している。同じ大野川流域でも中流へ下るとその様相はやや変わる。確実な晩期前半の単純資料はないが、野津町日当西遺跡^{図20}は、後期後半も含むが晩期前半の資料が主体を占める遺跡である。ここでは、傾山系の石材に対して大野川群群や臼杵一八代構造線上に産出する堆積岩や変成岩の利用が高く過半数に達している。これは素材の特徴から、多くが傾山系の石材と同様に河床円礫から剥出していると考えている。ただし、緑色片岩は露頭から直接採取した可能性がある。

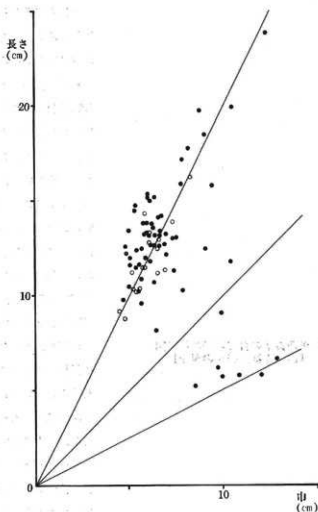
次に遡って後期後半の石材を見ると、さらに異なる状況が見られる。検討可能な資料は大野川中流域に限られる。大野郡大野町二本木遺跡^{図21}は弥生中～後期の集落跡であるが、住居跡の埋土中などに混在して縄文時代後期後半の資料が出土している。^{図22}その石材は7割以上が傾山系の石材を利用しており、変成岩と阿蘇系のものがそれに続く。大野町夏足原遺跡^{図23}は、縄文後期後半の単純遺跡であり、「石斧」がまとめて出土している。ここでは傾山系の石材は半数を割り、変成岩や同町片島に産出する安山岩の利用が目立つ。大野町松木遺跡^{図24}は弥生後期の集落跡であるが、重複して検出された縄文後期後半の住居跡内や周辺から「石斧」が多く出土した。石材の傾向は遺跡内で共通しており、過半数を超える変成岩や堆積岩等をもち、やや少なく片島産の安山岩を利用している。^{図25}変成岩や堆積岩は大野川東岸から得たものと考えられる。野津町生野遺跡^{図26}では縄文後期後半の住居跡から10数点の「石斧」が出土している。そのうち6点が紹介されている。5点は変成岩である。他に安山岩と玄武岩(玢岩のことか)が少量あるらしい。臼杵市東台遺跡^{図27}は、縄文後期後半の住居跡とその周辺からまとまった「石斧」が出土している。石材は9割が変成岩が占め、他に安山岩もある。素材の形状などから生野遺跡と同様に原産地の露頭から採取したと考えられる。

以上をまとめてみると、縄文後期後半に大野川の中流域では、遺跡ごとに各石材の利用頻度が異なることがまず注意される。同じ大野原台地に立地する二本木、夏足原、松木遺跡でもその差は顕著である。また大野川を挟んだ東岸の生野、東台遺跡も大野原台地と異なる石材利用が行なわれている。したがってこの時期は集落単位に石材供給が実施されていたと考えられる。その際に集落に近い原石が多用される傾向はあるが、松木遺跡のように遠隔地から供給している例もある。

晩期前半の遺跡はその資料が少ないが、中流域に日当西遺跡が挙げられる。ここでは周辺の生野、東台遺跡と同様に変成岩の利用度が高いものの、やや遠距離の産地となる傾山系の石材も4割に達している。楠野遺跡ではこの石材が過半数を占め、この時期に大野川流域では傾山系の石材の利用頻度が高まることが推定できる。積極的にみれば共通の石材利用に傾いていと捉えられる。しかし細かくは石材の種類が多いことや、遺跡の周辺に産出する石材の利用も多いことなどから、集落ごとの石材供給は、後期後半の段階から大きな変動はないと考えられよう。

ところで、大野川流域の「石斧」の石材、素材に対する検討は、まず賀川氏によって開始された。^{図28}

氏は大石遺跡の調査結果に基づき縄文晩期前半は「石斧」の素材である板状の剥片は大きく2種類の剥片剥離技術によって生産されているとした。^{a30} 横長の「石斧」は「石刀技法」、縦長の「石斧」は「石鋏技法」と定義する剥離技術より生産される素材を利用していると考えた。後期にはこうした技法は「遺跡内に石核又は剥片の存在がなく…技法が一定しない。」(賀川1967a)ことから、存在しないと考えている。しかしすでに楠野遺跡などで見たように晩期の遺跡でも、遺跡内から石核や剥片の検出



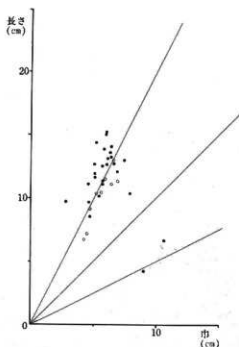
第96図 後期後半～晩期前半の打製石斧の相関図
(白ヌキは欠損品の現在長)

例はない。坂本氏の説くように多くの場合、「石斧」は河床で剥片剥離から2次調整までを終えて、集落へもたらされたと考えられるのである。したがって、そうした技法の存在は、大石遺跡だけに見られるものかどうかを再検討する必要がある。大石遺跡の「石刀技法」に用いられたとする石核を見る限り、砂岩に近い粗質の石材であり、同時に示してある「石斧」の石材とは著しく異なるようである。現状では晩期前半におけるこうした技法の存在は疑問視せざるを得ない。

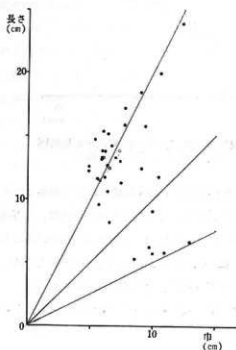
次に形態であるが、縄文後期後半から晩期前半を通して見てみよう(第96図)。「石斧」は大きさから次の3群に分けることができる。

A群、長さ16～24cm、巾8～12cm

B群、長さ10～15cm、巾5～7cm



第97図 後期後半の打製石斧の相関図
(白ヌキは欠損品の現在長)



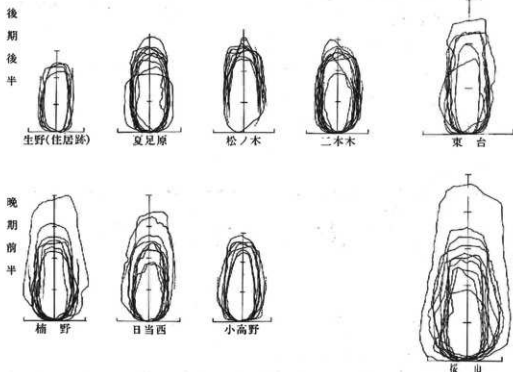
第98図 晩期前半の打製石斧の相関図
(白ヌキは欠損品の現在長)

C群、長さ5～7cm、巾8～13cm

B群とC群の間には漸移的な大きさの「石斧」もあるが、これの分類は類例の資料点数が少ないために避けた。

まず、後期後半の時期の「石斧」を見たい(第97図)。特徴としてあげられるのは圧倒的にB群が多いことである。それに少量のC群が伴うようだ。これは不定形であり、欠損品が多く形態などは不明な点が多い。そして、現在までの資料ではA群の存在が認められないことである。B群の形態は、「撓形」「短冊形」「分銅形」などと呼ばれるものを含むが、それらが定形的石器として存在するかは疑問である。遺跡ごとに形態差を見ると(第99図)、B群の巾が一定の規格性を保っているのがわかる。むしろ素材である不定形剥片に対する調整加工は「石斧」の巾の均一化を重視していると言えよう。形態はその製作段階で素材である剥片の形状に左右される場合があると考えている。さて、こうした遺跡内での「石斧」の巾の均一性は、いかなる意味を持つものであろうか。遺跡間でやや差が見られること、長さは約10～15cmとばらつきのあることなどから、著者は石器の着柄に関わるものと考えている。

次に、晩期前半の時期についてである。基本的な内容は後期後半と変わらないが、新たにA群とした大形の「石斧」が認められるようになる。また後期後半では巾に明確な均一性が見られたB群は、この時期に長さや巾においてもばらつきが認められるようになる(第98・99図)。したがってA群とB群の間にもやや漸移的な形態差が見られる。しかし、長さ16cmを越えるA群とした「石斧」は現在ま



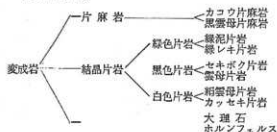
第99図 後・晩期石斧比較図 縮尺不同（1目盛り5cm）

でのところ後期後半の時期には認められず、形状やその重量がB群のそれとは大きく異なることから、新たな器種としてこの時期に出現すると考えることができよう。

最後に、欠損或使用痕から見た「石斧」の機能や用途について触れたい。^{図23}楠野遺跡の「石斧」では、その多くに使用痕が認められ、頻繁な使用を把握できた。それは形態A・B群においては、線状痕の形態から長軸に対して平行した力が加わったと推察できる。多くの後期後半から晩期前半の「石斧」でも同様の状況が捉えられる。これらは橋氏の説くように土壌に対する掘削という行為が、この使用痕を生み出す最も合致した機能と想定できる。^{図34}形態C群については、使用痕などの状況は不明点が多く、検討は困難である。

以上、楠野遺跡から出土した石器類について周辺地域の遺跡との比較の中で検討してきた。楠野遺跡を含む大野川流域は洪積世～沖積世の風化火山灰層の堆積状態が良好であり、先土器時代以降の遺構、遺物の保存状況は良い。本稿で検討の中心となった縄文晩期の石器群は、当地域の研究史上も議論を集めたものであった。最近、ようやくそれらを再検討できる素材が蓄積されてきた。今後、さらに研究を進める上で、条件の良い基盤を持つ地域であるだけにこうした基本的な資料の検討を繰り返して行きたいと考えている。(吉留)

- 注1 同定にあたっては、南大分中学校教頭野田雅之氏の御協力をいただいた。
 注2 変成岩のうち結晶片岩系石材の用語の混乱が見られるので、野田氏の教示に従い次の様な名称の序列を提唱したい。



- 注3 注1と同じ
 注4 吉留秀敏 「『Ⅶ区出土土片、裸核石器について』『荻台地の遺跡Ⅵ』1981 荻町教育委員会 (pp18—20)
 注5 富永直樹 「石器」『ネギノ遺跡』1976 大分県教育委員会 (pp37—51)
 注6 井上秀文 「b 石器類」『政所馬渡』1982 別府大学付属博物館 (pp33—43)
 注7 注4と同じ
 注8 注5と同じ
 注9 注5と同じ
 注10 牧尾義則 「ヤトコロ遺跡」『菅生台地と周辺の遺跡Ⅱ』1977 竹田市教育委員会 (pp10—13)
 注11 注7と同じ
 注12 賀川光夫他 「早永合」1955 大分県教育委員会
 注13 坂本嘉弘 「東九州における縄文後・晩期遺跡の動態」『賀川光夫先生還暦記念論集』1982 (pp31—53)
 注14 賀川光夫 「縄文晩期農耕の一端——いわゆる扁平石器の用途——」『考古学研究13—4』1966 (pp10—17) ほか
 注15 賀川光夫編 「縄文晩期農耕文化の研究に関する合同調査」1966 別府大学
 注16 渡辺 誠綱 「宮地前遺跡発掘調査概報」1973 平安博物館
 注17 まとまった資料の出土した遺跡として、上宮生B、夏足原、駒方遺跡などがある。
 注18 高橋信武 1978 「2 岩戸D遺跡」『荻台地の遺跡Ⅲ』荻町教育委員会 (pp5—9)
 注19 高橋信武 「8 横迫遺跡」『荻台地の遺跡Ⅳ』1979 荻町教育委員会 (pp15—18)
 注20 高橋信武、吉留秀敏 「1 日当西遺跡」『日当遺跡』1982大分県教育委員会 (pp53—58)
 注21 清水宗昭、坂本嘉弘、讃岐和夫 「二本木遺跡の調査」『大野原の遺跡』1980 大分県教育委員会 (pp9—109)
 注22 二本木遺跡出土の「石斧」は、報告者によって弥生終末〜古墳前期の所産と位置付けられている。また、近年ではそれを資料とした論考も見られる(松井1982)。しかし、筆者は出土した「石斧」のほとんどは縄文後期後半の時期のもので考えている。その根拠は、(1)埋土中より「石斧」の出土した住居跡の多くが縄文後期後半の土器が多く出土した地区に重複すること、(2)44号・32号のように「石斧」の出土の多い住居跡に縄文後期後半の土器の出土が多いこと、(3)形態・技術ともに周辺地域の当期の「石斧」の性格と一致すること、(4)検出された弥生終末〜古墳前期の住居跡のうち約3分の1しか「石斧」の出土例がなく、しかも量が少ないことなどから、住居跡等の掘削により縄文期の包含層から二次的に弥生終末〜古墳前期の住居に流れ込んだものと考えられる。
 注23 坂本嘉弘 「夏足原遺跡」『大野原台地の遺跡Ⅱ』1972 大野町教育委員会 (pp4—15)
 注24 牧尾義則、玉永光洋 「松木遺跡の調査」『大野原の遺跡』1980 大分県教育委員会 (pp115—193)。

注25 松木遺跡出土の「石斧」は、報告者は時期比定を避けている。著者はこれもやはり二本木遺跡と同様に縄文後期後半のものと考えている。その根拠は二本木遺跡と同様であるが、さらに本遺跡で一基検出された縄文後期後半の遺構より出土した「石斧」の諸要素が、他より出土した「石斧」のそれと共通するからである。

注26 注13と同じ

注27 栗田勝弘 「生野遺跡」『野津川流域の遺跡Ⅲ』1982 野津町教育委員会 (pp.3—12)

注28 賀川光夫他 『東台遺跡』1974 臼杵市教育委員会・臼津開発株式会社

注29 注14と同じ

注30 賀川光夫 「縄文晩期農耕文化に関する一問題—石刀技法」『考古学雑誌 52—4』1967 a (pp.1—9)

賀川光夫 「縄文後・晩期農耕文化の一問題—石鋸などについての分類と技法」『日本大学史叢』1967 b (pp.1—16)

ほか、

注31 注13と同じ

注32 ただし、ばらつきの中でも注意すると遺跡内において市で数割にまとまる傾向を捉えることができる。これを幾つかの均一性として把握するには資料が少なく困難である。

注33 この「石斧」の用途については早くから賀川氏によって考察がなされている(賀川1967a・bなど)。しかし、氏は縄文後・晩期に農耕の存在を想定し、資料の分析をへずに「石斧」の機能や用途を決定している点がみられる。著者は考古学的方法として用途などの追求は、遺跡内での遺物のあり方と、遺物個々の属性の分析から始めなければならないと考える。

注34 横 昌信 「使用度に関する一考察」『古代文化21—9・10』1969 (P.213—219)

参考文献

松井和幸 「大陸系磨製石器類の消滅とその鉄器化をめぐって」『考古学雑誌68—2』1982 (pp.1—43)

図

版

圖 1 桶野台地航空写真





楠野 A 地区 東側 近景 (南から)



楠野 A 地区 西側近景 (北西から)



第1号竪穴(上)・第5号竪穴(下) (両者とも西から)



第 2 号 竪 穴 (東 から)



第 3 号 豎 穴 (東 から)



第6号竖穴(上)・第7号竖穴(下) (両者とも東から)



第8号竖穴(上、東から)・第9号竖穴(下、南西から)



第 10 号 竪 穴 (西 から)



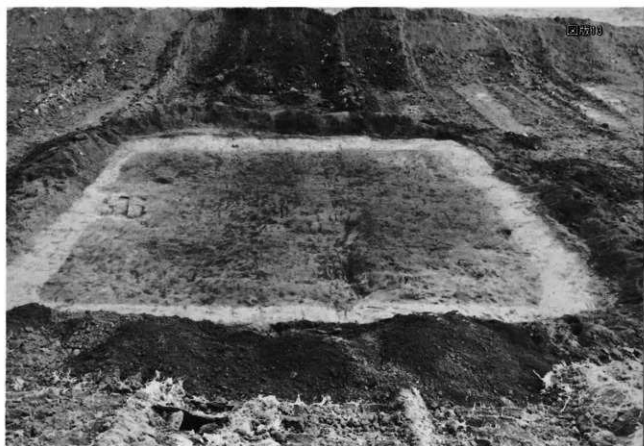
第11号竖穴(上、南から)・第12号竖穴(下、西から)



第13号竖穴(上、北から)・第14号竖穴(下、北から)



第15号竪穴(上、南東から)・第16号竪穴(下、南東から)



第 17 号 豎 穴 (西 から)



方形周溝墓群全景（北から）



第7号方形周溝墓(上、北から)・第2号方形周溝墓(下、北から)

第6号方形周溝墓
(北東から)

第3・4・5・7号
方形周溝墓
(北から)

第1号方形周溝墓
(西から)

第7号方形周溝墓
北溝（西から）



第2号方形周溝墓
北東コーナー部
（南東から）



第6号方形周溝墓
南東コーナー部
（北西から）



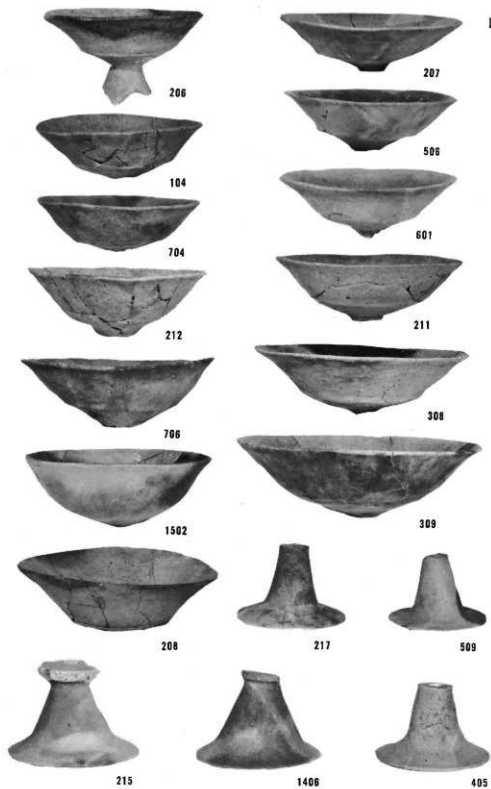


(南西から)



第2号方形周溝墓
南溝底土壇墓

(西から)





305



1209



301



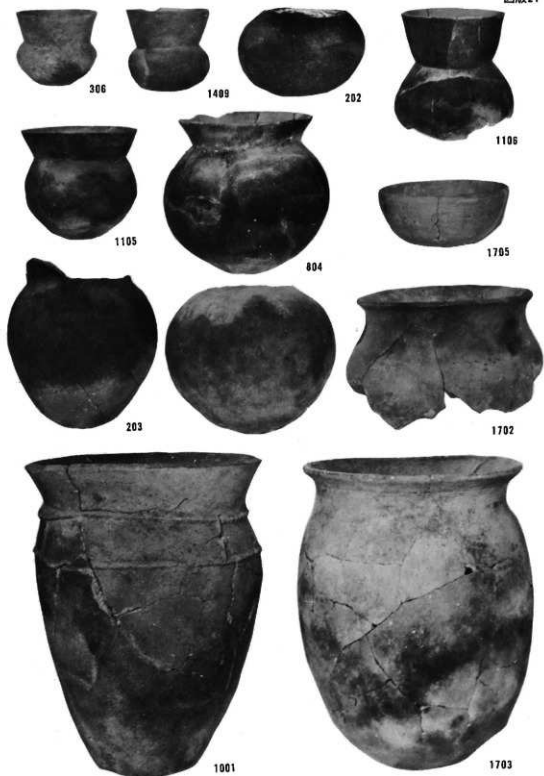
302

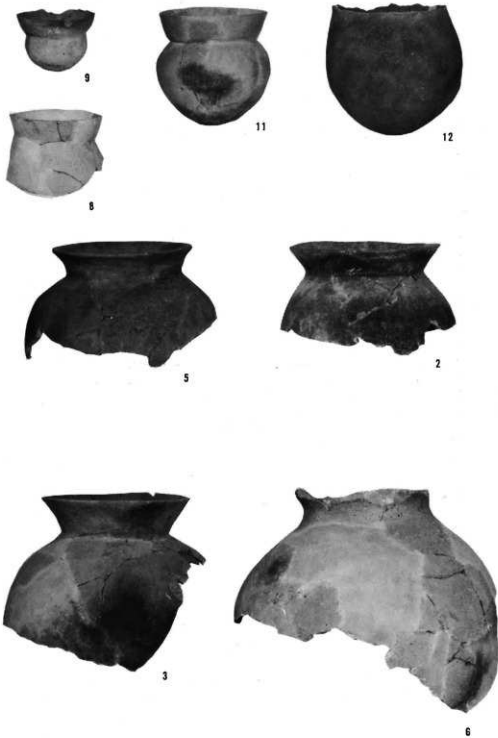


907



303







13



14

方形周溝墓出土土器 (2)



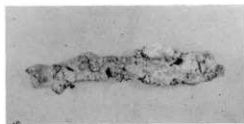
方3



方2



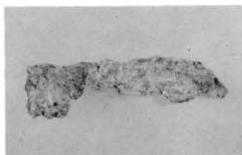
3号



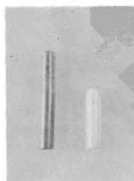
14号



方1



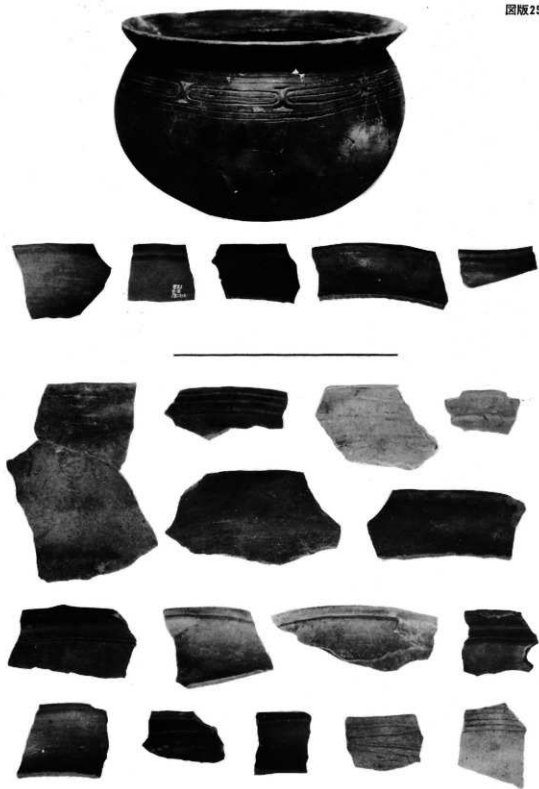
5号



12号(左)・14号(右)



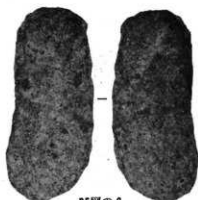
17号



绳文式土器KJⅡ-a地区(上)・KJⅡ-b地区(下)



85図の1



85図の2



85図の3



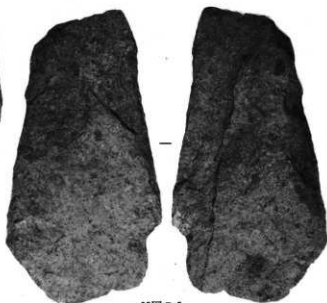
85図の4



85図の6



85図の7



85図の5

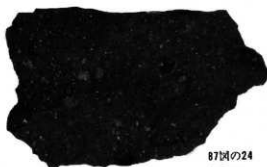


93図の1

93図の2

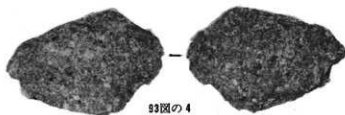


93図の3



87図の23

87図の24



93図の4



87図の21



87図の25



88図の1



88図の2



89図の13



89図の14



88図の3



88図の4



89図の15



89図の16



88図の5



88図の6



89図の17



89図の18



88図の7



88図の8



88図の9



89図の20



88図の11



88図の12



88図の10



89図の19



89図の21



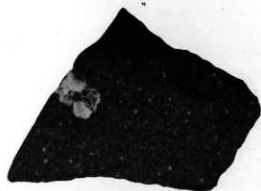
90図の22



90図の24



90図の23



91図の27



91図の28



91図の26

楠 野

大分県竹田市所在遺跡発掘調査報告書

大分県文化財調査報告

第 63 輯

1983年3月

発行 大分県教育委員会

印刷 明治印刷株式会社

正 誤 表

第 5 4 函

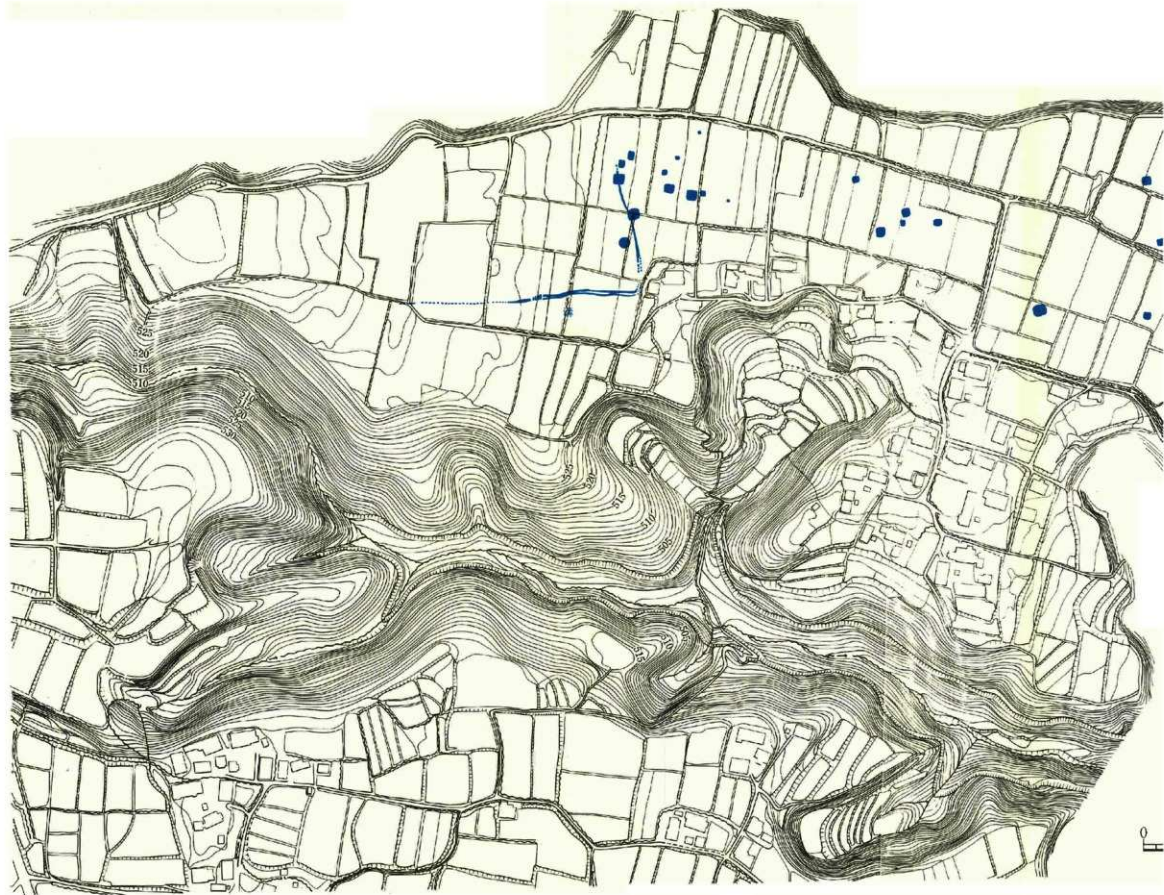
5 号 → 3 号

6 号 → 4 号

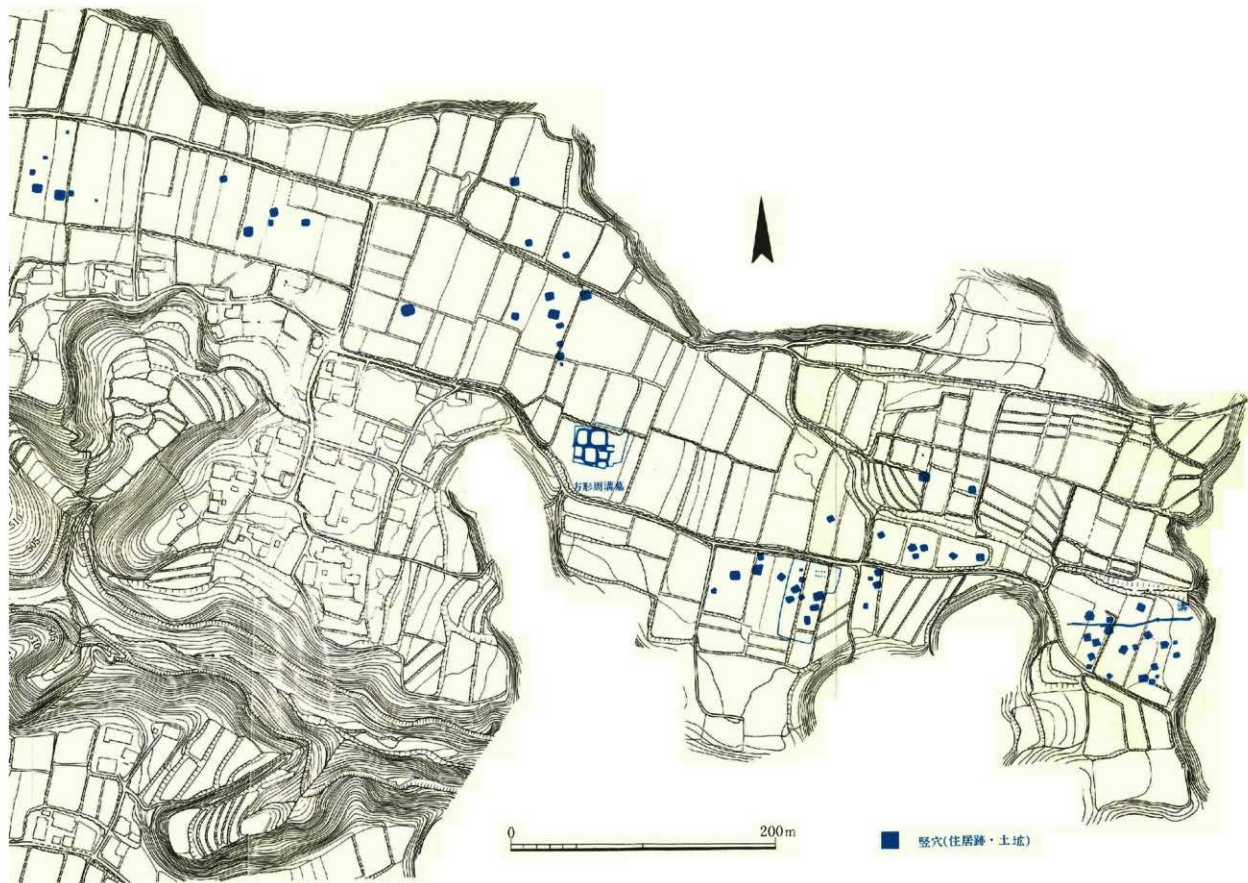
7 号 → 5 号

3 号 → 6 号

4 号 → 7 号



付図1 楠野原台地の地形図及び発見さ



付図1 楠野原台地の地形図及び発見された遺構